年　　表

○明治5年(1872年)までは旧暦の日付を使用した。
○ゴシックの月の記事は本学関係記事とし，ゴシックでない月の記事は医事関係記事・京都府記事・主要社会記事などとした。

1857年（安政3・4年）

安政3.12.6～12.30，**安政4.1.1～11.16**

11月　Pompe van Meerdervoort（オランダの海軍医官）によって長崎に医学伝習所が開設された。

1858年（安政4・5年）

安政4.11.17～12.30，**安政5.1.1～11.27**

5月　伊東玄朴ら82名の蘭方医によって江戸の神田お玉ケ池に種痘館が開設され，種痘の普及・西洋医学の研究が行なわれた。これが東京大学医学部の始まりである。

1859年（安政5・6年）

安政5.11.28～12.30，**安政6.1.1～12.8**

5月　種痘館(安政5年11月に類焼)が下谷和泉橋通に新築されて，移転した。
10月　種痘館の蘭方医が小塚原刑場で女刑屍の解剖を行なった。

1860年（安政6・7年，万延1年）

安政6.12.9～12.30，**安政7.1.1～3.17，万延1.3.18～11.21**

7月　種痘館が幕府の直轄となり，種痘所と改称された。

1861年（万延1・2年，文久1年）

万延1.11.22～12.30，**万延2.1.1～2.18，文久1.2.19～12.1**

9月　長崎に長崎養生所が開設された。
10月　種痘所が西洋医学所と改称され，西洋医学の教育が始められた。

1863年（文久2・3年）

文久2.11.12～12.29，**文久3.1.1～11.21**

2月　西洋医学所が医学所と改称された。

1865年（元治1・2年，慶応1年）

元治1.12.4～12.29，**元治2.1.1～4.6，慶応1.4.7～11.14**

10月　長崎養生所が精得館と改称された。
この年　明石博高(ひろあきら)・新宮涼閣・新宮涼民・柏原学介・桂文都らの蘭方医によって京都で医学研究会が結成された。(京都)

1867年（慶応2・3年）

慶応2.11.26～12.30，**慶応3.1.1～12.6**

10月　第15代将軍徳川慶喜が政権を朝廷に奉還し，将軍職から去った。

1868年（慶応3・4年，明治1年）

慶応3.12.7～12.30，**慶応4.1.1～9.7，明治1.9.8～11.18**

12月　王政復古の大号令が発布された。
1月　鳥羽・伏見の戦をもって戊辰戦役が始まった。
2月　新政府の公報として太政官日誌が創刊された。
3月　五箇条の御誓文が発布された。
西洋医学の採用が布告された。
4月　江戸城が開城され，徳川慶喜は水戸に退隠した。
京都府が29日(新暦6月19日)に発足した。府庁は神泉苑西の東町奉行所跡に置かれた。(京都)
大津裁判所総督長谷信篤が京都府知事に就任し，京都府の初代の知事となった。(京都)
医道の宗家錦小路頼言が官許を得て烏丸一条の施薬院三雲宗順邸に病院を開設し，木村得正・明石博　高が医事を担当した。(京都)
横浜に仮軍事病院が開設され，東北地方の兵乱の負傷兵が収容された。
7月　江戸が17日に東京と改称された。

9月 昌平坂学問所が昌平学校，開成所が開成学校と改称された。
横浜の仮軍事病院が東京の下谷へ移転して，大病院と改称され，医学所は大病院の所管に移された。
明治天皇が東京へ行幸された（9月20日京都出発，10月13日東京到着）。
10月 江戸城が東京城と改称された。
精得館が長崎府医学校と改称された。

1869年（明治1・2年）

明治1.11.19～12.29，明治2.1.1～11.29

12月 産婆取締規則が公布され，堕胎が禁止された。
明治天皇が京都へ帰還された。
1月 上京区東洞院御池の私設種痘所の有信堂が府の種痘所となった。有信堂は嘉永2年1月に熊谷直恭(鳩居堂の先祖)の資金援助のもとに楢林栄建らによって開設されたもので，種痘の普及・貧民の施療を行なってきた。(京都)
大病院が東京府の所管に移された。
2月 東京の医学所が大病院と合併して，医学校兼病院と改称された。
大坂府病院の仮病院が東区上本町4丁目の大福寺内に開設された。
3月 東京遷都が行なわれた。
5月 上京区に第27番組小学校（後の柳池小学校）が設置された。これはわが国で最初の小学校であった。なお，この年内に市内で64の小学校が設置された。(京都)
大坂に舎密局が開設された。
榎本武揚が投降し，戊辰戦役が終わった。
6月 昌平学校が大学校と改称され，開成学校と医学校兼病院は大学校の分局となった。
7月 東京・京都・大坂の3府以外は県と改称された。
長崎府医学校が長崎県医学校と改称された。
8月 蝦夷地が北海道と改称された。
医学校での死体解剖が許可された。
10月 府庁が上京区第20組藪之内町(現在地)の旧軍務官屋敷(元の守護職屋敷)へ移転した。(京都)
11月 医学校規則が制定され，修業年限は5年と定められた。
大坂医学校が開設された。

1870年（明治2・3年）

明治2.11.30～12.30，明治3.1.1～11.10

12月 京都学校が開設された。(京都)
大学校が大学と改称され，開成学校は大学南校，医学校は大学東校と改称された。
1月 「日の丸」の国旗が制定された。
大教宣布の詔勅が発布され，廃仏棄釈(仏教排斥運動)が活発化した。
2月 大坂医学校病院が東区鈴木町の代官屋敷跡に竣工した。(明治3年までは大坂)。
新政府でドイツ医学の採用が決定され，大学東校の外人教師にドイツ人医師が招聘されることになった。
4月 種痘の実施が各府県に布告された。
5月 京都府の種痘所が大学東校に移管され，医学校治験並種痘所と改称された。(京都)
7月 下京区祇園神幸道に私設の芸娼妓梅毒治療所として療病館が開設された。(京都)
8月 大坂・神戸間に電信が開通した。
9月 平民に姓が許された。
10月 明石博高が京都府少属に任ぜられた。(京都)
大学東校に正則生徒(5年制)と変則生徒(3年制)が設けられた。

1871年（明治3・4年）

明治3.11.11～12.29，明治4.1.1～11.20

11月 上京区で Rudolf Lehmann を教師として洋学所独逸学校が開設された。(京都)
12月 横浜毎日新聞が創刊された。これはわが国で最初の日刊紙であった。
2月 明石博高らの医学研究会から病院・医学校の設置についての建議書が京都府に提出されたが，却下された。
3月 郵便切手が初めて発売され，郵便箱が設置された。
西京郵便役所が開設された。(京都)
医学校治験並種痘所が医学校から京都府に返還され，種痘館と改称された。(京都)
前田松閣が種痘館の医員惣長に，江馬権之助が医員惣長補助に任ぜられた。(京都)

洋学所が上京区河原町二条下ルの勧業場内に移転し，欧学舎と改称された。（京都）
上京区河原町二条上ルの高田派別院内にChar lesBal dwin（アメリカ人）を教師として欧学舎英学校が開設された。（京都）
4月　戸籍法が公布された。
5月　新貨条例が公布され，1両が1円と改称された。
新痘苗が各府県に配布された。
6月　府庁が二条城へ移転した。（京都）
7月　廃藩置県が布告された。
大学が廃止されて文部省が新設された。
大学東校が東校と改称された。
8月　華士族と平民との結婚が許可された。
9月　正午号砲制（ドン）が設けられた。
官吏の歳禄制が月給制に改められた。
10月　府少属明石博高の奔走により禅林寺（永観堂）住職東山天華・願成寺住職与謝野礼厳・慈照寺（銀閣寺）住職佐々間雲厳の3名が発起人となり，市内の著名寺院の住職40余名から連名で病院建設嘆願書が京都府に提出され，京都府から療病院建営の告諭が出された。
府の窮民授産所費用にあてられていた遊所科税（芸娼妓冥加銭割）が療病院維持費にまわされることになった。
10月　東校の学制が改正され，修学年限が予科3年・本科5年と定められた。
上京区木屋町三条下ルでLé onDur y（フランス人）・José phine Dur y（フランス人）を教師として欧学舎仏学校が開設された。（京都）
大阪に施薬院が開設され，芸娼妓の検梅が行なわれた。
11月　府少属勧業掛明石博高が療病院掛兼務を命ぜられた。
東山天華・与謝野礼厳・佐々間雲厳ら，府下の67名の住職が療病院勧諭方を命ぜられた。
上京区河原町二条上ルの高田派別院内に療病院創立事務所が設けられて資金勧募が始められ，年内に数千名から10万円の資金が集められた。
11月　東校に種痘局が置かれ痘苗が分与された。

1872年（明治4・5年）

明治4.11.21～12.30，明治5.1.1～12.2

京都療病院・京都療病院生徒

11月　府県の廃合が完了し，3府72県となった。
12月　療病院創立事務所が下京区寺町四条下ルの大雲院内に移された。
種痘館医員惣長前田松閣が大阪の貿易商Lehmann（レーマン）・Hartmann（ハルトマン）商会に療病院教師（ドイツ人医師）の斡旋を依頼した。
12月　長崎県医学校が長崎医学校と改称された。
京都に舎密局（理化学試験所）が開設された。（京都）
新紙幣が発行され，旧紙幣の交換（明治5年2月15日実施）が布告された。
1月　人口調査が実施され，戸籍簿（壬申戸籍）が作成された。
2月　東京日日新聞が創刊された。
文部省に医務課が設置された。
粟田口村日ノ岡刑場の裏山に舎密局所管の解剖所（粟田口解剖所）が開設された。（京都）
大阪の施薬院が廃止され，駆黴院が設置された。
3月　浜田地震（7.1マグニチュード）がおこった。
4月　上京区土手町丸太町下ルに府の新英学校・女紅場（女学校）が開設された。（京都）
西京電信局が開設され，京都・大阪間に電信が開通した。（京都）
日曜休暇制が定められた。
7月　全国に郵便が施行された。
東校の医学規則が制定され，修学年限は予科2年・本科5年とされた。入学定員は100名であった。
8月　学制が公布されて，全国が8大学区に分けられ，各大学区に大学が設置されることになった。
東校が第一大学区医学校，大阪医学校が第四大学区医学校，長崎医学校が第六大学区医学校と改称された。
9月　Junker（ユンケル） von Langegg（別名F.E. Junker de Langegg，英国国籍のドイツ人，婦人科医，36歳）が3年契約で療病院教師として招聘され，7日に入洛した。
京都療病院の仮療病院（木屋町療病院）が15日（新暦10月17日）に上京区木屋町二条下ル

上樵木町の Junker の仮宿舎に仮設された。
9月 第四大学区医学校・大阪府病院が廃止された。
新橋・横浜間にわが国最初の鉄道が開通し，鉄道開通式が挙行された。
10月 前田松閣・江馬権之助・小石中蔵・楢林建吉・新宮涼閣・真島利民・安藤精軒が療病院の当直医に任ぜられた。
愛宕郡第2組粟田口村の天台宗青蓮院(しょうれんいん)内に旧粟田宮邸を改造した京都療病院の仮療病院が竣工し(総費用4万円)，25日に木屋町療病院がここに移転した。
療病院の標旗に赤十字旗が用いられた。
11月 粟田口村の青蓮院内に京都療病院の仮療病院(粟田口療病院)が開設され，1日に開業式が盛大に挙行された。これが本学の始まりである。
療病院治療条則が制定された。
療病院入学生徒条則が制定され，療病院生徒が募集されて，医学教育が始められた。修業年限は3年であった。
療病院教師課業表(授業時間割)が制定された。
種痘館が療病院の所管に移され，市内の開業医が交代で勤務した。
京都療病院新聞(不定期)が大黒屋から創刊された。
11月 太陽暦の採用が9日に布告された。
12月 太陰暦は2日限りで廃止され，太陰暦の12月3日をもって太陽暦の明治6年1月1日に改められた。

1873年（明治6年）

明治5.12.3が太陽暦の明治6.1.1

1月 1日から太陽暦が実施された。
徴兵令が布告された。
2月 粟田口解剖所で1日から13日までの間に，療病院掛明石博高が執事となって，新宮涼閣・新宮涼民・大村達斎・木村得正・真島利民・安藤精軒らによって4体の無籍の刑屍の解剖が行なわれた。維新後の京都における初めての解剖で，数百名の医師が参観した。
粟田口解剖所が舎密局から療病院の所管に移された。
療病院生徒は欧学舎の独逸学校で，教師 Rudolf Lehmann(レーマン)について，理化学を学習することになった。
永松東海が療病院医務取締に任ぜられた。
2月 大阪府病院が再び開設され，これに教授局が附設された。
3月 山田文友が通弁(英語)に任ぜられた。
3月 神武天皇即位の日をもって紀元節と定められた。
文部省の医務課が医務局に昇格した。
4月 療病院日講録(Junker von Langegg の解剖学講義の口述書)が創刊された。
4月 8大学区が7大学区に改められ，長崎の第六大学区医学校は第五大学区医学校と改称された。
6月 病屍の特志解剖が許可された。
7月 紀元節が2月11日と定められた。
8月 医務取締永松東海が第一大学区医学校教授に転出のため退職した。
9月 仮療病院内に施療患者病室が設けられ，病療院生徒の実習場にあてられた。
10月 仮療病院内に仮解剖所が新設された。
京都療病院新聞が第4号で廃刊となった。
10月 東京の慶応義塾(慶応4年4月設立)に医学所が設置された。
軍医寮学舎が軍医学校と改称された。
11月 京都療病院設立事由体裁等報告書が文部省へ答申された。
11月 内務省が新設された。
12月 半井澄(さやか)(精得館出身)が療病院庶務取締に任ぜられ，内科学を担当し，内科学の初代の担当者となった。
東本願寺から療病院に建物が寄付された。

1874年（明治7年）

1月 療病院の仮解剖所で脳脊髄膜炎患者(22歳の女)の遺体の解剖が行なわれた。療病院における最初の病理解剖であった。
1月 半井 澄が医事研究団体である京都医事会社を設立した。(京都)
2月 療病院の職制が制定され，管学事が置かれることになった。
庶務取締半井 澄が管学事に任ぜられた。
2月 京都慶応義塾が開設された。(京都)
3月 東京に司薬場が開設され，薬品検査が行なわれた。
4月 療病院入学生徒条則が改正され，療病院生

徒規則・療病院舎則が新たに制定され，修業年限が4年に改められた。

4月　台湾征討が開始された(12月完了)。

5月　療病院日講録が廃刊となった。

5月　大阪・神戸間に鉄道が開通した。
第一大学区医学校が東京医学校，第五大学区医学校が長崎医学校と改称された。
開成学校が東京開成学校と改称された。

6月　授産所・懲役場・監獄における患者の治療が療病院に委託された。

6月　新英学校が英女学校と改称され，男子生徒は欧学舎英学校へ移された。(京都)
府に織工場が開設された。(京都)

7月　京都府の医術開業試験が療病院で行なわれることになった。これはわが国で最初の医術開業試験制度であった。

7月　千葉に共立病院が開設された。

8月　医制が発布され，衛生行政機構・医学教育制度・医療制度・医術開業免許制度・医薬分業制度等が制定された。
医制によって医学校の修学年限は予科3年・本科5年と定められ，予科には14歳以上の小学校卒業生が入学した。

9月　療病院に管医事が置かれることになった。
管学事半井澄が管医事を兼任した。

9月　東京府病院が開設された。
京都慶応義塾が廃止された。(京都)

10月　上京区第12組梶井町の官地に京都療病院・医学校の新築が決定した。

10月　種痘規則が公布され，強制種痘が行なわれることになった。
長崎医学校が廃止されて，学生は東京医学校へ移された。

11月　京都府管内の医事主管が療病院から京都府に移された。

11月　長崎県病院が蕃地事務(支)局病院に転用された。
読売新聞が創刊された。
京都府に医務掛が設けられ，明石博高・鈴木守行が医務掛を命ぜられ，新宮凉民が医務取締長，江馬権之助が医務取締副長を命ぜられた。(京都)
大阪・神戸間に鉄道が開通した。

12月　京都医務条例が制定された。(京都)
医師の総数は28,262名(このうち西洋医は5,274名)であった。

1875年（明治8年）

1月　小学校の学齢が満6歳から14歳までと定められた。

2月　管学事兼管医事のほかに単独の管学事が置かれることになった。
当直医神戸文哉が管学事に任ぜられた。

2月　医術開業試験の実施が文部省から3府に布達された。
京都司薬場が舎密局内に付設された。(京都)

3月　大阪司薬場が開設された。
ビールが売り出された。

4月　上京区第12組梶井町（現在地）の官地（元日光里坊・二条・正親町の3旧邸合地9,149坪）で京都療病院・医学校の新築工事が起工された。このときの地ならし工事には市民が砂持の労力奉仕を行なった。

4月　太政官職制が改正されて，左院・右院が廃止され，元老院・大審院が設置された。

5月　園部町に療病院支院が開設されたが，数カ月で廃止された。

5月　郵便貯金が始められた。
医制から医学教育に関する部分が除かれた。
東京医学校に別課(3年制)が設置された。
長崎の蕃地事務(支)局病院が長崎県に返還され，長崎病院と改称された。

6月　東京医学校教授萩原三圭(精得館出身，ベルリン大学へ留学）が解剖科教授に任ぜられ，解剖学の初代の担当者となった。

6月　医務局が文部省から内務省に移管されて，第七局と改称された。
松本順ら50余名が医学会社を設立した。これは医学会の始まりである。

7月　南禅寺村の南禅寺内に療病院管理の仮癲狂院が開設された。これはわが国で最初の精神病院であった。
当直医真島利民が癲狂院の院長に任ぜられた。

7月　知事長谷信篤が元老院議官に転出し，京都府参事槇村正直が知事に就任し，第2代の京都府知事になった。(京都)

8月　癲狂院規則・癲狂院治療条則が制定された。
田村克己が解剖科教授副に任ぜられた。

9月　解剖科教授萩原三圭が管学事に任ぜられた。

療病院教師 Junker von Langegg の契約期間が6カ月延長された。

11月 上京区寺町丸太町上ルに同志社英学校が開設された。(京都)

1876年（明治9年）

1月 内務省の第七局が衛生局と改称された。
医術開業試験の実施が内務省から各府県に布達され，各府県で試験が行なわれることになった。

2月 職員俸給支給規則が制定された。

3月 療病院教師 Junker von Langegg が契約期間満了で解雇された。
C.G. van Mansvelt（マンスヘルト）（オランダ人，元精得館教師，前熊本医学校教師）が3年契約で療病院教師として招聘された。これは管医事半井澄の精得館時代の学友の内務省衛生局長長与専斎の推薦によるものであった。

4月 男子20歳が丁年と定められた。
内務省から各府県に検梅の実施が布達された。
京都府仮中学校が設立された。(京都)
京都府師範学校が設立された。(京都)
県立新潟病院が開設された。

5月 上京区下立売通新町の京都府仮中学校内に療病院管理の医学予科校(3年制)が Rudolf Lehmann を教師として開設された。
教師 C.G. van Mansvelt の勧告により，管学事兼管医事が廃止されて，院長が設けられた。
管学事兼管医事半井澄が京都療病院の初代の院長に任命された。
管学事神戸文哉が編輯係に任ぜられた。

5月 女紅場が京都府女学校と改称された。(京都)
天然痘予防規則が制定された。

6月 医学予科校校則が制定された。

6月 長崎病院に医学教場が設置された。
千葉の共立病院に医学教場が設置された。
京都府で駆黴規則が制定され，娼妓は毎週1回検梅をうけることになった。(京都)

7月 大阪・京都間に鉄道が開通した。(京都)

8月 京都司薬場が廃止された。(京都)
横浜司薬場・長崎司薬場が開設された。

9月 下京区大和大路四条下ルの建仁寺内福聚院に療病院出張の仮駆黴院が開設され，当直医木下凞が主任を命ぜられた。
五番町・南園小路・揚屋町・伏水の4カ所に検黴所が設けられ，療病院から検黴医員が出張した。有毒娼妓は仮駆黴院に収容された。
仮駆黴院定則（各区検黴所定則・療病院出張仮駆黴院定則）が布告された。

9月 東京府病院に産婆教授所が設置された。
東京医学校から第1回の卒業生(25名)が出た。これは明治4年の入学生であった。

10月 西洋医学の紹介誌として西医雑報(月刊)が療病院から創刊された。

12月 医学校の総数は9校（官立1校，公立4校，私立4校）であった。

1877年（明治10年）

1月 売薬規則が制定された。

2月 明治天皇が，関西行幸の際，有栖川宮熾仁親王を御名代として療病院・癲狂院へ差遣され，療病院へ2,500円，癲狂院へ25円を下賜された。

2月 西南の役がおこった。
死因不明の変死体の解剖が許可された。
劇毒薬取扱規則が制定された。
東京医事新誌が創刊された。

3月 槙村正直知事は，療病院教師 C.G. van Mansvelt を解雇するため，駐独青木周蔵全権公使に療病院教師の推薦を依頼した。この直接交渉は後に外務卿の不興を買うところとなった。

4月 西南の役の傷病兵の治療補助のために，12名の医員が大阪臨時陸軍病院へ派遣された。

4月 東京開成学校と東京医学校が合併して東京大学が設立され，法学部・文学部・理学部・医学部の4学部が設置された。これによって東京医学校は東京大学医学部となった。

5月 佐野常民らによって，西南の役の傷病者の救護のために，博愛社が設立され，戦地に病院が開設された。これが日本赤十字社の始まりである。
葛野郡宇多野村に避病院が開設された。(京都)

同志社分校女紅場が開設された。(京都)

7月　京都御所内の御寮屋2棟が病舎として療病院へ下賜された。昭和13年7月の療病院改築の際に，この建物の材料で3間半四方の平屋建1棟が新築され，恩賜館と名付けられて，看護婦静養室にあてられた。

8月　療病院教師 C.G. van Mansvel tが大阪府病院に転出した。

ライプチッヒ大学助手 Hei nri chBotho Scheube（ショイベ）（ドイツ人，内科医，27歳）が3年契約で療病院教師として招聘された。

8月　第1回内国勧業博覧会が東京で開催された。

9月　療病館が仮駆黴院の分病室に使用された。

10月　西医雑報が第13号で廃刊となった。

12月　東京大学医学部のほかに，医学校は公立11校，私立7校であった。

1878年（明治11年）

1月　長崎病院医学教場が県立長崎医学校となった。

2月　愛宕郡浄土寺村一乗寺に療病院支院として療痼院(癩治療所)が開設された。

5月　府立盲唖院が開設された。わが国で最初の盲唖学校であった。(京都)

6月　療病院教師 Hei nri chBotho Scheube の常用方鑑が刊行された。

7月　東京府立脚気病院が開設された。

9月　公立学校の開設認可権が文部省から府県知事に委譲された。

同志社分校女紅場が同志社女学校と改称された。(京都)

11月　神戸文哉の養生訓蒙が刊行された。

11月　下谷の大病院跡に東京大学医学部附属医院が開設された。

12月　東京大学に学位審査権が与えられた。

この年　長崎病院医学教場が独立して長崎医学校となった。

医学校は官立1校(東京大学医学部)，公立15校，私立18校であった。

1879年（明治12年）

京都療病院医学校(←京都療病院生徒)

1月　さらし首の刑が廃止された。

大阪朝日新聞が創刊された。

2月　医術開業試験規則が布達され，内務省選定の問題について，毎年4回地方庁において試験が行なわれ，内務省から医師開業免状が授与されることになった。ただし，官立大学の卒業者は試験が免除された。

3月　療病院雑誌(月刊)が創刊された。

3月　漢方医団体の温知社が結成された。

京都医事会社から医事集談(月刊)が創刊された。(京都)

府会が初めて開かれ，山本覚馬が初代の議長となった。(京都)

4月　療病院支院の療痼院が廃止された。

療病院に医学予科校(4年制)・京都療病院医学校(4年制)が16日に付設され，京都府仮中学校内の医学予科校は廃止された。医学校では正則生徒（洋書による教育をうけるもの)と通則生徒(和書による教育をうけるもの)とが区別された。

4月　琉球藩が廃止されて，沖縄県が設置された。

京都府仮中学校が京都府中学校と改称された。(京都)

大阪府病院が北区常安町に移転して，大阪公立病院と改称された。

東京大学医学部の卒業生には医学士の称号が与えられることになった。

府の織工場が織殿と改称された。(京都)

5月　管学事萩原三圭(32歳)が京都療病院医学校の初代の校長に任命された。

6月　東京府癲狂院が開設された。

7月　県立新潟医学校が設立され，県立新潟病院はその附属病院となった。

8月　京都療病院医学校通則が制定され，医学校における最初の生徒50名が入学した。

9月　上京区第12組梶井町の官地に京都療病院医学校の校舎（講堂・実習室3棟・寄宿舎・解剖場など）が竣工し，医学予科校・京都療病院医学校は粟田口村から移転した。

上京区の本禅寺内に療病院生徒寄宿舎が設けられた。

9月　学制が廃止され，教育令が公布された。

10月　東京大学医学部から第1回の卒業生が出て，18名の医学士が誕生した。

11月　金沢医学校が設立された。

12月　医師の総数は38,322名(このうち試験免許医は2,371名)であった。

1880年（明治13年）

2月　京都観象台が開設された。（京都）
3月　大阪公立病院が府立大阪病院と改称され，病院教授局は独立して府立大阪医学校となった。
6月　慶応義塾医学所が廃止された。
7月　上京区第12組梶井町の官地に京都療病院の本建築（診療棟4棟・病室5棟・賄所・教師館など，建築費6万円，器械薬品費5万円）が5年がかりで竣工し，京都療病院は粟田口仮療病院から移転して，18日に開業式が盛大に挙行され，京都中が沸きかえる騒ぎであった。
医学校費が療病院支弁から地方税支弁に切り換えられた。
7月　伝染病予防規則が公布された。
京都・大津間に鉄道が開通した。（京都）
9月　岡山県立病院医学教場が独立して岡山県医学校となった。
10月　府に衛生試験所・細菌検査所が開設された。（京都）
11月　療病院教師 H. Botho Scheube の契約期間が3年延長された。
12月　改定教育令が公布された。
医師の総数は38,322名であった。
この年　医学校は官立1校（東京大学医学部），公立22校，私立25校の多きに達したが，その後次第に廃止されるものが出てきた。なお，公立医学校は京都・大阪・神戸・長崎・新潟・前橋・水戸・栃木・伊勢・愛知・岐阜・岩手・青森・山形・金沢・富山・福井・広島・高知・福岡・小倉・熊本にあった。

1881年（明治14年）

京都府医学校（←京都療病院医学校）

1月　仮駆黴院に院長が置かれ，当直医木下凞が院長となった。
1月　知事槙村正直が元老院議官に転出し，高知県令北垣国道が第3代の京都府知事に就任した。（京都）
3月　京都観象台が京都測候所と改称された。（京都）
5月　医学士新宮凉亭（東大明治14年卒業）が1等教諭（内科学）に任ぜられ，内科学の初代の教諭となった。
5月　成医会講習所が設立された。
愛知医学校が設立された。
6月　療病院所管の種痘館が廃止された。
療病院雑誌が第27号で廃刊となった。
7月　京都療病院医学校が療病院から独立し，京都府医学校（5年制，最初の1年は予科）となった。なお，医学予科校は廃止された。
9月　校長萩原三圭が退職した。
院長半井澄が校長に任命され，院長を兼任した。
10月　療病院の職制が改正された。
12月　療病院教師 H. Botho Scheube が解雇された。
相田義和が初代の監事に任ぜられた。

1882年（明治15年）

京都府医学校（甲種）・京都府立療病院（←京都療病院）

2月　3名以上の医学士の教諭のいる府県立医学校の卒業生には，無試験で医術開業免状が下付されることになった。
5月　医学士鴫子止戈之助（しかのすけ）（東大明治15年卒業）が1等教諭（外科学）に任ぜられ，外科学の初代の教諭となった。
医学士斎藤仙也（東大明治15年卒業）が1等教諭（内科学）に任ぜられた。
府会で京都府医学校費の廃止が決議された。
5月　医学校通則が制定され，府県立医学校には甲種（4年制）・乙種（3年制）が設けられた。甲種医学校卒業生には無試験で医術開業免状が下付され，乙種医学校卒業生には医術開業試験が課せられた。
6月　北垣国道知事は，医学校費の否決は認められないとして，府県会規則により内務卿に裁定を求めた。
6月　脚気病院が廃止され，東京大学医学部附属医院に脚気病室が設けられた。
東京大学医学部予科が大学予備門に編入された。
7月　薬学校通則が制定され，甲乙の2種が設けられた。
9月　内務卿の裁定で，8,092円59銭2厘の予算

で京都府医学校を維持することが決まり，府会で承認された。
教授副田村克己が2等教諭(解剖学)に任ぜられ，解剖学の初代の教諭となった。
上田勝行が3等教諭(理化学)に任ぜられた。
10月 療病院所管の癲狂院が廃止され，棚橋元章が旧設備を譲りうけて，禅林寺(永観堂)内に私立癲狂院を開設した。
11月 京都府医学校が甲種医学校(4年制)に認定された。入学資格は府県立尋常中学校卒業生で，入学定員は150名であった。
京都療病院が京都府立療病院と改称された。下京区祇園花見小路に療病院所管の駆黴院が開設され，仮駆黴院・療病館は廃止された。
12月 2等助教諭栗生光謙が3等教諭（物理学・生理学）に任ぜられ，生理学の初代の教諭となった。

1883年（明治16年）

1月 1等教諭(外科学)猪子止戈之助がが副校長に任ぜられた。
1月 東京医学会が結成された。
3月 校則が改正され，修業年限は4年6ヵ月に改められた。
5月 東京・大阪・横浜の司薬場が衛生局試験所と改称された。
7月 教室1棟が竣工した。
副校長猪子止戈之助が副院長を兼務した。
2等教諭田村克己が1等教諭(解剖学)に任ぜられた。
3等教諭上田勝行が2等教諭(理化学)に任ぜられた。
明治15年度（明治15年7月から16年6月まで)の病院収入は6.1万円で，全国第1位であった。
7月 官報が創刊された。
10月 京都府医学校の卒業生には無試験で医術開業免状が下付されることになった。
1等教諭(内科学)新宮凉亭が退職した。
10月 医術開業試験規則・医師免許規則が制定され，医術開業試験は毎年前期には基礎学科について，後期には薬物学・臨床学科・臨床実地について行なわれることになった。
東京製氷会社が設立された。
12月 上京避病院が開設された。(京都)
徴兵令が改正され，現役・予備役・後備役制のほかに，現役志願制が設けられて，国民皆兵の徹底がはかられた。

1884年（明治17年）

1月 官吏恩給令が布達された。
これまで府県庁から下付された医術開業免状の所持者に対して改めて内務省から免状が下付され，医籍が編成された。
3月 京都府医学校の第1回卒業式が行なわれ，明治12年8月の京都療病院医学校の入学生12名が卒業した。
4月 医学士浅山郁次郎(東大明治17年卒業)が1等教諭(眼科学)に任ぜられ，眼科学の初代の教諭となった。
4月 京都私立独逸学校が設立され，猪子止戈之助が名誉校長となった。(京都)
6月 平屋建の事務所が竣工した。
6月 婦人の医術開業が許可された。
7月 京都府三山木中学校・亀岡中学校・宮津中学校が設立され，京都府の中学校は京都府中学校を加えて4校となった。
8月 柏村辰三・土屋栄吉が私立岩倉癲狂院を開設した。(京都)
9月 助教諭武部隆太郎が2等教諭（産科・婦人科学）に任ぜられ，産婦人科学の初代の教諭となった。
江阪秀三郎（京都療病院医学校明治13年卒業)が2等教諭（皮膚病・黴毒学）に任ぜられ，皮膚病・黴毒学の初代の教諭となった。
皮膚病・黴毒学の臨床科名は皮膚・黴毒科であった。
9月 京都府中学校が京都府京都中学校と改称された。(京都)
10月 東京府病院に看護婦養成所(2年制)が設置された。
11月 京極の浄土宗誓願寺で第1回解剖体大法会が執行された。

1885年（明治18年）

3月 荻野吟子が医術開業試験に合格して，わが国で最初の女医となった。
京都府で墓地・埋葬取締規則が制定された。(京都)

4月 医学校監事相田義和が療病院監事を兼務した。
2等教諭(理化学)上田勝行が薬局長を兼務した。
2等教諭(皮膚病・黴毒学)江阪秀三郎が退職した。
京都府立療病院第一次年報が発行された。
4月 日出新聞が創刊された。(京都)
5月 東京に大日本製薬会社が設立された。
6月 駆黴院が療病院から独立して京都駆黴院となり，前教諭江阪秀三郎が院長となった。
6月 琵琶湖疏水工事が起工された。(京都)
府庁舎が上京区第20組藪之内町(現在地)の旧軍務官屋敷跡に竣工し，府庁は二条城から移転した。(京都)
7月 獄囚の刑屍・病屍が医学校で解剖できる制度が定められた。
大阪中学校が大学分校となった。
横浜にわが国最初の浄水道が完成した。
8月 京都府医学校校則が改正され，修業年限は4年に改められた。
療病院生徒寄宿舎が廃止された。
11月 種痘規則が制定された。
12月 2等教諭(産科・婦人科学)武部隆太郎が退職した。
12月 太政官制度が廃止されて内閣制度が設けられ，内務・外務・大蔵・陸軍・海軍・司法・文部・農商務・逓信の9省が設置された。伊藤博文内閣が初めての内閣となった。

1886年（明治19年）

1月 函館・札幌・根室の3県が廃止されて，北海道庁が設置された。
2月 療病院の院制が制定された。
3月 帝国大学令が公布され，東京大学は帝国大学と改称され，法科・文科・工科・理科・医科の5分科大学が設置された。東京大学医学部は帝国大学医科大学となった。また大学院も設置された。
4月 帝国大学医科大学の修業年限が4年に改められた。
中学校令が公布され，尋常・高等の2種が設けられ，府県立尋常中学校は各府県に1校，高等中学校は，全国を第一区(関東・甲信・東海)，第二区(東北)，第三区(近畿・中国・四国)，第四区(北陸)，第五区(九州)の5区に分けて，各区に1校ずつ設置されることになった。
東京大学予備門が第一高等中学校，大阪の大学分校が第三高等中学校となった。
師範学校令が公布され，尋常・高等の2種が設けられた。
小学校令が公布され，尋常科・高等科が設けられ，尋常科は4年制の義務教育とされた。
6月 校長兼院長半井澄が退職した。
6月 日本薬局方が制定された。
7月 京都府の宮津・亀岡・三山木の3中学校が廃止されて，京都中学校に併合された。(京都)
8月 同志社病院が開設され，同病院内に京都看病婦学校(2年制)が設置された。(京都)
9月 帝国大学医科大学の卒業生7名が初めて大学院に入学した。
10月 助手星野元彦（京都府医学校明治17年第1回卒業）が3等教諭（病理解剖学・診断学）に任ぜられ，病理学の初代の教諭となった。
10月 帝国大学医科大学に精神病学教室が設置された。
京都私立独逸学校に別科として薬学科が付設された。これは京都薬科大学の始まりである。(京都)
11月 東京に博愛社病院が開設された。
12月 東京医会が結成された。

1887年（明治20年）

1月 副校長兼教諭(外科学)猪子止戈之助が校長に任命され，院長を兼任した。
教諭の等級(1～3等)が廃止された。
療病院内に京都医学会が設立され，毎月1回談話会が開かれた。
1月 京都府京都中学校が京都府尋常中学校，京都女学校が京都府高等女学校と改称された。(京都)
東京で初めて電灯がついた。
3月 教諭(産科・婦人科学)武部隆太郎が退職した。
教諭(眼科学)浅山郁次郎が副院長を兼務した。

3月　医師と法律家との間で国政医学会が設立された。

4月　仙台に第二高等中学校，金沢に第四高等中学校が設立された。

5月　熊本に第五高等中学校が設立された。
博愛社が日本赤十字社と改称され，博愛社病院が赤十字社病院と改称された。
医学校通則が改正され，甲種・乙種の別が廃止された。
学位令が公布され，博士（法学・医学・工学・文学・理学）・大博士が設けられた。
府の織殿が払い下げられて，京都織物会社が設立された。（京都）

6月　医学士足立健三郎が教諭（産科・婦人科学）に任ぜられた。

6月　半井澄・安藤精軒らによって貧民施療所として私立京都慈恵医院が開設された。（京都）

7月　日本薬局方が施行された。

8月　千葉の共立病院医学教場が第一高等中学校医学部となった。
仙台に第二高等中学校医学部が設立された。
岡山県医学校が第三高等中学校医学部，金沢医学校が第四高等中学校医学部，県立長崎医学校が第五高等中学校医学部となった。

9月　府県立医学校費を明治21年度以降地方税で支弁することが禁止された。このため府立大阪医学校・京都府医学校・愛知医学校の3校だけが残り，他の県立医学校は相次いで廃止されることになった。

10月　岩倉癲狂院が岩倉精神病院と改称された。（京都）

11月　帝国大学医科大学附属医院に看護婦養成所（1年制）が設置された。

この年　帝国大学医科大学のほかに，医学校は官立5校，公立18校，私立4校であった。

1888年（明治21年）

1月　京都医学会から京都医学会雑誌が創刊された。

1月　府立大阪医学校が大阪医学校と改称され，府立大阪病院は大阪医学校病院となった。
東京医学会が結成された。

3月　学用患者規程が制定された。
誓願寺で第2回解剖体大法会が執行された。
明治21年度以降は府県立医学校費を地方税で支弁することが禁止されたが，療病院収入の余裕分と学校収入（授業料年額20円）によって医学校を存続することが府会で決定された。これは第1の危機ともいえるものであった。

3月　県立新潟医学校が廃止された。

4月　喜多川義比が教諭（化学）に任ぜられた。

4月　市制・町村制が公布された。
帝国大学医科大学に小児科学教室が新設された。
京都産婆養成所が設立された。（京都）

5月　医学校の校舎が療病院敷地内の北部から南部に移されることになり，まず南の空地に学生控所・解剖学実習室・標本室の平屋建1棟が竣工した。

5月　池田謙斎・橋本綱常・高木兼寛・三宅秀・大沢謙二の5名が推薦により帝国大学からわが国で最初の医学博士の学位を受けた。

6月　帝国大学医科大学の別課が廃止された。

7月　東京朝日新聞が創刊された。

11月　教諭（内科学）斎藤仙也が退職した。
医学士佐藤廉が教諭（内科学）に任ぜられた。

11月　大阪毎日新聞が創刊された。

12月　教諭（理化学）兼薬局長上田勝行が退職した。

1889年（明治22年）

1月　教諭（化学）喜多川義比が薬局長を兼務した。
制服・制帽が制定された。

2月　大日本帝国憲法が制定された。
貴族院令・衆議院議員選挙法が公布された。
日本赤十字社京都支部が設立された。（京都）

3月　東京・京都・大阪の3市に市制特例が公布され，市長は置かずに知事が市長の職務を代行することになった。

4月　京都府医学校に附属産婆教習所が設置された。修業年限は1年であった。
附属産婆教習所から第1回の卒業生（10名）が出た。
これまで不定の卒業時期が6月に定められた。

4月　帝国大学医科大学附属医院に看護法教習

所(1年制)が設置された。
市制・町村制が施行された。
京都市が発足した。(京都)
伏見駆黴所が開設された。(京都)
6月 第1回京都市会が開かれた。(京都)
7月 東海道本線の全線(新橋・神戸間)が開通した。
電灯の宣伝のために，四条寺町・四条小橋間と四条磧に14本の電柱が立てられ，街灯がつけられた。(京都)
8月 第三高等中学校が大阪から京都に移された。
9月 誓願寺で第3回解剖体大法会が執行されたが，その後明治36年まで中断された。
9月 京都私立独逸学校に医学予備校が設置された。(京都)
12月 京都府医学校・府立療病院は地方税外特別経済として府で管理されることになった。
12月 東京に高山歯科学院が設立された。これは東京歯科医専の前身であった。
医学予備校が東京に設立された。
この年 下京避病院が開設された。(京都)
大日山その他に市共葬墓地が設けられた。(京都)

1890年（明治23年）

1月 慶応義塾大学部が設立され，文学・理財・法律の3科が設置された。これはわが国で最初の私立総合大学であった。
成医会講習所が成医学校と改称された。
2月 薬局が調剤局，薬局長が調剤部長と改称された。
4月 内科学教室・産科婦人科学教室が竣工した。
4月 琵琶湖疏水工事が完成した。(京都)
第1回日本医学会が東京で開催された。
日本赤十字社救護看護婦養成所(3年制)が開設された。
5月 京都府医学校生徒心得が制定され，制服以外での登校が禁止された。
5月 帝国大学医科大学附属医院に産婆養成所が設置された。
7月 第1回衆議院議員総選挙が行なわれた。
9月 京都私立独逸学校内に京都医会が設立された。(京都)
10月 高等中学校では教諭・助教諭が教授・助教授と改称された。
元老院が廃止された。
教育勅語が発布された。
11月 療病院内に京都医学会の書籍室が設けられた。
11月 第1回帝国議会が開かれた。
国政医学会が国家医学会と改称された。
12月 教諭(解剖学)田村克己が死去した。
12月 医師の総数は40,215名(このうち大学卒業生は1,340名，官公立医学校卒業生は1,602名)であった。

1891年（明治24年）

2月 帝国大学医科大学助手医学士加門桂太郎(帝大明治23年卒業)が教諭(解剖学)に任ぜられた。
教諭(内科学)佐藤廉が退職した。
2月 東京看護婦会が設立された。これはわが国で最初の看護婦会であった。
4月 帝国大学医科大学助手医学士笠原光興(帝大明治22年卒業)が教諭(内科学)に任ぜられた。
4月 第1回医術開業試験が東京で行なわれた。
6月 眼科学教室が竣工した。
7月 私立京都産院が開設された。これは京都で初めての産院であった。(京都)
9月 教諭(生理学)栗生光謙が退職した。
医学士宮入慶之助が教諭(生理学・衛生学)に任ぜられ，衛生学の初代の教諭となった。
9月 成医学校が東京慈恵医院医学校と改称された。
東京医師会が結成された。
私立船岡精神病院が開設された。(京都)
10月 帝国大学医科大学で裁判医学が法医学と改称された。
濃尾大地震(8.4マグニチュード)がおこった。
11月 濃尾地方震災で大垣に救護班が派遣された。
11月 京都市営蹴上発電所が送電を開始した。(京都)

1892年（明治25年）

3月 校長猪子止戈之助が私費で欧州各国の視察に出張した(明治27年2月帰朝)。
4月 京都私立独逸学校の別科の薬学科が私立京都薬学校として独立した。(京都)

6月　校友会の文化団体として振元会が結成された。
6月　菊地常三郎・猪子吉人の2名が帝国大学に論文を提出して医学博士の学位を受領した。論文提出による最初の学位受領者であった。
7月　知事北垣国道が北海道庁長官に転出し，愛知県知事千田貞暁が第4代の京都府知事に就任した。(京都)
9月　学生控所の北側に生理学教室が竣工した。
11月　伝染病研究所が設立された。

1893年（明治26年）

1月　外科大手術室が竣工した。
3月　衛生医事審議機関として大日本医会が設立された。
4月　第2回日本医学会が東京で開催された。
5月　京華看病婦学校が設立された。(京都)
7月　日本解剖学会が設立された。
東北本線の全線が開通した。
8月　「君が代」の国歌が制定された。
9月　帝国大学に講座制が設けられた。
帝国大学医科大学に病理学・病理解剖学教室が新設された。
11月　療病院内に日本赤十字社京都支部看護婦生徒養成所が併置された。修業年限は1年であった。
11月　知事千田貞暁が非職になり(12月に退任)，元滋賀県知事の貴族院議員中井弘が第5代の京都府知事に就任した。(京都)
12月　幹事兼療病院幹事相田義和が退職した。
この年　市立上京避病院が聚楽病院，市立下京避病院が日吉病院と改称された。(京都)
全国的に痘瘡が大流行した。

1894年（明治27年）

2月　教諭(内科学)笠原光興がドイツへ私費留学のため退職した。
3月　医学士平井毓太郎(帝大明治23年卒業)が教諭(内科学・小児科学)に任ぜられ，小児科学の初代の教諭となった。
伊藤正信が教諭(物理学)に任ぜられ，療病院幹事を兼任した。
4月　京都医事衛生誌(月刊)が創刊された。(京都)
5月　教諭(生理学・衛生学)宮入慶之助が京都帝国大学福岡医科大学教授に転出のため退職した。
医学士富永兼棠(東大明治15年卒業)が教諭(生理学・衛生学)に任ぜられた。
内科・婦人科・眼科の診察室が竣工した。
6月　高等学校令が公布され，高等中学校は高等学校と改称された。修学年限は3年(医学部は4年)であった。
第一・第二・第四・第五高等学校には医学部・大学予科が設けられ，第三高等学校には法医工学部が設けられた。
7月　外科診察室が竣工した。
8月　日清戦争が勃発した。
9月　千葉・仙台・岡山・金沢・長崎の各高等中学校が高等学校と改称された。
琵琶湖疏水第2期工事(鴨川運河)が完成した。(京都)
10月　知事中井弘が死去した。(京都)
庄内地震(7.3マグニチュード)がおこった。
11月　教諭(産科・婦人科学)足立健三郎が退職した。
日清戦争の傷病者治療のため広島へ治療班が派遣された。
11月　元北海道庁長官・元内務次官の貴族院議員渡辺千秋が第6代の京都府知事に就任した。(京都)
12月　帝国大学医科大学助手でドイツ留学から帰朝した医学士島村俊一(帝大明治20年卒業)が教諭(神経病精神病学・裁判医学)に任ぜられ，神経精神科学・法医学の初代の教諭となった。

1895年（明治28年）

1月　医学士高山尚平(帝大明治20年卒業)が教諭(産科・婦人科学)に任ぜられた。
2月　神経精神科が独立した。
2月　塩小路東洞院と伏見町下油掛との間(伏見線6.5粁)に京都電気鉄道の電車が開通した。これはわが国で最初の市街電車であった。(京都)
4月　京都府簡易農学校が設立された。(京都)
日清講和条約の調印が行なわれた。
5月　旧校舎跡に上等病室・南1・2等病室が竣工

した。
7月 教諭(病理解剖学・診断学)星野元彦が退職した。
9月 皮膚科・耳科学教室が外科学教室から独立した。
10月 教諭(化学)兼調剤部長喜多川義比が退職した。
薬学士古屋恒次郎(帝大明治23年卒業)が教諭(化学)に任ぜられ，調剤部長を兼務した。
10月 知事渡辺千秋が宮内省内蔵頭に転出し，大阪府知事山田信道が第7代の京都府知事に就任した。(京都)
12月 教諭(物理学)兼療病院幹事伊藤正信が退職し，恩田寿夫が療病院幹事に任ぜられた。
元教諭上田勝行が嘱託教員として物理学を担当した。
12月 京都府会議長が，京都府医学校・療病院の設備を利用して，京都に医科大学を設置することを内務大臣に建議した。(京都)

1896年（明治29年）

3月 東京・大阪に痘苗製造所が設置された。
4月 内科が第一部・第二部に分けられた。
笠原光興がドイツ留学から帰朝して再び教諭(内科学)に任ぜられ，内科第一部長を命ぜれた。
教諭(内科学)平井毓太郎が内科第二部長を命ぜられた。
京都府医学校に附属看護婦教習所が設置された。修業年限は2年であった。
4月 京都・奈良間に鉄道が開通した。(京都)
6月 三陸沖地震(7.6マグニチュード)で三陸沿岸から北海道南沿岸に大津波がおこった。
8月 療病院幹事恩田寿夫が奈良県の郡長に転出のため退職した。
8月 陸羽地震(7.5マグニチュード)がおこった。
9月 警部大野政忠が療病院幹事に任ぜられた。
11月 日本歯科医会が結成された。
12月 振元会が解散して校友会が結成され，運動部・学術部が置かれた。会員は職員・学生・卒業生で，校長が会長を兼ねた。
この年 日本眼科学会・大日本耳鼻咽喉科会・小児科研究会が設立された。

1897年（明治30年）

1月 駆黴院長江馬章太郎（京都療病院医学校明治13年卒業）が教諭（皮膚病黴毒学・耳科学）に任ぜられ，皮膚病黴毒学・耳鼻咽喉科学の初代の教諭となった。
京都府医学校校友会雑誌(季刊)が創刊された。
1月 安藤精軒らが知恩院山内法徳院に私立施薬院を開設した。(京都)
3月 足尾銅山鉱毒事件がおこった。
5月 校友会の第1回総会が開催された。
5月 帝国京都博物館が開設された。(京都)
市内電話が開始された。(京都)
6月 帝国大学が東京帝国大学と改称された。
京都帝国大学が新設され，理工科大学が設置された。
9月 教諭(生理学・衛生学)富永兼棠が退職した。
元教諭栗生光謙が嘱託教員として生理学・衛生学を担当した。
9月 私立医学予備校は3年制となり，京都府医学校への無試験入学資格が与えられた。(京都)
京都産婆学校が設立された。(京都)
10月 台湾総督府官制が公布された。
11月 知事山田信道が農商務大臣に転出し，大阪府知事内海忠勝が第8代の京都府知事に就任した。(京都)
12月 教諭(化学)兼調剤部長古屋恒次郎が第一高等学校医学部教授に転出のため退職した。
東の空地に精神病舎(40名収容)が竣工した。これはわが国の医学校における最初の精神病舎であった。

1898年（明治31年）

1月 横浜衛生試験所技師薬学士平山松次が教諭(化学)に任ぜられ，調剤部長を兼務した。
1月 公立学校に学校医が置かれた。
2月 東京帝国大医科大学に皮膚病・黴毒学教室が新設された。
3月 京都府簡易農学校が京都府農学校と改称された。(京都)
4月 教諭(皮膚病黴毒学・耳科学)江馬章太郎が皮膚科・耳科部長を命ぜられた。
附属看護婦教習所から第1回の卒業生（53

名）が出た。

4月　京都府図書館が開設された。（京都）
京都府尋常師範学校が京都府師範学校と改称された。（京都）
日本外科学会が設立された。
大阪医学校に附属看護婦養成所が設置された。
猪子止戈之助（京都府医学校長）・三宅秀（元帝国大学医科大学長）・坪井次郎（東京帝国大学助教授）・久留正直（文部技師）が京都帝国大学医科大学設計委員を命ぜられた。後に医科大学の創設とともに坪井次郎は医科大学長，猪子止戈之助は附属医院長になった。

5月　病理学教室が独立し，助手角田隆（京都府医学校明治29年卒業）が助教諭に任ぜられて病理学・病理解剖学を担当し，病理学教室の創設者となった。

6月　東南の空地に体育場が竣工した。

9月　私立京都産婆学校が開設された。（京都）

10月　京都帝国大学医科大学助教授に内定の教諭（眼科学）兼副院長浅山郁次郎が文部省留学生としてドイツへ留学のため休職になった。

10月　府県警察部に衛生課が置かれた。
東京・京都・大阪の3市の市制特例が廃止された。

11月　助教諭融礼次郎（京都府医学校明治27年卒業，後に奥沢と改姓）が教諭（眼科学）に任ぜられた。
教諭（内科学）笠原光興が副院長を兼務した。

12月　学位令が改正されて大博士が廃止され，また博士に薬学・農学・林学・獣医学が加えられた。
胃腸病研究会が設立された。

1899年（明治32年）

1月　中学校令が改正され，尋常中学校が中学校と改称された。修学年限は5年であった。

2月　高等女学校令が公布され，修学年限は4年が原則とされた（3年制，5年制も認められた）。
東京・大阪間に長距離電話が開通した。

4月　療病院助手会が結成された。

4月　台湾総督府医学校が設立された。
京都府尋常中学校が京都府第一中学校と改称された。（京都）

5月　校友会経営の京都医学図書館が解剖学教室の西隣に開設された。

6月　教諭（内科学・小児科学）平井毓太郎が京都帝国大学医科大学助教授に転出のため退職した。

7月　内科の第一部・第二部の区別が廃止された。
校長兼院長兼教諭（外科学）猪子止戈之助が京都帝国大学医科大学教授兼附属医院長に転出のため退職した。なお猪子止戈之助は療病院長を嘱託された。
教諭（解剖学）加門桂太郎が校長事務取扱を命ぜられた。
助教諭松山為雄が教諭（外科学）に任ぜられた。
ドイツ留学のため休職中の教諭（眼科学）浅山郁次郎が京都帝国大学医科大学助教授に転出のため退職した。

7月　京都帝国大学に法科大学・医科大学が設置された。
産婆規則が公布された。

8月　教諭（内科学）笠原光興が京都帝国大学医科大学教授に転出のため退職した。

8月　私立学校令が公布された。
京都・園部間に鉄道が開通した。（京都）
京都蚕業講習所が開設された（京都）

9月　教諭（解剖学）加門桂太郎が校長に任命された。
教諭（神経精神科学）島村俊一が副院長を兼務した。
助教諭浅木直之助（京都府医学校明治25年卒業）が教諭（内科学）に任ぜられた。

9月　産婆試験規則が公布された。

10月　本願寺看護婦養成所が開設された。（京都）

11月　京都帝国大学医科大学に附属医院が開設された。
東京帝国大学医科大学に耳鼻咽喉科学教室が新設された。
東京帝国大学医科大学で産婆養成所が産婆復習科と改称された。

1900年（明治33年）

3月　未成年者喫煙禁止法が公布された。
精神病者看護法が公布された。

本派本願寺に仏教大学が設立された。(京都)
知事内海忠勝が死去し，宮城県知事高崎親章が第9代の京都府知事に就任した。(京都)

5月 校長兼教諭(解剖学)加門桂太郎が京都帝国大学医科大学助教授に転出のため退職した。教諭(神経精神科学)島村俊一が校長に任命された。
大阪医学校教諭兼薬剤長町田伸が教諭（化学）に任ぜられた。
京都帝国大学医科大学助手赤座寿恵吉が講師を嘱託されて解剖学を担当した。

5月 私立京都法政学校が設立された。(京都)

6月 教諭(化学)兼薬剤部長平山松次が退職した。教諭(化学)町田伸が調剤部長を兼務した。

6月 帝国京都博物館が京都帝室博物館と改称された。(京都)

7月 京都帝国大学理工科大学の第1回卒業式が行なわれ，29名が卒業した。

9月 教諭(産科・婦人科学)高山尚平が院長に補せられた。
京都市立日吉病院長医学士工藤外三郎（東京帝大明治30年卒業)が教諭（内科学）に任ぜられた。

10月 京都駆黴院が八坂病院と改称され，京都娼妓検査所が附設された。(京都)

12月 創設の京都帝国大学医科大学に多数の人材が引き抜かれたため，府会で京都府医学校の存廃が問題になったが，1票の差で存続に決定した。これは第2の危機であった。(第1の危機は明治21年3月)。

12月 私立東京女医学校が設立された。
医師の総数は40,924名（このうち帝大卒業生は1,514名，官公立医学校卒業生は4,835名)であった。

1901年（明治34年）

京都府立医学校(←京都府医学校)

1月 京都帝国大学医科大学助手赤座寿恵吉が教諭(解剖学)に任ぜられた。

2月 日本婦人科学会が設立された。

3月 教諭(内科学)浅木直之助が休職になった。

4月 医員に有給医員・無給医員が区別された。
助教諭角田隆(京都府医学校明治29年卒業)が教諭(病理学・病理解剖学)に任ぜられ，病理学の初代の教諭となった。
助教諭朝井元章（京都府医学校明治26年卒業)が教諭(神経科学)に任ぜられた。
教諭(神経科学)朝井元章が校友会図書部長になった。

4月 医学専門学校令が公布され，高等学校医学部は独立して医学専門学校となった。第一高等学校医学部は千葉医学専門学校，第二高等学校医学部は仙台医学専門学校，第三高等学校医学部は岡山医学専門学校，第四高等学校医学部は金沢医学専門学校，第五高等学校医学部は長崎医学専門学校となった。
日本皮膚病学会が設立された。
関西聯合医会が結成された。

5月 第二高等学校医学部教授医学士永井徳寿(帝大明治33年卒業)が教諭(生理学)に任ぜられた。

5月 京都医事会社が京都医事会と改称され，京都衛生検査所が附設された。(京都)

6月 栗生光謙が長崎医学専門学校教諭に転出のため嘱託教員(生理学・衛生学)を辞任した。

6月 大阪医学校が大阪府立医学校と改称された。

7月 京都医学会雑誌が第162号で廃刊となった。

7月 大阪医学会が結成され，大阪医学会雑誌が創刊された。
日本聯合医学会が設立された。

8月 愛知医学校が愛知県医学校と改称された。

9月 京都府医学校が京都府立医学校と改称された。

9月 京都府中学校・高等女学校・農学校・医学校の名称が京都府立に改められた。(京都)

10月 北の空地に北1・2等病舎2棟が竣工した。

11月 東京女医学会が設立された。
府庁舎改築工事が起工された。(京都)

この年 大日本耳鼻咽喉科会が大日本耳鼻咽喉科学会と改称された。

1902年（明治35年）

1月 日英同盟が締結された。

2月 京都府医学校校友会雑誌が第27号から京都府立医学校校友会雑誌と改題された。

2月 知事高崎親章が大阪府知事に転出し，内務省総務長官大森鐘一が第10代の京都府

知事に就任した。(京都)

3月 卒業生には京都医学得業士の称号が与えられることになった。
特待生の制度が設けられ，授業料が免除された。
休職中の教諭(内科学)浅木直之助が退職した。

3月 東京帝国大学医科大学に歯科学教室が新設された。

4月 内科が再び第一部・第二部に分けられた。
元公立大津病院長でドイツ留学から帰朝した医学士望月惇一(帝大明治24年卒業)が教諭(内科学)に任ぜられ，内科第一部長を命ぜられた。
教諭(内科学)工藤外三郎が内科第二部長を命ぜれた。
教諭(眼科学)奥沢礼二郎が退職した。
仙台医学専門学校教授医学士伊藤元春（帝大明治26年卒業)が教諭（眼科学）に任ぜられた。
教諭(神経科学)朝井元章が校友会図書部長を辞退し，教諭(生理学)永井徳寿が校友会図書部長になった。

4月 第1回日本聯合医学会が東京で開催された。
日本神経学会が設立された。
日本女医会が設立された。

5月 教諭(外科学)松山為雄が退職した。

6月 京都医会が解散して，京都府医師会が設立された。(京都)

7月 県立熊本病院外科部長医学士池田廉一郎(帝大明治29年卒業)が教諭(外科学)に任ぜられた。
教諭(神経科学)朝井元章が退職した。
制帽が菱形(下縁に5条の青線)に改められた。

7月 府庁舎の改築工事が竣工した。(京都)

9月 京都高等工芸学校が設立された(京都)

10月 京都私立独逸学校に併置の医学予備校が廃止され，別に私立京都医学校が併置された。(京都)

11月 小児科研究会が日本小児科学会と改称された。

12月 日本内科学会が設立された。

この年 胃腸病研究会が日本消化器学会と改称された。

1903年（明治36年）

京都府立医学専門学校(←京都府立医学校)・附属療病院(←京都府立療病院)

1月 南西の空地に病理学教室・衛生学細菌学教室の2階建1棟が竣工した。
内科・産科婦人科・神経精神科等の研究室が増築された。

1月 日本皮膚病学会が日本皮膚科学会と改称された。

2月 京都で全国医会聯合大会が開催され，帝国聯合医会が設立された。

3月 療病院内の京都医学会が解散した。

3月 専門学校令が公布され，千葉・仙台・岡山・金沢・長崎の5官立医学専門学校は専門学校令による医学専門学校となった。
京都帝国大学医科大学が京都帝国大学京都医科大学と改称された。
京都帝国大学福岡医科大学が設立された。

4月 衛生学細菌学教室が独立した。
常岡良三(京都府医学校明治31年卒業)が助教諭に任ぜられて衛生学・細菌学を担当し，細菌学の初代の担当者となった。

4月 医術開業試験が内務省から文部省へ移管された。
国定教科書令が公布された。
京都帝国大学京都医科大学内に新たに京都医学会が設立された。
京都市記念動物園が開設された。(京都)

5月 教諭(産科・婦人科学)兼院長高山尚平が京都帝国大学福岡医科大学教授に転出のため退職した。
校長島村俊一が院長を兼任した。
県立熊本病院婦人科産科部長医学士秋元隆次郎（帝大明治25年卒業）が教諭(産科・婦人科学)に任ぜられた。

6月 京都府立医学校が20日に京都府立医学専門学校(4年制)と改称され，京都府立療病院は附属療病院となった。
京都府立医学校附属産婆教習所・看護婦教習所が京都府立医学専門学校附属産婆教習所・看護婦教習所となった。
京都府立医学校教諭は京都府立医学専門学校教諭となった。
京都府立医学校最後の第26回卒業式が行な

われた。
6月 東京慈恵医院医学校が東京慈恵医院医学専門学校と改称された。
愛知県医学校が愛知県立医学専門学校と改称された。
医学中央雑誌が創刊された。
8月 京都府立医学専門学校一覧が初めて刊行された。
8月 東京電車鉄道会社が新橋・品川間で電車の運転を開始した。
9月 教諭(生理学)永井徳寿が休職になった。
9月 大阪府立医学校が大阪府立高等医学校と改称された。
私立京都法政学校が私立京都法政専門学校と改称された。(京都)
10月 本派本願寺(西本願寺)で第4回解剖体大法会(600体)が執行された。その後毎年10月1日に西本願寺で秋季解剖体大法会が行なわれることになった。
京都府立医学校校友会雑誌が第32号から京都府立医学専門学校校友会雑誌と改題された。
療病院幹事大野政忠が退職した。
11月 京都府紀伊郡長柿沼鉉太郎が療病院幹事に任ぜられた。
11月 大日本歯科医学会が設立された。
12月 京都私立独逸学校に併置の私立京都医学校が廃止された。(京都)
この年 医学専門学校は官立5校(千葉・仙台・岡山・金沢・長崎),公立3校(大阪・京都・愛知),私立2校(東京慈恵医院・熊本)であった。

1904年(明治37年)

2月 京都府立高等女学校が京都府立第一高等女学校と改称された。(京都)
日露戦争が勃発した。
私立熊本医学校が私立熊本医学専門学校と改称された。
肺結核予防令が公布された。
3月 同志社専門学校が設立された。(京都)
4月 職員海外留学規程が制定され,1年置きに1人ずつ2年間公費で海外留学ができるようになった。
療病院幹事が療病院庶務部長と改称された。
療病院幹事柿沼鉉太郎が幹事兼療病院庶務部長に任ぜられた。
休職中の教諭(生理学)永井徳寿が復職した。
4月 私立東京医学校・私立日本医学校が設立された。
日本衛生学会が設立された。
国定小学校教科書が初めて使用された。
(新)京都医学会から京都医学雑誌が創刊された。(京都)
京都府立農学校が府立京都農林学校と改称された。(京都)
市立日吉病院に附属看護婦養成所が附設された。(京都)
5月 教諭(生理学)永井徳寿が校友会図書部長を辞退し,教諭(眼科学)伊藤元春が校友会図書部長になった。
6月 京都府立医学専門学校の第1回卒業式(48名)が行なわれた。
1・2等伝染病室が竣工した。
7月 教諭(外科学)池田廉一郎が職員海外留学規程による最初の留学者として公費でドイツへ留学した(明治40年1月帰朝)。
助教諭田村克之(京都府医学校明治28年卒業)が教諭(解剖学)に任ぜられた。
9月 京都法政専門学校が京都法政大学に昇格した。(京都)

1905年(明治38年)

1月 府庁舎改築工事(旧本館)が竣工した。(京都)
私立歯科医学校が設立された。(京都)
私立京都専門学校が設立された。(京都)
3月 外国人入学規程・研究生規程が制定された。
4月 校舎・療病院の大改築工事が開始された。
5月 医師免許規則の一部が改正され,文部大臣の指定した私立医学専門学校の卒業生は医術開業試験が免除された。
7月 図書館・学生控所・学生食堂の2階建1棟が竣工した。
7月 私立医学専門学校指定規則が公布された。
日本が樺太を占領した。
9月 日露講和条約の調印が行なわれた。
10月 鴨川西堤に運動場が新設された。

1906年（明治39年）

3月　旧運動場跡に2階建の解剖学教室と平屋建の組織実習室・供覧室・解剖標本室等2棟が竣工した。
　2階建の病理学教室が竣工した。
4月　助教諭常岡良三（京都府医学校明治31年卒業）が教諭（衛生学・細菌学）に任ぜられ，細菌学の初代の教諭となった。
　病理解剖室・病理材料室・標本製作室・屍室等の1棟とその東続きに解剖実習室が竣工した。
　自家発電所が竣工した。
　患者用浴室が竣工した。
4月　第2回日本聯合医学会が東京で開催された。
　東京帝国大学医科大学に整形外科学教室が新設された。
　同志社病院・京都看病婦学校が廃止された。（京都）
5月　医師法・歯科医師法が公布された。
　知恩院内入信院に私立華頂看護婦学校が設立された。（京都）
6月　京都帝国大学京都医科大学に厚生団体として芝蘭会が設立された。
8月　校長島村俊一が東京帝国大学に論文を提出して医学博士の学位を受領した。本校における最初の学位受領者であった。
　教諭（内科学）工藤外三郎がドイツへ留学した（明治41年12月帰朝）。
　病室が倒壊して10余人が下敷となったが，全員無事であった。
11月　学用患者慰藉費募金のため，京都市会議事堂で慈善音楽会が開催された。
11月　京都府図書館が府立図書館と改称された。（京都）
　南満洲鉄道株式会社が設立された。

1907年（明治40年）

1月　私立京都産婆学校が平安産婆学校と改称された。（京都）
2月　2階建の衛生学細菌学教室と平屋建の衛生学細菌学実習室・動物試験室2棟が竣工した。
　洗濯場が竣工した。
3月　校庭の西の空地に大教室（第5教室，階段式，300名収容）が竣工した。
　嵯上の大日山の市共葬墓地内に附属墓地（260坪）が新設され，「学用患者之墓」の墓碑が建てられた。
3月　小学校令が改正され，義務教育年限が6年に延長され，尋常科は6年，高等科は2～3年に改められた。
　癩予防法が公布された。
4月　産室1棟が竣工した。
4月　官立医学専門学校規程が公布された。
5月　大日山の浄土宗安養寺と附属墓地で第1回の春季解剖体大法会と墓前祭が執行された。その後毎年5月14日に安養寺と附属墓地で春季解剖体大法会と墓前祭が行なわれることになった。
9月　学用患者病室・看護婦寄宿舎の2階建1棟が竣工した。
9月　仙台に東北帝国大学が新設され，理科大学が設置された。
12月　桃山産婆学校が設立された。（京都）

1908年（明治41年）

2月　教諭（解剖学）田村克之が退職した。
4月　京都帝国大学福岡医科大学助手前島長裕（愛知医学校明治12年卒業）が教諭（解剖学）に任ぜられた。
　小児科学教室が内科学教室から独立した。
　京都帝国大学京都医科大学助手医学士本庄謙三郎（京都帝大明治36年卒業）が教諭（小児科学）に任ぜられ，小児科学教室の創設者となった。
4月　癌研究会が設立された。
5月　助教諭伏原寅男（京都府医学校明治32年卒業）が教諭（内科学）に任ぜられ，教諭工藤外三郎の外国出張中，内科第二部長を命ぜられた。
6月　臨床講義室（階段式）の平屋建1棟が竣工した。
　伝染病観察室の平屋建1棟が竣工した。
　外科大手術室が改造された。
7月　職員海外留学規程が改正され，毎年1～2名が欧米へ留学できるようになった。
　教諭（病理学）角田隆がドイツへ留学した

(明治43年10月帰朝)。
3等病室の平屋建1棟が竣工した。
8月 2等病室の平屋建1棟が竣工した。
看護婦寄宿舎が竣工した。
10月 校庭に2階建の本館(校長室・幹事室・会議室・講堂・教務課)が竣工した。
耳鼻咽喉科学教室が皮膚病・黴毒学教室から独立した。
助教諭中村登(京都府医学校明治34年卒業)が耳鼻咽喉科学を担当し，耳鼻咽喉科学教室の創設者となった。
11月 天皇・皇后両陛下の御真影奉戴式が挙行された。
創立30周年記念式典が6日に挙行された。
京都療病院医学校の創立から30年目にあたる。
12月 教諭工藤外三郎が帰朝して内科第二部長を命ぜられた。

1909年(明治42年)

2月 卒業生には校名を冠した医学士の称号が与えられることになった。
2月 東京帝国大学医科大学で看病法講習科が看護法講習科と改称された。
3月 教諭(内科学)伏原寅男が退職した。
4月 教諭(生理学)永井徳寿が休職になった。
4月 種痘法が公布され，新生児の種痘が義務付けられた。
京都市立絵画専門学校が設立された。(京都)
5月 助教諭中村登(京都府医学校明治34年卒業)が教諭(耳鼻咽喉科学)に任ぜられた。
京都帝国大学京都医科大学助手藤谷功彦(京都府医学校明治33年卒業)が教諭(薬物学・医化学)に任ぜられ，薬物学・医化学の初代の教諭となった。
6月 特等病室・特別1等病室が竣工した。
6月 東京女医学校の医専申請が却下された。
東寺内に貧民救療のために済生病院が開設された。(京都)
7月 大阪市の北部にいわゆる北の大火がおこり，11,360戸が焼失した。
8月 台湾総督府医学校教授尾見薫(京都府医学校明治30年卒業)が京都帝大で医学博士の学位を受領した。京都府医学校卒業生での最初の学位受領者であった。
9月 看護婦賄所が竣工した。
教諭(化学)兼調剤部長町田伸が退職した。
9月 東寺に慈善病院が開設された。(京都)
10月 東京府立第一中学校教諭文学士広木多三(東京帝大明治39年卒業)が教諭(ドイツ語・倫理学)に任ぜられた。
私立京都薬学校名誉校長薬学士立入保太郎(東京帝大明治41年卒業)が教諭(化学)に任ぜられ，調剤部長を兼務した。
療病院の玄関が竣工した。
11月 医化学実習室が竣工した。
12月 種痘法施行規則が公布され，2期の定期種痘が義務づけられた。

1910年(明治43年)

3月 校長兼院長兼教諭(神経病精神病学・法医学)島村俊一が退職した。その後大正5年12月まで院務顧問を嘱託された。
教諭(内科学)望月惇一が校長に任命され，院長を兼任した。
3月 県立新潟医学校が新潟医学専門学校と改称された。
4月 明治42年以前の卒業生も論文提出により校名を冠した医学士の称号を請求することができるようになった。
教諭(眼科学)伊藤元春がドイツへ留学した(大正1年10月帰朝)。
4月 第3回日本医学会が初めて大阪で開催された。
五条・天満橋間に京阪電鉄の電車が開通した。(京都)
6月 療病院創設の功労者の明石博高(72歳)が死去した。
8月 韓国が日本に併合され，朝鮮と改められた。
京都・新舞鶴間に直通列車が開通した。(京都)
9月 京都帝国大学京都医科大学助手医学士佐武安太郎(京都帝大京都医大明治42年卒業)が教諭(生理学)に任ぜられた。
9月 朝鮮総督府官制が公布された。
11月 教諭(生理学)佐武安太郎がドイツへ留学した(大正3年3月帰朝)。
12月 日本病理学会が設立された。
福岡に九州帝国大学が新設され，工科大

学が設置された。
医師の総数は38,055名(このうち帝大卒業生は2,674名，医専卒業生は10,814名)であった。

1911年（明治44年）

1月 休職中の教諭(生理学)永井徳寿が退職した。
3月 京都帝国大学福岡医科大学が九州帝国大学医科大学となったので，京都帝国大学京都医科大学は京都帝国大学医科大学と改称された。
5月 教諭(外科学)池田廉一郎が新潟医学専門学校教授兼附属医院長に転出のため退職した。
京都帝国大学医科大学助教授医学博士医学士副島予四郎（京都帝大京都医大明治38年卒業)が教諭(外科学)に任ぜられた。
助教諭佐々木恒一（京都府立医学校明治34年卒業)が教諭（神経病精神病学）に任ぜられた。
5月 恩賜財団済生会が設立された。
中央線の全線が開通した。
9月 京都帝国大学医科大学助教授小南又一郎が講師を嘱託されて法医学を担当した。
10月 大谷大学が設立された。(京都)
奉天で南満医学堂が設立された。
東京帝国大学医科大学で産婆復習科が産婆講習科と改称された。

1912年（明治45年，大正1年）

7月30日から大正1年

2月 同志社専門学校が同志社大学に昇格した。(京都)
同志社女子専門学校が設立された。（京都)
3月 蹴上浄水場・第二疏水が完成し，上水道給水が開始された。(京都)
仙台医学専門学校が廃止されて，東北帝国大学に附属医学専門部が設置された。
東京女医学校が東京女子医学専門学校と改称された。
嵐山電鉄の四条大宮・嵐山間が開通した。(京都)
4月 日本泌尿器病学会が設立された。
5月 教諭(神経病精神病学)佐々木恒一が退職した。
助教諭野田浦弼（京都府立医学校明治36年卒業)が教諭（神経病精神病学）に任ぜられた。
教諭(小児科学)本庄謙三郎がドイツへ留学した。(大正3年11月帰朝)。
5月 仏教専門学校が設立された。(京都)
山陰線の全線が開通した。
6月 市営電車が烏丸線・千本線・丸太町線・四条線で運転を開始した。(京都)
7月 私立日本医学校が私立日本医学専門学校と改称された。
10月 教諭(産科・婦人科学)秋元隆次郎がドイツへ私費留学のため休職になった。
教諭(衛生学・細菌学)常岡良三がドイツへ留学した(大正4年1月帰朝)。
10月 東京帝国大学医科大学で産婆講習科が再び産婆養成所と改称された。
11月 校友会水上部の新艇3隻（1,080円）の進水式が大津市石場浜で行なわれた。また大津市三井寺下に艇庫(25坪，建設費375円)が竣工した。

1913年（大正2年）

2月 助教諭犬塚一郎(東京帝大明治44年卒業)が教諭(ドイツ語)に任ぜられた。
2月 私立癲狂院が川越病院と改称された。(京都)
日本結核予防協会が設立された。
3月 四条大橋が竣工した。これは京都で最初の鉄骨橋であった。(京都)
4月 校長兼院長望月惇一が欧州各国へ出張した(大正3年2月帰朝)。
教諭(内科学)工藤外三郎が，校長兼院長望月惇一の不在中，校長兼院長代理を命ぜられた。
講師梅原信正（京都府立医学校明治36年卒業)が教諭(病理学)に任ぜられた。
6月 京阪電鉄の宇治線が開通した。(京都)
9月 産婆教習所の卒業生には無試験で開業免許が与えられることになった。
9月 医師試験規則が制定され，医術開業試験規則は廃止された。
10月 京都産婆学校が設立された。(京都)
11月 休職中の教諭秋元隆次郎がドイツ留学から帰朝して復職した。

12月 京都法政大学が立命館大学と改称された。(京都)

1914年（大正3年）

1月 日本泌尿器学会が日本泌尿器科学会と改称された。
桜島の大噴火で，桜島は九州本土とつながった。

2月 教諭(薬物学・医化学)藤谷功彦(37歳)が死去した。

3月 京都帝国大学医科大学助手医学士革島廉三郎が講師を嘱託されて薬物学・医化学を担当した。

3月 日本聯合医師会が結成された。

4月 第4回日本医学会が東京で開催された。
京都蚕業講習所が京都高等蚕業学校と改称された。(京都)
大阪府立高等医学校に附属産婆養成所が設置された。
武術専門学校が設立された。(京都)

7月 教諭(眼科学)伊藤元春・教諭(皮膚病・黴毒学)江馬章太郎が退職した。
幹事柿沼鉉太郎が退職した。
教諭(産科・婦人科学)秋元隆次郎・教諭(解剖学)前島長裕が休職になった。
附属療病院庶務部長中道貫一が幹事に任ぜられた。

7月 京都帝国大学の理工科大学が工科大学・理科大学に分離した。
日本鉄道医協会が設立された。
第一次世界大戦が勃発した。

8月 教諭(外科学)副島予四郎が京都帝国大学医科大学助教授に転出のため退職した。
京都帝国大学医科大学助教授医学士小柳美三(京都帝大京都医大明治41年卒業)が教諭(眼科学)に任ぜられた。
京都帝国大学医科大学助手医学博士医学士河村叶一(京都帝大京都医大明治41年卒業)が教諭(外科学)に任ぜられた。
東京帝国大学医科大学大学院生医学士佐谷有吉(東京帝大明治44年卒業)が教諭(皮膚病・黴毒学)に任ぜられた。
京都帝国大学医科大学助手医学博士岡嶋敬治(四高医学部明治34年卒業)が教諭(解剖学)に任ぜられた。
学則の大改正が行なわれた。

8月 京都駅改築工事が竣工した。(京都)
日英同盟に連帯して日本はドイツに宣戦を布告し，第一次世界大戦に参加した。

9月 京都帝国大学医科大学副手医学士加治安信(京都帝大明治42年卒業)が教諭(産科・婦人科学)に任ぜられた。

10月 校長兼院長兼教諭(内科学)望月惇一が休職になった。
教諭(内科学)工藤外三郎が校長に任命され，院長を兼任し，内科第一部長を命ぜられた。
長崎医学専門学校教授でドイツ留学から帰朝した医学博士医学士小川瑳五郎(東京帝大明治35年卒業)が教諭(内科学)に任ぜられ，内科第二部長を命ぜられた。
助教諭端野令三(京都府立医専明治39年卒業)が教諭(内科学)に任ぜられた。
学生監が設けられた。
教諭(病理学)角田隆が初代の学生監に補せられた。

10月 伝染病研究所が内務省から文部省に移管された。

11月 10ヵ年継続事業の校舎・療病院大改築工事(延坪3,694坪，総工費40万円)が完了し，23日に落成式が挙行された。
校舎・療病院改築落成式のときに，学生団歌として4年生金子元春(伊昔紅)作詞の「遅日の夢」が発表され，後にこれが校歌となった。

1915年（大正4年）

1月 日本医史学会が設立された。
市立の日吉病院・聚落病院が合併して市立京都病院と改称された。(京都)

3月 教諭(内科学)端野令三が退職した。

4月 教諭(耳鼻咽喉科学)中村登が耳鼻咽喉科学研究のため京都帝国大学へ留学した(大正5年6月帰学)。

5月 京都帝国大学医科大学助教授医学博士医学士吉川順治(京都帝大京都医大明治40年卒業)が教諭(医化学)に任ぜられた。
教諭(ドイツ語)犬塚一郎が退職した。

5月 日本微生物学会が設立された。
京津電鉄の三条大橋・浜大津間が開通した。(京都)

6月 看護婦規則が公布された。

7月 休職中の教諭秋元隆次郎(産科・婦人科学)

・前島長裕(解剖学)が退職した。
7月　東北帝国大学に医科大学が設置され，附属医学専門部の入学は打ち切られた。
9月　休職中の教諭(内科学)望月惇一が退職した。
10月　天皇陛下の御真影奉戴式が挙行された。
10月　新聞の夕刊発行が始められた。
大阪府立高等医学校が府立大阪医科大学に昇格した。
11月　教諭(生理学)佐武安太郎が東北帝国大学教授に転出のため退職した。
大正天皇御即位の御大典奉祝のために，職員学生聯合大提灯行列が行なわれた。
11月　大正天皇御即位御大典が京都で行なわれた。(京都)
12月　京都帝国大学医科大学助手医学士越智真逸(東京帝大明治43年卒業)が教諭(生理学)に任ぜられた。
教諭(眼科学)小柳美三が退職した。
12月　私立北里研究所が開設された。

1916年（大正5年）

1月　東京帝国大学医科大学助手医学士増田隆(東京帝大明治44年卒業)が教諭(眼科学)に任ぜられた。
2月　附属看護婦教習所が内務省の指定をうけた。
4月　歯科学が必須科目となり，歯科学教室が新設された。これは東京帝国大学医科大学に次いで2番目であった。
東京帝国大学医科大学副手医学士本永七三郎(京都帝大大正2年卒業)が教諭(歯科学)に任ぜられ，歯科学の初代の教諭となり，歯科学教室の創設者となった。
4月　伝染病研究所が文部省から東京帝国大学に移管された。
京城医学専門学校が設立された。
知事大森鐘一が辞任し，木内重四郎が第11代の京都府知事に就任した。(京都)
6月　歯科が開設された。
7月　簡易生命保険法が公布された。
10月　皇后陛下の御真影奉戴式が挙行された。
11月　大日本医師会が結成された。なお，日本聯合医師会は解散した。
12月　慶応義塾大学部に医学科（予科2年・本科4年)が設置された。

1917年（大正6年）

2月　公立学校職員制により，教諭・助教諭が教授・助教授と改称された。
2月　府立大阪医科大学病院が全焼した。
3月　教授(医化学)吉川順治が胃腸科学研究のため京都帝国大学へ留学した（大正8年3月帰学)。
4月　京都市庁舎が竣工した。(京都)
5月　卒業の時期が5月に改められた。
6月　教授(小児科学)本庄謙三郎が死去した。
6月　円山公園に京都市公会堂が開設された。(京都)
7月　校長兼院長兼教授(内科学)工藤外三郎が退職した。
教授(内科学)小川瑳五郎が校長に任命され，院長を兼任した。
京都帝国大学医科大学助教授医学博士医学士三浦操一郎(東京帝大明治30年卒業)が教授(小児科学)に任ぜられた。
9月　日本赤十字社滋賀支部病院長医学博士医学士尾中守三(東京帝大明治35年卒業)が教授(内科学)に任ぜられ，内科第一部長を命ぜられた。
10月　大暴風雨で1,144人の死者・行方不明が出た。
11月　元校長島村俊一の銅像が本館の南側に建てられた。
11月　日赤京都支部療院が開設された。(京都)
12月　教授(神経精神科学)野田浦弼が米国へ留学した。
教授(内科学)尾中守三が長崎医学専門学校教授に転出のため退職した。

1918年（大正7年）

1月　教授(皮膚病・黴毒学)佐谷有吉が休職になった。
2月　東京帝国大学医科大学副手医学士中川清(東京帝大大正1年卒業)が教授(皮膚科学)に任ぜられた。
大分県立病院内科部長医学博士医学士梅田信義(京都帝大京都医大明治42年卒業)が教授(内科学)に任ぜられ，内科第一部長を命ぜられた。
3月　京都電気鉄道が京都市に買収されて，市

内の電車は全部市電になった。(京都)

4月 教授(外科学)河村叶一が文部省留学生として欧米各国へ留学のため休職になった。

4月 第5回日本医学会が東京で開催された。
札幌に北海道帝国大学が新設され，農科科大学が設置された。
東北帝国大学附属医学専門部が廃止された。
私立東京医学校が私立東京医学専門学校と改称された。

5月 府立大阪医科大学仮病院が竣工した。
知事木内重四郎が辞任し，前広島県知事馬淵鋭太郎が第12代の京都府知事に就任した。(京都)

6月 元教諭(解剖学)前島長裕(53歳)が死去し，解剖後骨格が大学に寄贈された。

7月 文部省に理化学研究奨励補助費制度が設けられた。

8月 富山・岡山・広島・大阪・京都・兵庫・愛知・東京などの各府県に米騒動がおこった。

9月 私立独逸学校が廃止された。(京都)

11月 教授(解剖学)岡嶋敬治が慶応義塾大学部医学科教授に転出のため退職した。

11月 第一次世界大戦が終結した。

12月 新潟医学専門学校教授医学博士島田吉三郎(四高医学部明治29年卒業)が教授(解剖学)に任ぜられた。

12月 大学令が公布され，公私立大学・単科大学の設立が認められた。

1919年（大正8年）

1月 休職中の教授(皮膚病・黴毒学)佐谷有吉が退職した。

1月 パリ講和条約の調印が行なわれた。

2月 帝国大学令が改正され，分科大学が学部と改称された。

3月 大学昇格についての建議書が教授団から馬淵鋭太郎知事に提出された。

3月 私立京都薬学校が私立京都薬学専門学校と改称された。(京都)
精神病院法・結核予防法・トラホーム予防法が公布された。

4月 胃腸科学教室が内科学教室から独立した。
教授(医化学)吉川順治が胃腸科学教室に転じて胃腸科学を担当し，胃腸科学の初代の教授となり，胃腸科学教室の創設者となった。
京都帝国大学助手医学博士医学士革島廉三郎(京都帝大明治44年卒業)が教授（薬物学・医化学)に任ぜられた。
助教授穂積茂(東京外語学校明治40年卒業)が教授(ドイツ語)に任ぜられた。
大学昇格達成全国大会が三条柳馬場の青年会館で開催され，卒業生800名が参集し，昇格期成同盟会が結成された。

4月 台湾総督府医学校が台湾総督府医学専門学校と改称された。
日本赤十字社京都支部が巡回病院を開設した。(京都)

5月 昇格期成同盟会に中央部実行委員会が設けられ，予科設置・施設拡充のための募金が開始された。

6月 欧米各国へ留学のため休職中の教授（外科学)河村叶一が帰朝して復職した。

9月 医師会令が公布された。

11月 府立大阪医科大学が大阪医科大学と改称された。

この年 栄養学会が設立された。
私立歯科医学校が廃止された。(京都)

1920年（大正9年）

2月 慶応義塾大学・早稲田大学が大学令による初めての私立大学として認可された。

3月 私立京都女子専門学校が設立された。(京都)

4月 助教授藤森舜吉（京都府立医専明治41年卒業)が教授(外科学)に任ぜられた。

4月 慶応義塾大学部医学科が慶応義塾大学医学部と改称された。
同志社大学が大学令による大学として認可された。(京都)

5月 東京上野公園でメーデーが初めて行なわれ，約1万人が参加した。

6月 愛知県立医学専門学校が県立愛知医科大学に昇格した。
宇多野結核療養所が開設された。(京都)

7月 教授(外科学)藤森舜吉が退職した。

7月 学位令が改正されて，各大学に学位審査権が与えられ，文部大臣の認可を得て各大学で学位が授与できるようになった。

8月 学術研究会議が設立された。

9月　国立栄養研究所が設立された。

10月　東京帝国大学医学部で産婆養成所が再び産婆復習科と改称された。
第1回国勢調査が実施され，10月1日現在の京都府の人口は1,287,147人で世帯数は276,930戸であった。京都市の人口は591,323人であった。(京都)

11月　教授(ドイツ語)穂積茂(35歳)が鴨川で夜釣り中に殺害された(犯人不明)。

12月　米国留学中休職になった教授（神経精神科学)野田浦弼が帰朝して復職した。
大学昇格認可申請書の文部省への提出が，府会で難航の末，可決された。京都における2つの医科の大学の必要性が問題にされたものである。これは第3の危機であった。(第2の危機は明治33年12月)。

12月　医師の総数は45,488名(このうち帝大卒業生は4,537名,医専卒業生は18,485名)であった。

1921年（大正10年）

京都府立医科大学

1月　昇格期成同盟会が上京区大将軍鷹司町の買収地6,896坪を予科・花園分院の建設地として，京都府に寄付した。

1月　私立熊本医学専門学校が県立に移管され，熊本県立医学専門学校と改称された。

2月　済生会京都支部西陣診療所が開設された。(京都)
日本医事新報が創刊された。

4月　第三高等学校講師野村梅吉（京都帝大大正5年卒業)が教授(ドイツ語)に任ぜられた。

4月　北海道帝国大学に医学部が新設された。

7月　職員留学規程が改正された。
教授(耳鼻咽喉科学)中村登が欧米各国へ出張した(大正12年2月帰朝)。
昇格が確実となり，医大予科生徒（第1学年・第2学年）が医専予科生徒として募集された。

7月　知事馬淵鋭太郎が京都市長に転出し，若林資蔵が第13代の京都府知事に就任した。(京都)
京都市医師会に附属看護婦学校が附設された。(京都)

8月　上京区大将軍鷹司町で予科校舎・花園分院の新築工事が起工された。

9月　鶴田多八（東京帝大明治40年卒業）が教授(国語)に任ぜられた。
永井種次郎(京都帝大大正10年卒業)が教授(数学)に任ぜられた。
門田治郎吉が教授(生物学)に任ぜられた。
医専予科の第1学年には103名が入学し，第2学年には医専在学生から25名が入学し，本校内の仮教室で授業が行なわれた。

10月　京都府立医科大学（7年制，予科3年・本科4年，入学定員80名）の設立が19日に認可された。
医専予科が医大予科と改称された。
京都府立医学専門学校附属療病院の名称は変更されなかった。
校長兼院長小川瑳五郎が京都府立医科大学の初代の学長に任命され，医専校長・院長を兼任した。
皇后陛下からの御内帑金（300円）が特別会計として職員・生徒善行表彰金にあてられた。

10月　東京慈恵医院医学専門学校が東京慈恵会医科大学に昇格改称された。

11月　創立50周年記念式典・大学昇格祝賀式典が1日に挙行された。大正10年(1921年)は京都療病院の仮療病院の開設の年(1872年)から数えて50年目にあたる。
本学の創立記念日はこれまで4月16日（京都療病院医学校創立日）であったが，創立50周年記念式典を機会に11月1日（京都療病院仮療病院開設日)に改められた。
予科の校章が制定された。これは予科1年生児玉邦男の橘の図案が京都高等工芸学校の本野精吾教授によって修正されたもので，制帽はこの校章に2条の白線を巻くことになった。

11月　東京帝国大学医学部で皮膚病・黴毒病教室が皮膚科・泌尿器科学教室と改称された。

12月　医専教授広木多三(ドイツ語)・立入保太郎(化学)・野村梅吉(ドイツ語)・鶴田多八(国語)・門田治郎吉(生物学)・永井種次郎(数学)が予科教授に任ぜられ，医専教授を兼任した。
医専幹事中道貫一が大学幹事に任ぜられた。
予科教授(ドイツ語)広木多三が初代の予科主事に補せられた。

1922年（大正11年）

1月　京都府立医科大学・予科学則が制定された。

2月　京都帝国大学講師柴久光（京都帝大大正7年卒業）が予科教授（物理学）に任ぜられた。
元立命館大学予科・専門部講師で医専予科講師宮田一（京都帝大大正7年卒業）が予科教授（英語）に任ぜられた。
医専教授（病理学）梅原信正が欧米各国へ出張した（大正12年2月帰朝）。

3月　予科教授（生物学）門田治郎吉（30歳）が死去した。
仏教大学教授兼大谷大学教授榎本安三郎（京都帝大明治45年卒業）が予科教授（ドイツ語）に任ぜられた。
学年の開始時期が4月に変更されたため，冬期休業中に補講が行なわれて，3月末に学年を終了した。

3月　東京帝国大学医学部に財団法人好仁会が設立された。
未成年者飲酒禁止法が公布された。
官立医科大学官制が公布された。

4月　学年の開始が9月から4月に改められた。
看病婦長髙島チヨが看病婦（総）取締を命ぜられた。
京都府立医学専門学校校友会が京都府立医科大学学友会と改称され，学長が学友会長を兼ねた。
京都府立医学専門学校校友会雑誌が第91号で京都府立医科大学校友会雑誌と改題された。

4月　岡山医学専門学校・新潟医学専門学校が医科大学に昇格した。
第6回日本医学会が初めて京都で開催された。
健康保険法が公布された。

5月　上京区大将軍鷹司町に予科校舎（建坪810坪，延坪1,045坪，総工費16.6万円）が竣工した。
医専教授（産科・婦人科学）加治安信が欧米各国へ出張した。（大正12年3月帰朝）。

5月　熊本県立医学専門学校が県立熊本医科大学に昇格した。
本派本願寺の仏教大学が大学令による大学として認可され，竜谷大学と改称された。（京都）
大谷大学が大学令による大学として認可された。（京都）

6月　医専教授（内科学）梅田信義が退職した。

6月　私立京都法政専門学校が立命館大学に昇格改称された。（京都）

7月　上京区大将軍鷹司町の予科東隣接地に附属療病院花園分院（精神科，建坪1,177坪，延坪1,207坪，総工費18.2万円，200名収容）が竣工した。
医専教授（神経精神科学）野田浦弼が花園分院長に補せられた。

8月　医専教授（薬物学）革島廉三郎が退職した。
予科講師箕浦忠愛（東京高師大正2年卒業，シカゴ大学へ留学）が予科教授（生物学）に任ぜられた。

9月　外科が第一部・第二部に分けられ，医専教授（外科学）河村叶一が外科第一部長を命ぜられた。
京都衛戍病院附陸軍三等軍医正医学博士医学士鈴木正次（京都帝大明治44年卒業）が医専教授（外科学）に任ぜられ，外科第二部長を命ぜられた。
本館が漏電で焼失した。
19・20号病舎が竣工した。

9月　南満医学堂が満洲医科大学に昇格改称された。

10月　京都府立医科大学校友会雑誌が第92号から京都府立医科大学学友会雑誌と改題された。

10月　知事若林賚蔵が辞任し，池松時和が第14代の京都府知事に就任した。（京都）
東京丸ノ内に丸ビル（延坪20,000坪，総工費1,000万円）が竣工した。

11月　予科開校・花園分院開院祝賀式典が1日に挙行された。

この年　大日本生理学会が設立された。

1923年（大正12年）

1月　京都府立医科大学学術集談会が発足した。

2月　医専教授（眼科学）増田隆が欧米各国へ出張した（9月帰朝）。
学長兼院長小川瑳五郎が医科大学教授（内科学）を兼任し，内科第一部長を命ぜられた。
京都帝国大学教授浅山忠愛（京都帝大明治39年卒業）が教授（内科学）に任ぜられ，内科第二部長を命ぜられた。
医専助教授松永周三郎（京都府立医専明治

42年卒業)が医専教授(内科学)に任ぜられた。
第1回学術集談会が開催された。

3月 医専教授三浦操一郎(小児科学)・吉川順治(胃腸科学)・角田隆(病理学)・河村叶一(外科学)・島田吉三郎(解剖学)・加治安信(産科・婦人科学)・越智真逸(生理学)・増田隆(眼科学)・常岡良三(衛生学・微生物学)・本永七三郎(歯科学)・中村登(耳鼻咽喉学)・鈴木正次(外科学)・梅原信正(病理学)・野田浦弼(神経精神科学)・中川清(皮膚泌尿器科学)が医科大学教授に任ぜられ,医専教授を兼任した。
医科大学に学生監が置かれ,教授(病理学)兼医専学生監角田隆が医科大学学生監を兼務した。
予科講師吉峯時之輔(東京帝大大正8年卒業)が予科教授(鉱泉学・分析学)に任ぜられた。
京都府立医専の初代校長の島村俊一(63歳)が死去した。

3月 医師法が改正されて,日本医師会の設置が規定された。
日本医科器械学会が設立された。

4月 細長い「大学」の文字の校章が教授会で決定されたが,学生は帝大の「大学」に似た徽章を要求して,制帽を着用せず,校章忌避運動を展開した。
教授(胃腸科学)吉川順治が欧米各国へ出張した(12月帰朝)。
初めての本科学生40名(予科修了生20名,医専卒業生からの入学生20名)を迎えて開学式が挙行された。
精神病舎跡に2等病舎(13・15号病舎)が竣工した。

4月 千葉医学専門学校・金沢医学専門学校・長崎医学専門学校が官立医科大学に昇格した。
府立農林学校が府立京都農林学校と改称された。(京都)
日本レントゲン学会が設立された。
日本結核病学会が設立された。
郡制が廃止された。
恩給法が公布された。

5月 教授(生理学)越智真逸が欧米各国へ出張した(12月帰朝)。
学位授与規定が認可され,学位授与権が与えられた。

6月 予科教授(化学)立入保太郎が京都帝国大学医学部附属医院薬局長に転出のため退職した。

6月 精神病院法施行令が公布された。

9月 関東大震災で東京・横浜へ救護班が派遣された。
京都府立医科大学学友会雑誌が第94号から京都府立医科大学雑誌(学友会発行)と改題された。

9月 1日に関東大地震(7.9マグニチュード)がおこり,同時に発生した大火災も加わって,全壊家屋128,266戸,焼失家屋447,128戸,死者99,331人,行方不明43,476人の大被害が出た。

10月 愛知医科大学予科との第1回交歓対抗競技大会が名古屋で開催された。その後毎年京都と名古屋で交互に開催され,昭和5年まで続いた。

10月 南満医学堂が満洲医科大学に昇格改称された。
東京に164名のコレラ患者が発生した。

11月 東京顕微鏡院技師薬学士森益蔵(東京帝大大正9年卒業)が予科教授(化学)に任ぜられ,調剤部長を兼務した。

11月 大日本医師会が解散して,法定日本医師会が設立された。
府立植物園が開園された。(京都)

12月 東北帝国大学助教授後藤基幸(京都帝大明治44年卒業)が教授(医化学)に任ぜられた。
薬物学・法医学教室(2階建,建坪74坪,総工費2.5万円)が竣工した。

1924年(大正13年)

京都府立医科大学附属医院(←京都府立医学専門学校附属療病院)
京都府立医学専門学校廃止

1月 学長兼院長兼教授(内科学)小川瑳五郎が欧米各国へ出張した(7月帰朝)。
教授(小児科学)三浦操一郎が,学長兼院長小川瑳五郎の不在中,学長兼院長代理を命ぜられた。

1月 京都帝室博物館が京都市に下賜され,恩賜京都博物館と改称された。(京都)

東北帝国大学医学部が全焼した。

2月 教授(歯科学)本永七三郎が欧米各国へ出張した(12月帰朝)。

3月 学長小川瑳五郎の不在中に，現行の「大学」の校章(徽章)と「醫」の襟章が制定された。

予科教授(ドイツ語)野村梅吉が福岡高等学校教授に転出のため退職した。

助教授藤井猪十郎（京都府立医専大正3年卒業）が教授(薬物学)に任ぜられた。

予科講師高坂正顕(京都帝大大正12年卒業)が予科教授(ドイツ語)に任ぜられた。

3月 大阪医科大学病院の5年9ヵ月に及ぶ大改築工事(総工費300万円)が完了した。

4月 国民健康保険法が公布された。

5月 予科教授(数学)永井種次郎が大阪高等学校教授に転出のため退職した。

6月 京都府立医学専門学校の最後の第25回（京都府医学校から第51回)の卒業式(116名)が行なわれた。

予科試験規則が急に変更されたことから，広木多三教授の予科主事辞任を要求して，予科生が1週間の同盟休校を行なった。このため1学期末試験は9月に延期された。

8月 予科教授(ドイツ語)広木多三が予科主事を辞任した。

予科教授(英語)宮田一が初代の予科学生監に補せられた。

9月 医学専門学校最後の卒業生(5名)が出て，京都府立医学専門学校は廃止された。

附属医院の炊事場・大食堂（鉄筋コンクリート造り，地下1階地上3階建，建坪132坪，延坪556坪，総工費11.8万円)が竣工した。これは本学で最初の鉄筋コンクリート造りの建物であった。

10月 京都府立医学専門学校附属療病院が京都府立医科大学附属医院と改称された。

京都府立医科大学・附属医院職務規定・処務細則が制定された。

附属療病院有給医員・無給医員が医科大学助手・副手と改称された。

調剤局が再び薬局と改称され，調剤部長が薬局長と改称された。

医学専門学校附属産婆・看護婦教習所が医科大学附属産婆・看護婦教習所となった。

学長小川瑳五郎が院長を兼任した。

学則が改正された。

職員留学規程が新たに制定された。

皇后陛下の御内帑金による特別会計（大正10年10月設定）が職員の学術研究費・学生生徒の学業奨励費に変更された。

予科講師宇野喜代之介（東京帝大大正7年卒業)が予科教授(ドイツ語)に任ぜられた。

医専教授(解剖学)赤座寿恵吉が退職し，医科大学講師(解剖学)を嘱託された。

医専教授(内科学)松永周三郎が退職し，医科大学講師(内科学)を嘱託された。

10月 体育研究所が設立された。

12月 市電河原町線の丸太町・今出川間が開通し，「府立病院前」の停留所ができた。(京都)

知事池松時和が辞任し，池田宏が第15代の京都府知事に就任した。(京都)

この年 国家医学会が社会医学会と改称された。

1925年（大正14年）

2月 教授(皮膚泌尿器科学)中川清が欧米各国へ出張した(10月帰朝)。

3月 旧本館跡に新本館(鉄筋コンクリート造り，3階建，建坪78坪，延坪226坪，総工費9.8万円）が竣工した。これは本学で2番目の鉄筋コンクリート造りの建物であった。

京都府立医科大学一覧が初めて刊行された。

神戸高等工業学校教授佐々木宗要（東京帝大明治33年卒業)が予科教授（英語）に任ぜられ，予科主事に補せられた。

3月 東京放送局が開設され，ラジオ仮放送を開始した。

帝国女子医学薬学専門学校が設立された。

東京・大阪・福岡間に定期郵便飛行が開始された。

4月 教授(外科学)鈴木正次が欧米各国へ出張した(10月帰朝)。

予科の校庭に陞格記念碑（大西三四郎・高橋才治郎製作の獅子の銅像）が建てられた。

昇格期成同盟会が解散した。同会の醵金総額は136,800円であった。

予科講師東儀正(京都帝大大正10年卒業)が予科教授(数学)に任ぜられた。

講師（外科学）宇野鬼一郎(京都府立医専大正6年卒業)・台湾総督府中央研究所技手古玉太郎(京都府立医専大正7年卒業)が本学における第1号・第2号の学位記を受領

した。
助教授後藤五郎が理学的診療科学研究のため東京帝国大学へ留学した（大正15年7月帰学）。
陸軍少佐石井親俊が初代の予科軍事教官として配属された。
4月　陸軍現役将校配属令が公布された。大学学部・私立学校では申請制であった。
5月　予科教授（ドイツ語）広木多三が退職し，予科講師（ドイツ語）を嘱託された。
5月　日本生化学会が設立された。
日本内分泌学会が設立された。
7月　本学からの現役将校配属申請によって，陸軍大佐前田勇が初代の本科軍事教官として配属された。
7月　東京放送局（JOAK）がラジオ本放送を開始した。聴取者数は5,455人であった。
9月　助教授（小児科学）斎藤二郎が欧米各国へ出張した。助教授では最初の公費による外国留学であった（大正15年6月帰朝）。
予科教授（鉱泉学・分析学）吉峯時之輔が休職になった。
9月　叡山電鉄の出町柳・八瀬間が開通した。（京都）
10月　休職中の予科教授（鉱泉学・分析学）吉峯時之輔（33歳）が死去した。
私立京都薬学専門学校教授森島三郎（東京帝大大正10年卒業）が予科教授（化学）に任ぜられた。
10月　第2回国勢調査で10月1日現在の京都府の人口は 1,406,382人，京都市の人口は679,963人であった。（京都）
11月　教授（産科・婦人科学）加治安信が退職した。
京都帝国大学助教授山田一夫（京都帝大大正5年卒業）が教授（産科・婦人科学）に任ぜられた。
11月　京都市医師会附属看護婦学校が附属産婆看護婦学校と改称された。（京都）
12月　教授（眼科学）増田隆（40歳）が死去した。

1926年（大正15年，昭和1年）

12月25日から昭和1年

2月　産業医学会が設立された。
日本医学専門学校が日本医科大学に昇格した。
4月　教授（薬物学）藤井猪十郎が欧米各国へ出張した（昭和3年5月帰朝）。
学友会の京都医学図書館が大学に移管され，中央図書館として本館2階に開設された。
4月　第7回日本医学会が東京で開催された。
日本整形外科学会が設立された。
5月　京城帝国大学が新設され，法文学部・医学部が設置された。
6月　教授（病理学）梅原信正が初代の図書館主任を命ぜられた。
6月　日本伝染病学会が設立された。
健康保険法施行令が公布された。
7月　前台北医院眼科部長，講師藤原謙造（京都帝大明治44年卒業）が教授（眼科学）に任ぜられた。
教授（神経精神科学）野田浦弼が退職した。
助教授久保昱二郎（京都府立医専明治44年卒業）が教授（神経精神科学）に任ぜられ，花園分院長に補せられた。
レントゲン科が新設され，助教授後藤五郎が初代の部長を命ぜられた。
8月　学長兼院長兼教授（内科学）小川瑳五郎が退職した。
教授（内科学）浅山忠愛が学長に任命され，院長を兼任し，内科第一部長を命ぜられた。
9月　京都帝国大学助教授飯塚直彦（京都帝大大正5年卒業）が教授（内科学）に任ぜられ，内科第二部長を命ぜられた。
9月　知事池田宏が辞任し，浜田恒之助が第16代の京都府知事に就任した。（京都）
12月　教授（解剖学）島田吉三郎が欧米各国へ出張した（昭和2年6月帰朝）。

1927年（昭和2年）

1月　健康保険法が全面的に実施された。
宇治町木幡に京都府代用病院として京都脳病院が開設された。（京都）
2月　日本黴毒学会が設立された。
私立大阪高等医学専門学校が設立された。
3月　北丹後地方震災で峰山町に救護班が派遣された。
京都府立医科大学の第1回卒業式（27名，後に1名）が行なわれ，卒業生には医学士の称号が与えられた。
予科教授（ドイツ語）宇野喜代之介が山形高等学校教授に転出のため退職した。

3月 京都府立女子専門学校が設立された。(京都)
医科大学の卒業の時期が3月に定められた。
北丹後地震(7.4マグニチュード)がおこった。

4月 花柳病予防法が公布された。
衛生学・微生物学・寄生虫学聯合学会が設立された。
日本薬理学会が設立された。
新市庁舎が竣工した。(京都)
知事浜田恒之助が休職となり，宮城県知事杉山四五郎が第17代の京都府知事に就任した。(京都)

5月 教授(病理学)角田隆が中華民国・欧米各国へ出張した(12月帰朝)。
教授(病理学)角田隆が学生監を辞任し，教授(微生物学・衛生学)常岡良三が学生監に補せられた。
予科教授(英語)宮田一が欧米各国へ出張した。予科教授では最初の外国留学であった(昭和4年1月帰朝)。
予科教授(英語)宮田一が学生監を辞任し，予科教授(ドイツ語)榎本安三郎が学生監に補せられた。
京都府立医科大学雑誌(隔月発行)の発行が学友会から学術研究会に移され，内容も純学術的に改められ，通巻第104号が新京都府立医科大学雑誌の第1巻第1号となった。これの欧文名は Mitteilungen aus der medizinischen Akademie zu Kioto とされた。

6月 京都府立医科大学学術研究会が設立され，京都府立医科大学雑誌の発行・学術集談会の開催がその主な事業であった。
予科教授(国語)鶴田多八(45歳)が死去した。

6月 松ヶ崎浄水場が完成した。(京都)

7月 大日本産婆会が結成された。
知事杉山四五郎が内務次官に転出し，内務省神社局長大海原重義が第18代の京都府知事に就任した。(京都)

8月 助教授(内科学)松永周三郎が日本赤十字社京都支部病院長に就任のため休職になり，大学講師を嘱託された(昭和5年3月退職)。

9月 教授(外科学)河村叶一が休職になった。

9月 癩学会が設立された。
東京帝国大学医学部附属医院が焼失した。

10月 神戸第一高等女学校高等科教諭頴原(えはら)退蔵(京都帝大大正9年卒業)が予科教授(国語)に任ぜられた。
学友会雑誌部から京都府立医科大学時報が創刊された。

10月 東京帝国大学医学部で薬物学が薬理学と改称された。

11月 長崎医科大学教授望月成人(京都帝大大正4年卒業)が教授(外科学)に任ぜられ，外科第一部長を命ぜられた。

11月 日本医史学会が設立された。
上野・浅草間に初めて地下鉄が開通した。

1928年(昭和3年)

2月 私立九州医学専門学校(久留米)・私立岩手医学専門学校(盛岡)が設立された。
普通選挙法による初めての衆議院議員選挙が行なわれた。

3月 予科講師北上四郎(京都帝大昭和2年卒業)が予科教授(生物学)に任ぜられた。
予科講師武田鉄五郎(京都帝大昭和2年卒業)が予科教授(ドイツ語)に任ぜられた。
京都府立医科大学時報が第4号で廃刊となった。

3月 台北帝国大学が新設された。
私立昭和医学専門学校が設立された。
東京医学専門学校が全焼した。
日本共産党1,000余名の大検挙が行なわれた。

4月 教授(産科・婦人科学)山田一夫が欧米各国へ出張した(10月帰朝)。
助教授勝義孝(京都府立医専大正8年卒業)が教授(解剖学)に任ぜられた。
理学的診療科学教室が新設され，レントゲン科が理学的診療科と改称された。
助教授後藤五郎(九州帝大大正8年卒業)が教授(理学的診療科学)に任ぜられ，理学的診療科学の初代の教授となり，理学的診療科学教室の創設者となった。
学友会新聞部から京都府立医科大学新聞が創刊された。

4月 社会医学会が日本法医学会と改称された。

5月 幹事中道貫一(66歳)が死去した。

5月 市営バスが運転を開始した。(京都)

6月　私立大阪女子高等医学専門学校が設立された。
伏見病院に附属産婆看護婦学校が附設された。(京都)
8月　京都府内務部会計課長中西喜一郎が附属医院庶務部長に任ぜられ，幹事事務取扱を兼務した。
8月　府庁舎改築工事が竣工した。(京都)
9月　教授(小児科学)三浦操一郎(59歳)が死去した。
9月　花柳病予防法が施行された。
10月　天皇・皇后両陛下の御真影奉戴式が挙行された。
11月　教授(胃腸科学)吉川順治(46歳)が死去した。
教授(外科学)鈴木正次が退職した。
11月　新京阪電鉄の天神橋・西院間が開通した。(京都)
奈良電鉄の京都・西大寺間が開通した。(京都)
12月　助教授斎藤二郎（京都府立医専明治44年卒業)が教授(小児科学)に任ぜられた。
本館屋上に御真影奉安庫が設けられ，奉遷式が挙行された。
長崎医科大学教授横田浩吉（京都帝大大正7年卒業)が教授(外科学)に任ぜられ，外科第二部長を命ぜられた。
附属医院庶務部長中西喜一郎が幹事に任ぜられた。
12月　健康保険診療方針(歯科を除く)が定められた。
文部省の理化学研究奨励補助費制度が廃止された。

1929年（昭和4年）

2月　休職中の教授(外科学)河村叶一が退職した。
2月　日本寄生虫学会が設立された。
3月　助教授(胃腸科学)川井銀之助が胃腸科部長代理を命ぜられた。
4月　県立熊本医科大学が官立に移管された。
日本聯合衛生学会が設立された。
京都市に左京区・中京区・東山区が設けられた。(京都)
5月　教授(解剖学)勝義孝が欧米各国へ出張した(昭和5年5月帰朝)。
大学の校旗が制定された。
本館の南側に中央図書館（地階学生控所・体育場，1階普通教室2室，2階図書館，3階階段教室2室の地下1階地上3階建，建坪200坪，延坪580坪，総工費15.2万円)が竣工した。
7月　教授(微生物学・衛生学)常岡良三が学生監を辞任し，教授(医化学)後藤基幸が学生監に補せられた。
職員・学生・患者の福祉施設として財団法人昭和会が設立された。
附属医院で健康保険診療が開始された。
7月　知事大海原重義が辞任し，内務省地方局長佐上信一が第19代の京都府知事に就任した。(京都)
済生会京都府病院が開設された。(京都)
東京・大阪・福岡間に旅客航空輸送が開始された。
8月　教授(微生物学・衛生学)常岡良三が欧米各国へ出張した(昭和5年5月帰朝)。
9月　教授(医化学)後藤基幸が学友会理事長になった。
12月　京都帝国大学医学部附属医院で健康保険診療が開始された。(京都)

1930年（昭和5年）

2月　共産党弾圧検挙で4名の学生生徒が検挙されたが，2名はすぐに釈放され，2名は起訴猶予となった。このような検挙は昭和8年まで続いた。
2月　京都帝大・府立医大・同志社大・竜谷大・三高・府立女専の学生社会科学研究会のメンバーが総検挙された。(京都)
3月　7ヵ年の歳月と8億円の巨費が投ぜられて帝都が復興した。
全国の失業者が31万人と発表された。
4月　第8回日本医学会が大阪で開催された。
日本聯合微生物学会が設立された。
5月　2階建の臨床講堂が竣工した。
大学昇格に伴う病院大改築工事が開始され，まず病舎改築第1期工事が起工された。
6月　同志社女子専門部が同志社女子専門学校と改称された。(京都)
9月　新京阪鉄道が京阪電鉄に合併された。(京都)
10月　附属医院が市職業紹介所を通じて輸血用の

給血者を募集したところ失業者が殺到した。
10月 第3回国勢調査で10月1日現在の京都府の人口は 1,552,832人，京都市の人口は765,142人であった。(京都)
東海道本線で特急つばめの運転が開始された。東京・大阪間の所要時間は8時間20分であった。
11月 元医専校長望月惇一(72歳)が死去した。
11月 わが国最初の国立癩療養所の長島愛生園が開設された。
日本民族衛生学会が設立された。
東京帝大解剖学教室研究生西村庚子（東京女子医専大正10年卒業）がわが国で女性最初の医学博士を受領した。
北伊豆地震(7.0マグニチュード)がおこった。
12月 医師の総数は49,681名(このうち大学卒業生は11,465名，医専卒業生は24,347名)であった。

1931年（昭和6年）

2月 天皇・皇后両陛下の新御真影奉戴式が挙行された。
3月 教授(神経精神科学)久保昱二郎が欧米各国へ出張した(12月帰朝)。
教授(外科学)横田浩吉が欧米各国へ出張した(11月帰朝)。
予科教授(国語)顎原退蔵が京都帝国大学助教授に転出のち退職した。
3月 京都高等蚕業学校が京都高等蚕糸学校と改称された。(京都)
京阪電鉄新京阪線の西院・四条大宮間の地下鉄が開通した。(京都)
4月 成城高等学校教授佐伯梅友（東京高師大正11年卒業)が予科教授(国語)に任ぜられた。
4月 伏見市など27市町村が京都市に編入され，伏見区・右京区が設置された。(京都)
5月 県立愛知医科大学が官立に移管され，名古屋医科大学と改称された。
大阪帝国大学が新設されて，医学部が設置され，大阪医科大学が大阪帝国大学医学部となった。
6月 教授(医化学)後藤基幸が学友会理事長を辞退し，予科教授(化学)森益蔵が理事長になった。
8月 学生監が学生主事(本科)・生徒主事(予科)と改称された。
教授(医化学)後藤基幸が学生監を辞任し，教授(生理学)越智真逸が学生主事に補せられた。
病舎改築第1期工事(9・10・11号病舎，87床，3階建，延坪780坪，総工費28万円)が竣工した。
佐上信一知事が予科廃止案を発表したが，大学側の反対で撤回した。これは予科跡に京都府立女子専門学校を設置するためであった。
9月 満洲事変が勃発した。
10月 知事佐上信一が北海道庁長官に転出し，新潟県知事黒崎真也が第20代の京都府知事に就任した。(京都)
11月 創立60周年・大学昇格10周年祝典が1日に挙行された。
11月 健康保険歯科診療方針が定められた。
12月 知事黒崎真也が休職になり，内務省警保局長横山助成が第21代の京都府知事に就任した。(京都)

1932年（昭和7年）

1月 教授(理学的診療科学)後藤五郎が欧米各国へ出張した(11月帰朝)。
1月 第一次上海事変がおこった。
3月 満洲国の建国が宣言された。
4月 四条大宮・西院間にトロリーバスが運転を開始した。(京都)
6月 学長兼院長兼教授(内科学)浅山忠愛が欧米各国へ出張した(昭和8年1月帰朝)。
6月 知事横山助成が神奈川県知事に転出し，大阪府知事斎藤宗宜が第22代の京都府知事に就任した。(京都)
NHKラジオ京都放送局が開局された。(京都)
7月 病舎改築第2期工事が起工された。
12月 府立健康相談所が開設された。(京都)
財団法人日本学術振興会が設立された。

1933年（昭和8年）

1月 京都府立医科大学新聞第53号(1月15日号)が予科生徒の反戦記事のために差押え処分をうけた。

3月　助教授(胃腸科学)川井銀之助が胃腸科部長を命ぜられた。
3月　日本が国際聯盟を脱退した。
三陸沖地震(8.5マグニチュード)で大津波がおこった。
4月　予科教授(ドイツ語)榎本安三郎が生徒主事を辞任し，予科教授(化学)森島三郎が生徒主事に補せられた。
教授(耳鼻咽喉科学)中村登が欧米各国へ出張した(9月帰朝)。
5月　学友会館建設準備委員会が発足した。
6月　巨椋池干拓工事が開始された。(京都)
7月　日本放射線医学会が設立された。
8月　病舎改築第2期工事(9・10・11号病舎残部，12・13・15・16号病舎，100床，4階建，延坪868坪，総工費23万円)が竣工した。
9月　病舎改築第3期工事が起工された。
11月　癩学会が日本癩学会と改称された。
京都市大礼記念美術館が開設された。(京都)
12月　長崎医科大学で学位売買事件がおこった。

1934年（昭和9年）

1月　京都駅構内の階段で呉海兵団入団者見送りの群衆が3番ホームに折り重なって転落し，150名の死傷者(死者76名)が発生し，負傷者は市内の各病院に送られ，本学附属医院にも27名が収容された。死因は，その後に望月外科学教室で行なわれた実験的研究から，軀幹圧迫症と名付けられた。
学友会館建設計画案が発表された。これは旧看護婦寄宿舎跡に10万円の建設資金で3階建の会館を建てるというものであった。
2月　臨済学院専門学校が設立された。(京都)
3月　衛生学教室が微生物学・衛生学教室から独立し，講師赤野六郎(本学昭和5年卒業)が助教授に任ぜられて衛生学を担当し，衛生学教室の創設者となった。
教授(病理学)梅原信正が欧米各国へ出張した(12月帰朝)。
3月　函館に大火がおこった。
4月　教授(病理学)兼図書館主任梅原信正の外国出張中，教授(微生物学)常岡良三が図書館主任代理を命ぜられた。
助教授(衛生学)赤野六郎が欧米各国へ出張した。(昭和10年9月帰朝)。
予科に指導教授制が設けられた。
4月　第9回日本医学会が東京で開催された。
5月　花園分院に内科・外科が附設された。
中江竜二氏から結核病研究費として1万円が寄付された。
5月　財団法人癌研究所が開設された。
6月　第1回満鮮聯合医学会が奉天で開催された。
7月　病舎改築第3期工事(12・13・15・16号病舎残部，特等病舎，92床，4階建，延坪1,604坪，総工費35万円)が竣工した。
附属医院の看護婦・職員・傭人から55名の腸チフス患者が8月にかけて発生し，13名(看護婦10名，職員2名，傭人1名)の死者を出した。これは隔離病舎勤務の看護婦による院内感染が原因であった。
9月　近畿地方大風水害で各方面に救護班が派遣された。
9月　関西一帯が室戸台風に襲われ，死者・行方不明3,000人，負傷者8,000人，全壊家屋34,500戸，流失家屋2,300戸の被害が出た。
10月　東京帝国大学医学部で病理学・病理解剖学教室が病理学教室，放射線学教室が放射線医学教室と改称された。
11月　日本赤十字社京都支部病院(現京都第一赤十字病院)が開設された。(京都)

1935年（昭和10年）

1月　病舎改築第4期工事が起工された。
教授(生理学)越智真逸が学生主事を辞任し，教授(解剖学)勝義孝が学生主事に補せられた。
教授(生理学)越智真逸が欧米各国へ出張した(8月帰朝)。
1月　日本温泉気候学会が設立された。
知事斎藤宗宜が辞任し，長崎県知事鈴木信太郎が第23代の京都府知事に就任した。(京都)
4月　日本循環器病学会が設立された。
日本神経学会が日本精神神経学会と改称された。
台湾に大地震がおこり，3,000名の死者が出た。

5月　教授(医化学)後藤基幸が欧洲・南洋諸島へ出張した(病気のため9月帰朝)。
5月　日本衛生昆虫学会が設立された。
6月　学生生徒生活調査が毎年行なわれることになった。
大豪雨(29日)で市内の各河川が氾濫して罹災者が続出し，各所に救護班が派遣された。
8月　八木町に南丹病院が開設された。(京都)
10月　比良山に本学の山小屋の比良山荘（深谷山荘)が竣工した。
10月　第4回国勢調査で10月1日現在の京都府の人口は 1,702,508人，京都市の人口は 1,080,593人であった。(京都)
11月　病舎改築第4期工事（5・6・7・8号病舎，124床，4階建，延坪1,048坪，総工費24万円)が竣工した。
この年　附属医院の北側の土地を買収した。

1936年（昭和11年）

1月　病舎改築第5期工事が起工された。
1月　台北帝国大学に医学部が設置された。
2月　教授定年退職申合せが定められ，定年は63歳とされた。定年退職教授には名誉講師の称号が授与されることになった。
2月　東京で26日に2.26事件がおこり，皇道派青年将校ら1,400人の将兵が反乱を企て，重臣・朝日新聞社を襲撃したが，反乱軍は29日に帰順した。
3月　予科教授(ドイツ語)高坂正顕が東京文理科大学助教授に転出のため退職した。
予科教授(化学)兼生徒主事森島三郎が退職した。
予科教授(物理学)柴久光が生徒主事事務取扱を命ぜられた。
4月　日本保険医協会が日本保険医学会と改称された。
知事鈴木信太郎が辞任し，広島県知事鈴木敬一が第24代の京都府知事に就任した。(京都)
鴨川大改修工事が起工された。(京都)
5月　講師(解剖学)赤座寿恵吉が退職した。
6月　予科の西南隅に図書館・食堂(木造2階建，1階食堂，2階図書館)が竣工した。
7月　学長兼院長兼教授(内科学)浅山忠愛が学長兼院長を辞任した。
学長の院長兼任制が廃止された。
教授(病理学)角田隆が学長に任命された。
教授(耳鼻咽喉科学)中村登が院長に補せられた。
9月　西陣病院が開設された。(京都)
10月　病舎改築第5期工事（21・22・23号隔離病舎，78床，3階建，延坪979坪，総工費27万円)が竣工した。
12月　教授(眼科学)藤原謙造が欧米各国へ出張した(昭和12年9月帰朝)。
助教授(胃腸科学)川井銀之助が欧米各国へ出張した(昭和13年4月帰朝)。

1937年（昭和12年）

1月　予科講師荒木新太郎（京都帝大昭和2年卒業)が予科教授(化学)に任ぜられた。
予科講師下程勇吉(京都帝大昭和5年卒業)が予科教授(ドイツ語)に任ぜられた。
3月　教授(生理学)越智真逸が中華民国へ出張した。
3月　母子保護法が公布された。
4月　助教授赤野六郎(本学昭和5年卒業)が教授(衛生学)に任ぜられ，衛生学の初代の教授となった。
4月　保健所法が公布された。
5月　教授(外科学)望月成人が欧米各国へ出張した(12月帰朝)。
5月　日本血液学会が設立された。
7月　日支事変(日中戦争)が勃発した。
8月　第二次上海事変がおこり，全面戦争に突入した。
10月　陸軍軍医予備員令が公布され，軍医志願者は陸軍病院で75日間(初めは15日間)の軍医予備員候補者教育をうけることになった。
京都帝国大学医学部附属医院で2教授の特診料事件がおこった。
国鉄の京都・明石間の電化が完成した。(京都)

1938年（昭和13年）

1月　厚生省が新設された。
2月　病舎改築第6期工事が起工された。
3月　公衆衛生院が設立された。
4月　国家総動員法が公布され，5月から施行

された。
国民健康保険法が公布された。
第10回日本医学会が京都で開催された。
台湾総督府台北医院が台北帝国大学附属医院となった。

5月　大日山の本学附属墓地の「学用患者之墓」の墓碑名が「倶会一処」に改められた。
本学附属墓地に研究動物諸霊供養塔が建てられた。

7月　予科教授(物理学)柴久光が生徒主事事務取扱を辞任し，予科教授(生物学)北上四郎が生徒主事に補せられた。

7月　国民健康保険法が施行された。

8月　教授(産婦人科学)山田一夫が満洲国・中華民国へ出張した。
教授(歯科学)本永七三郎が退職した。

10月　東京帝国大学医学部で産婆復習科が助産婦復習科と改称された。

11月　病舎改築第6期工事（17・18・19・20号病舎，80床，4階建，延坪722坪，総工費20万円）が竣工し，8年半にわたる総工費約160万円の病院大改築工事が完了した。

12月　講師井尻万太郎（京都府立医専大正8年卒業)が歯科学を担当した。

1939年（昭和14年）

3月　教授(解剖学)勝義孝が学生主事を辞任し，教授(薬物学)藤井猪十郎が学生主事に補せられた。

3月　文部省科学研究費補助金制度が設けられた。
名古屋帝国大学が新設され，名古屋医科大学が名古屋帝国大学医学部となった。

4月　米穀配給統制法が公布された。
知事鈴木敬一が辞任し，福岡県知事赤松小寅が第25代の京都府知事に就任した。(京都)

5月　附属医院に細菌検査所が附設された。
教授(解剖学)島田吉三郎が定年退職し，名誉講師に推薦された。これは最初の定年退職者であった。
予科講師(ドイツ語)広木多三が退職した。

5月　7帝国大学医学部と6官立医科大学に臨時附属医学専門部(4年制)が附設された。
ノモンハン事件がおこり，ノモンハンで日本軍とソ連・外蒙軍とが衝突した。

6月　教授(医化学)後藤基幸が日本学術研究会議会員に推薦された。

7月　国民徴用令が公布された。

8月　助教授(神経精神科学)松岡竜三郎が興亜学生勤労報国隊医療班長として中華民国・蒙彊へ出張した。
学長兼教授(病理学)角田隆が定年退職し，名誉講師に推薦された。
教授(微生物学)常岡良三が学長に任命された。
教授(耳鼻咽喉科学)中村登が院長を辞任し，教授(眼科学)藤原謙造が院長に補せられた。
教授(外科学)望月成人が満洲国・中華民国へ出張した。

8月　京都帝国大学医学部附属医院で看護婦・付添人・入院患者から36名の赤痢患者が発生した。

9月　第二次世界大戦が勃発した。

10月　予科教授(数学)東儀正が満洲国・中華民国へ出張した。

11月　二条離宮が京都市に移管され，二条城と改称された。(京都)

1940年（昭和15年）

4月　予科の入学定員が80名から100名に増員された。

4月　日本レントゲン学会と日本放射線学会とが合併して日本医学放射線学会が設立された。
知事赤松小寅が辞任し，長崎県知事川西実三が第26代の京都府知事に就任した。(京都)

5月　国民優生法が公布された(16年7月施行)。
日独伊3国同盟が締結された。

7月　助教授(外科学)今津九右衛門が興亜学生勤労報国隊医療班長として満洲国へ出張した。

8月　予科の教室増築工事（3教室，会議室，木造2階建，延坪52坪，総工費3万円）が竣工した。
教授(内科学)飯塚直彦・予科教授(生物学)北上四郎が満洲国・中華民国へ出張した。

9月　「比叡は明けたり」の新学歌が制定された。
作詞は伊良子暉造（京都府医学校明治32年卒業，詩人，号清白)，作曲は服部正であっ

た。

10月　第5回国勢調査で10月1日現在の京都府の人口は1,729,993人，京都市の人口は1,089,726人であった。なお，わが国の総人口は1億人を超えた。(京都)

11月　紀元2600年記念奉祝式典が宮城前広場で挙行された。

12月　予科助教授(教務)今井甚吉が予科教授に昇進して退職した。

12月　医師の総数は65,332名（このうち大学卒業生は25,451名，医専卒業生は31,551名)であった。

この年　附属医院の北側の土地を買収した。昭和10年に買収したものを併せると722坪，8.9万円であった。

1941年（昭和16年）

1月　知事川西実三が東京府知事に転出し，内務省警保局長安藤狂四郎が第27代の京都府知事に就任した。(京都)

2月　京都博愛病院が開設された。(京都)

3月　歯科学担当の講師井尻万太郎が助教授に昇進した。

3月　国民学校令が公布された。
医療保護法が公布された(10月1日施行)。

4月　附属医院北側の土地に看護婦寄宿舎改築工事が起工された。
学園の戦時態勢強化のため京都府立医科大学奉公会が結成された。

4月　小学校が国民学校と改称された。
生活必需物資統制令が公布された。
日ソ中立条約が締結された。
日本癌学会が設立された。
日本鉄道医協会が日本鉄道医学会と改称された。

5月　予科に弓道場が設けられた。

6月　予科教授(生物学)箕浦忠愛が満洲国・中華民国へ出張した。

7月　教授(生理学)越智真逸が満洲国・中華民国へ出張した。
講師(小児科学)巽弘が興亜学生勤労報国隊医療班長として満洲国へ出張した。
予科教授(英語)兼予科主事佐々木宗要が退職した。
予科教授(ドイツ語)榎本安三郎が予科主事に補せられた。
社会医学研究会の学生生徒14名（本科12名，予科2名）が検挙されたが，全員釈放された。この中には起訴猶予のものもあった。
社会医学研究会の無医村医療活動が禁止された。

7月　国民優生法が施行された。
保健婦規則が制定された。
御前会議で対ソ戦準備・南部仏印進駐の国策要綱が決定し，引き続いて70万の兵力を結集して関東軍特別大演習が実施された。

8月　予科教授(生物学)北上四郎が生徒主事を辞任し，予科教授(ドイツ語)武田鉄五郎が生徒主事に補せられた。

9月　本科学生2名が治安維持法違反で起訴され，2名共懲役2年執行猶予3年の判決をうけた。
京都府立医科大学学徒報国隊が結成された。

9月　御前会議で10月下旬に対英米蘭戦争準備完成の国策遂行要項が決定された。
学術研究会議(医学研究連絡委員会)から現行医学研究題目集(年刊)が創刊された。

10月　近衛文麿内閣が総辞職して，東條英機内閣が成立した。

11月　創立70周年・昇格20周年記念式典が1日に挙行された。
助教授荒木正哉（本学昭和4年卒業，旧姓久保)が教授(病理学)に任ぜられた。
本科にも指導教授制が設けられた。

11月　大学・専門学校の修業年限が暫定的に6ヵ月(昭和16年度は3ヵ月)短縮されることになった。
巨椋池干拓工事が完了した。(京都)

12月　府下八幡町から町有地25,000坪を運動場敷地として本学に寄付の申し出があったが，整備資金難のため立ち消えとなった。
昭和17年3月の卒業式が3ヵ月繰り上げて挙行された。

12月　第二次世界大戦において，日本が8日に米英蘭に宣戦を布告して，太平洋戦争が勃発した。
京都医事衛生誌が第573号で廃刊となった。
京都文化の功労者明石博高翁顕彰会がつくられた。(京都)

1942年（昭和17年）

1月　昭和17年から戦争のために修学年限が6カ月短縮されることにになり，予科は2年半，現在の本科生は3年半（ただし本年10月に入ってくる本科生からは元通り4年）に変更された。

2月　医師法など各種の医療関係法令が統合されて国民医療法が制定された。

3月　予科講師臼井竹次郎（京都帝大昭和7年卒業）が予科教授（ドイツ語）に任ぜられた。
京都府立第一高等女学校教諭森誉四郎（京都帝大昭和5年卒業）が予科教授（数学）に任ぜられた。

3月　第11回日本医学会が東京で開催された。

4月　予科の入学定員が100名から120名に増員された。

4月　新聞統合により京都新聞が創刊された。（京都）
日本医療団令が公布された（7月1日施行）。

5月　予科教授（物理学）柴久光が退職した。
予科講師塘（つつみ）仁三（京都帝大昭和11年卒業）が予科教授（物理学）に任ぜられた。
予科教授（国語）佐伯梅友が東京文理科大学助教授に転出のため退職した。
立命館大学教授浅田善二郎（京都帝大昭和3年卒業）が予科教授（国語）に任ぜられた。

5月　京都市保健婦養成所が設立された。（京都）

7月　助教授（内科学）角本永一が興亜学生勤労報国隊医療班長として満州国へ出張した。

8月　学長兼教授（微生物学）常岡良三が定年退職し，名誉講師に推薦された。
教授（耳鼻咽喉科学）中村登が学長に任命された。
教授（眼科学）藤原謙造が院長を辞任し，教授（外科学）望月成人が院長に補せられた。
学友会館建設費10万円の募金が達成されたが，戦時中で建設は中止を余儀なくされた。

9月　昭和18年3月の卒業式が6カ月繰り上げられて行なわれた。その後昭和23年までは毎年9月に卒業式が行なわれた。
予科教授（化学）兼薬局長森益蔵が退職した。
予科教授（化学）森益蔵が学友会理事長を辞退し，教授（理学的診療科学）後藤五郎が理事長になった。
幹事中西喜一郎（53歳）が死去した。
会計係長藤井条次郎が幹事事務取扱を命ぜられた。

9月　大学・高等学校・専門学校の卒業期が9月に繰り上げられた。
帝国大学・官立医科大学の臨時附属医学専門部から第1回の卒業生が出た。

10月　予科の臨時入学（10月入学は1回限り）が行なわれた。

11月　国民医療法施行令が公布された。

12月　助教授加藤明敏（本学昭和3年卒業）が教授（微生物学）に任ぜられた。
会計係長兼幹事事務取扱藤井条次郎が幹事に任ぜられた。

12月　県立鹿児島医学専門学校が設立された。

1943年（昭和18年）

1月　教授（内科学）浅山忠愛が定年退職し，名誉講師に推薦された。
教授（内科学）飯塚直彦が内科第一部長を命ぜられた。

1月　大学予科・高等学校は修学年限が2年に短縮され，中学校・高等女学校は4年に短縮された。
京都第二赤十字病院が開設された。（京都）

2月　私立九州医学専門学校が私立九州高等医学専門学校と改称された。
大日本航空医学会が設立された。

3月　助教授細田孟（京都府立医専大正7年卒業）が教授（内科学）に任ぜられ，内科第二部長を命ぜられた。
教授（微生物学）加藤明敏（42歳）が死去した。
附属医院の北側に看護婦寄宿舎（木造2階建，地下1階，延坪1,058坪）が竣工した。

4月　教授（病理学）兼図書館主任梅原信正が定年退職し，名誉講師に推薦された。

5月　教授兼学生主事藤井猪十郎の病気療養中，教授（医化学）後藤基幸が学生主事事務取扱を命ぜられた。
教授（衛生学）赤野六郎が図書館主任を命ぜられた。

5月　前橋医学専門学校が設立された。

6月　教授（薬物学）藤井猪十郎が学生主事を辞任

し，教授(理学的診療科学)後藤五郎が学生主事に補せられた。
教授(解剖学)勝義孝が日本学術研究会議会員に推薦された。
6月 学徒動員戦時体制確立要綱が決定された。
7月 八日市中学校教諭厨(くりや)清雄が学生主事(教務)に任ぜられた。
7月 東京都制が実施された。
女子学徒動員が決定された。
知事安藤狂四郎が辞任し，愛知県知事雪沢千代治が第28代の京都府知事に就任した。(京都)
8月 教授(病理学)荒木正哉が満洲国・中華民国へ出張した。
教授(衛生学)赤野六郎が満洲国へ出張した。
9月 文科系の学生の徴兵猶予が停止された。
鳥取地震(7.4マグニチュード)がおこった。
10月 日本昆虫衛生学会が設立された。
大日本育英会が設立された。
京阪電鉄と阪神急行電鉄が合併して京阪神急行電鉄が設立された。(京都)
11月 初代学長小川瑳五郎・名誉講師島田吉三郎・角田隆・常岡良三・浅山忠愛・梅原信正が名誉教授(学内)に推薦された。
助教授(皮膚泌尿器科学)鈴木成美(本学昭和3年卒業)が教授(微生物学)に任ぜられた。
12月 岐阜県立女子医学専門学校・三重県立医学専門学校・順天堂医学専門学校が設立された。
第1回の学徒兵入隊(学徒出陣)が行なわれた。
徴兵適齢が1年引き下げられた。
この年 看護婦寄宿舎跡(419坪)の南隣接地343坪が女子専門部設置寄付金で買収された(7.7万円)。

1944年(昭和19年)

附属女子専門部

1月 財団法人伏見病院が中野種一郎理事長から附属女子専門部附属医院として寄付された。伏見病院は，昭和6年に伏見市が京都市に編入されたときに，伏見市病院が財団法人に変わったものである。
1月 緊急学徒勤労動員方策要綱により学徒勤労動員は年間4カ月間継続して行なわれることになった。
兵庫県立医学専門学校・福島県立女子医学専門学校・大阪市立医学専門学校が設立された。
2月 附属女子専門部(4年制医学専門学校，終戦後5年制に変更)の設置が認可された。
3月 元伏見病院が附属女子専門部附属医院(通称伏見分院)となった。
京都府立医科大学科学動員委員会が設けられた。
皇后陛下御内帑金による特別会計(大正10年10月設定)が廃止された。
3月 青森医学専門学校・松本医学専門学校・横浜市立医学専門学校・山梨県立医学専門学校・市立名古屋女子医学専門学校・山口県立医学専門学校・福岡県立医学専門学校が設立された。
4月 女子専門部講師阿部四郎が伏見分院長に補せられた。
女子専門部に第1回の入学生80名が入り，授業は府立第一高女と府立盲学校で行なわれた。
24日に衛生学・微生物学・生理学・医化学・薬物学の5教室が微生物学教室小使室からの出火によって焼失した。
名誉教授常岡良三(66歳)が死去した。
看護婦総取締高島チヨが退職した。
4月 臨時附属医学専門部は附属医学専門部と改称された。
東京高等歯科医学校が東京医学歯学専門学校と改称された。
府立京都農林学校が京都府立高等農林学校と改称された。(京都)
府立保健婦学校が設立された。(京都)
知事雪沢千代治が愛媛県知事に転出し，内務省地方局長新居善太郎が第29代の京都府知事に就任した。(京都)
5月 看護長片岡久野が看護婦総取締を命ぜられた。
6月 荒神橋西詰の日本学士会京都支部会館(土地190坪，建物木造2階建，延坪53坪)が6.5万円で本学に買収され，学友会に学友会館として貸与された。
教授(衛生学)赤野六郎が図書館主任を辞任

し，教授(解剖学)勝義孝が図書館主任代理を命ぜられた。
教授(衛生学)赤野六郎の病気のため，京都帝国大学講師緒方洪平が講師を嘱託されて衛生学を担当した。
6月　大都市の学童疎開が決定され，8月から実施されることになった。
7月　学長中村登が女子専門部長を兼任した。
教授(医化学)後藤基幸・教授(微生物学)鈴木成美が女子専門部教授を兼任した。
助教授田中秋三が女子専門部教授(病理学)兼大学助教授に，薬局長梅田良三が女子専門部教授(化学)兼薬局長に，講師足立興一が女子専門部教授(解剖学)に任ぜられた。
女子専門部講師阿部四郎が伏見分院長を辞任し，女子専門部講師末川悍が伏見分院長に補せられた。
7月　京都府立高等農林学校が京都府立農林専門学校に昇格した。(京都)
日本細菌学会が設立された。
東南海地震(8.0マグニチュード)がおこった。
8月　大本営と政府首脳との最高戦争指導会議が設置された。
9月　卒業予定学生の大部分が陸海軍軍医学校で集合教育をうけていたため，卒業式なしで61名が卒業した。
10月　看護婦総取締片岡久野が退職した。
看護長森島キミが看護婦総取締を命ぜられた。
11月　教授(衛生学)赤野六郎(40歳)が死去した。
11月　徴兵適令が18歳に引き下げられた。
東京が初めて大空襲をうけた。
12月　教授(薬物学)藤井猪十郎が図書館主任を命ぜられた。
学生主事(教務)厨清雄が退職した。
京都府立医科大学新聞が第185号で廃刊となった。
12月　北海道立女子医学専門学校(札幌)・高知県立女子医学専門学校が設立された。

1945年（昭和20年）

2月　教授越智真逸が女子専門部教授(生理学)を兼任し，講師末川悍(産婦人科学)，佐野多郎(眼科学)，三宅廉(小児科学)，浜孝雄(耳鼻咽喉科学)，西田貢(内科学)が女子専門部教授に任ぜられた。
助教授木口直二が女子専門部教授(外科学)兼大学助教授に任ぜられた。
2月　秋田県立医学専門学校・和歌山県立医学専門学校・広島県立医学専門学校が設立された。
3月　花園分院の本館が漏電で焼失した。
病理学教室，1・2・3号病舎が疎開のため取り壊され，病理学教室は図書館閲覧室に移転した。
薬物学が薬理学と改称された。
3月　奈良県立医学専門学校が設立された。
10日に東京，12日に名古屋，14日に大阪，17日に神戸が大空襲ををうけた。
宇治町に府立精神病院が開設された。(京都)
京都市保健婦養成所が廃止された。(京都)
4月　時局切迫のため9月卒業予定者の仮卒業式が行なわれた。
学年の呼称が回生に改められた。
4月　徳島医学専門学校・米子医学専門学校が設立された。
東京帝国大学医学部で看護婦講習科が第一厚生女学部と改称された。
5月　看護婦総取締森島キミが退職した。
看護長寺川多賀代が看護婦総取締を命ぜられた。
5月　ドイツが無条件降伏した。
東京が大空襲をうけ，157,000戸が焼失し，皇居も炎上した。
保健婦規則が制定された。
6月　名誉教授梅原信正(65歳)が死去した。
6月　知事新居善太郎が大阪府知事に転出し，元情報局次長三好重夫が第30代の京都府知事に就任した。(京都)
7月　学長兼教授(耳鼻咽喉科学)中村登(65歳)が死去し，学内葬が行なわれた。
教授(生理学)越智真逸が学長事務取扱を命ぜられ，女子専門部長事務取扱を兼務した。
7月　ポツダム宣言が26日に発表された。
8月　6日午前8時15分に最初の原子爆弾が広島に投下されて20万人が死亡し，9日午前11時2分には2回目の原子爆弾が長崎

に投下されて7万人が死亡した。
8日にソ連が対日宣戦を布告し，北満・北鮮・樺太に進攻を開始した。
14日にポツダム宣言を正式に受諾し，15日に天皇の「終戦の詔勅」が放送されて，太平洋戦争は終結し，第二次世界大戦も終結した。

9月　教授(生理学)越智真逸が学長に任命され，女子専門部長を兼任した。
予科教授(ドイツ語)武田鉄五郎が生徒主事を辞任し，予科教授(数学)森誉四郎が生徒主事に補せられた。
書記水野重一が学生主事(教務)に任ぜられた。

9月　2日に東京湾の米艦ミズリー号艦上で降伏文書に調印が行なわれた。
東京にGHQ(連合軍総司令部)が設置された。
枕崎台風で2,500人の死者・行方不明が出た。

10月　知事三好重夫が内閣副書記官長に転出し，木村惇が第31代の京都府知事に就任した。(京都)

11月　女子専門部教授(産婦人科学)兼伏見分院長末川悍が退職した。
助教授志多半三郎が女子専門部教授(産婦人科学)兼大学助教授に任ぜられた。
学内民主化運動がおこり，予科生徒大会・女専生徒大会・本科学生大会が開かれた。
本科学生大会において学生自治会の設立・出欠制の撤廃・反民主的教授の罷免・講義法の改善・教授会の公開等の要求が決議された。

12月　女子専門部講師習田達夫が女子専門部教授(英語)に任ぜられた。
女子専門部教授(産婦人科学)志多半三郎が伏見分院長を兼務した。
教授会が人事を除いて公開された。

12月　陸海軍病院・傷痍軍人療養所が国立病院・国立療養所と改称された。

この年　看護婦寄舎宿跡の南隣接地389坪が女子専門部設置寄付金で買収された(6.8万円)。

1946年(昭和21年)

2月　学長兼女子専門部長兼教授(生理学)越智真逸が学長兼女子専門部長を辞任し，教授(解剖学)勝義孝が学長に任命され，女子専門部長を兼任した。
女子専門部教授(眼科学)佐野多郎(51歳)が死去した。
教授(医化学)兼女子専門部教授後藤基幸が退職した。
学長の諮問機関として京都府立医科大学協議会が設立された。構成団は教授団・予科教授団・女専教授団・助教授講師団・助手副手団・事務職員団・雇傭人団・看護婦自治団・学生自治団・予科生徒自治団・女専生徒自治団の11団体であった。
看護婦総取締寺川多賀代が退職した。

2月　公職追放令が施行された。

3月　学生主事・生徒主事が廃止された。
学生主事(教務)水野重一が幹事に任ぜられた。
看護長松尾栄が看護婦総取締を命ぜられた。

3月　私立九州高等医学専門学校が私立久留米医科大学に昇格した。

4月　助教授中村文雄(本学昭和6年卒業)が教授(耳鼻咽喉科学)に任ぜられた。
附属厚生女学部(助産婦科・看護婦科)が設置され，院長が厚生女学部長を兼務した。
女子専門部の入学は本年限りで打ち切られた。なお，本年の入学生は40名であった。

4月　昭和医学専門学校・大阪高等医学専門学校・兵庫県立医学専門学校が医科大学に昇格した。
新日本医師連盟が結成された。

5月　大学教員適格審査委員会が設置され，教員の適格審査が行なわれたが，不適格者はなかった。
附属医院に雇傭人を中心として従業員組合(約130名)が結成された。

5月　順天堂医学専門学校が順天堂医科大学に昇格した。
東京帝国大学医学部で泌尿器科学教室が皮膚科泌尿器科学教室から独立した。

6月　府立八坂病院が府立平安病院と改称された。(京都)

8月　東京医学歯学専門学校が東京医科歯科大学に昇格した。
医師・歯科医師実地修練制度(インターン制度)，医師・歯科医師国家試験制度

が制定された。

9月　医師実地修練制度(インターン制度)が開始され，9月の卒業生から適用された。期間は1年であるが，今回に限り来年3月までに短縮された。

助教授弓削経一が女子専門部教授(眼科学)を兼任した。

9月　生活保護法が公布された(10月1日施行)。

10月　事務職員を中心にして職員組合(約600名)が結成され，従業員組合は自然消滅した。

10月　教育勅語が廃止された。

11月　附属厚生女学部学則が制定された。

11月　日本国憲法が3日に公布された。

日本循環器病学会が日本循環器学会と改称された。

外地引揚者・医学補習修了歯科医を対象に第1回医師国家試験が実施された。

12月　京都帝国大学講師緒方洪平（京都帝大大正9年卒業)が教授(衛生学)に任ぜられた。

北里研究所生化学部長藤田秋治（東京帝大大正10年卒業)が教授(生化学)に任ぜられた。

医化学が生化学と改称された。

12月　6・3・3・4制の新学制が発表された。

南海道地震(8.1マグニチュード)がおこった。

医師の総教は65,157名(このうち大学卒業生は27,209名，医専卒業生は31,587名)であった。

1947年（昭和22年）

1月　元京都市厚生部長漆葉見龍が幹事に任ぜられた。

1月　死因不明の死体については死因調査のため行政解剖が行なわれることになった。

2月　法医学教室が新設された。

2月　私立東京医学専門学校が私立東京医科大学に昇格した。

3月　附属産婆・看護婦教習所が廃止された。

看護婦総取締松尾栄が病気のため，看護長谷口スミが看護婦総取締事務取扱を命ぜられた。

3月　広島県立医学専門学校が広島県立医科大学に昇格した。

日本医療団が解散した。

知事木村惇が辞任し，山本義章が第32代京都府知事に就任した。(京都)

学校教育法が公布され，新学制の6・3・3・4制が制定された。

文部省から全国の官公立医学専門学校の整理が発表された。

4月　看護婦総取締松尾栄(27歳)が死去した。

講師野田秀俊（本学昭和8年卒業，元三重医専教授)が教授(解剖学)に任ぜられた。

4月　6・3制が実施され，新制小学校・新制中学校が発足した。

第12回日本医学会総会が大阪で開催された。

大日本歯科医学会が日本口腔科学会，日本鉄道医学会が日本交通医学会と改称された。

知事山本義章が辞任し，初代公選知事として，元京都府知事の木村惇が第33代の京都府知事に就任した。(京都)

第1回歯科医師国家試験が実施された。

5月　予科教授(物理学)塘仁三(57歳)が死去した。

5月　日本国憲法が3日に施行された。

栄養食糧学会が設立された。

岐阜県立女子医学専門学校が岐阜県立医科大学に昇格改称された。

インターン修了者に初めての医師国家試験が実施された。

産婆規則が助産婦規則と改称された。

国立予防衛生研究所が開設された。

6月　予科教授(ドイツ語)下程勇吉が京都帝国大学助教授に転出のため退職した。

歯科学担当の助教授井尻万太郎が休職になり，京都帝国大学助教授美濃口玄が講師を嘱託されて歯科学を担当した。

女子専門部講師片岡八束が女子専門部教授(皮膚・泌尿器科学)に任ぜられた。

6月　岩手医学専門学校・名古屋女子医学専門学校・大阪女子高等医学専門学校・大阪市立医学専門学校・県立鹿児島医学専門学校が医科大学に昇格した。

福島県立女子医学専門学校が福島県立医科大学に昇格改称された。

帝国女子医学薬学専門学校が東邦医科大学に昇格改称された。

京都帝国大学で創立50周年記念祝賀式が挙行された。

7月　女子専門部の修学年限が5年に改められた。

7月 新制大学の設立基準の「大学基準」が決定された。
保健婦・助産婦・看護婦令が公布され，看護婦に甲種(高校卒業，修業年限3年，国家試験に合格)・乙種(中学卒業，修業年限2年，都道府県知事の行なう試験に合格)が設けられた(看護婦令は24年9月施行)。

8月 予科講師習田達夫(京城帝大昭和8年卒業)が予科教授(英語)に任ぜられた。

8月 11万名の教員がGHQによって追放された。

9月 教授(生理学)兼女子専門部教授越智真逸が定年退職し，名誉教授に推薦された。
兵庫県立医科大学教授吉村寿人（京都帝大昭和5年卒業)が教授（生理学）に任ぜられた。
京都府立医科大学新聞が2年9カ月ぶりで第186号をもって復刊された。

9月 大日本耳鼻咽喉科学会が日本耳鼻咽喉科学会と改称された。
大学等への死体交付に関する法律が公布され，監察医による検案解剖後の死体で引取人のないものは医科大学・医学専門学校へ交付できることになった。

10月 教授(皮膚・泌尿器科学)中川清が東京医科大学教授に転出のため退職した。
女子専門部教授片岡八束（京都府立医専大正5年卒業，元京城医専教授)が教授(皮膚・泌尿器科学)に任ぜられた。
助教授兼女子専門部教授弓削経一（本学昭和5年卒業)が教授(眼科学)に任ぜられた。

10月 帝国大学の名称から帝国の文字が削除された。
日本公衆衛生学会が設立された。
医師会・歯科医師会が解散した。
国家公務員法が公布された。
第6回国勢調査で10月1日現在の京都府の人口は 1,739,084人，京都市の人口は999,660人であった。(京都)

11月 女子専門部教授(耳鼻咽喉科学)浜孝雄が退職した。

11月 社団法人日本医師会・日本歯科医師会が設立された。
京都府医師会が新たに設立された。（京都)
共同募金が初めて行なわれた。

12月 教授(眼科学)藤原謙造が国立舞鶴病院長に転出のため退職した。
女子専門部教授兼大学助教授田中秋三（本学昭和5年卒業)が教授（病理学）に任ぜられ，女子専門部教授を兼任した。
幹事漆葉見龍が幹事長に任ぜられた。

12月 児童福祉法が公布された。

1948年（昭和23年）

1月 助教授川井銀之助（京都府立医専大正6年卒業)が教授(胃腸科学)に任ぜられた。
整形外科学教室が新設された。
助教授（外科学）来須正男(京都府立医専大正8年卒業)が教授（整形外科学）に任ぜられて整形外科学の初代の教授となり，整形外科学教室の創設者となった。
生物物理化学教室が新設された。
教授(解剖学)勝義孝が生物物理化学教室に転じて生物物理化学を担当した。

1月 新戸籍法が施行され，「家」の制度が廃止された。

2月 助教授山田博（本学昭和11年卒業）が教授(解剖学)に任ぜられた。

2月 青森医学専門学校が弘前医科大学に昇格改称された。
松本医学専門学校・三重県立医学専門学校・奈良県立医学専門学校・和歌山県立医学専門学校・米子医学専門学校・徳島医学専門学校が医科大学に昇格した。

3月 講師竹沢徳敬が女子専門部教授（耳鼻咽喉科学)に任ぜられた。
予科講師杉原雅(京都帝大大正12年卒業)が予科教授(物理学)に任ぜられた。

3月 同志社大学・東京女子大学などの公私立12校が最初の新制大学として認可された。

4月 京都帝国大学名誉教授小南又一郎（京都帝大京都医大明治41年卒業)が講師(1級官同格）に任ぜられて法医学を担当し，法医学教室の創設者となった。
教授(外科学)望月成人が院長を辞任し，教授(内科学)飯塚直彦が院長に補せられた。
予科の入学が本年限りで打ち切られた。
国立舞鶴病院長藤原謙造が教授を兼任した。

4月 新制高等学校が発足した。

祝日の国旗掲揚がGHQから許可された。

5月 講師上野弘が女子専門部教授(眼科学)に任ぜられた。

5月 サマータイムが採用され，5月1日から9月の第2日曜まで，時計の針が1時間進められた。これは昭和26年限りで廃止された。

前橋医学専門学校が前橋医科大学に昇格した。

脳神経外科研究会が設立された。

6月 教授(皮膚・泌尿器科学)片岡八束が女子専門部教授を辞任し，講師小田完五が女子専門部教授(皮膚・泌尿器科学)に任ぜられた。

6月 京都市民病院が中央市民病院と改称された。(京都)

福井地震(7.2マグニチュード)がおこった。

7月 歯科学担当の嘱託講師美濃口玄が辞任し，講師(微生物学)竹田三郎が歯科学教室に転じて歯科学を担当した。

7月 国家公務員法が施行された。

日本学術会議法が公布された。

優生保護法が公布された。

医師法・歯科医師法・医療法が公布された。

国民の祝日が決定された。

8月 看護長谷口スミが看護婦総取締を命ぜられた。

9月 昭和17年4月の予科入学生が卒業し，9月卒業は本年限りとなった。

病理学教室(木造2階建，建坪104坪，延坪148坪，総工費170万円)が竣工した。

教授藤原謙造が定年退職し，名誉教授(学内)に推薦された。

9月 全日本学生自治会総連合(全学連)が結成され，官公立大学145校が加盟した。

大日本生理学会が日本生理学会と改称された。

10月 医動物学教室が新設された。

看護婦総取締谷口スミが辞任し，看護長片岡敏子が看護婦総婦長を命ぜられた。

本学の比良山荘の改築工事が竣工した。

10月 日本連合衛生学会が日本衛生学会と改称された。

新日本医師会協議会(後の新日本医師協会)が設立された。

11月 極東軍事裁判で東條英機ら7名に絞首刑，木戸孝一ら16名に終身禁錮刑の判決があった。

12月 前京城帝国大学教授小林晴治郎(東京帝大理科大学選科明治42年修了)が講師(1級官同格)に任ぜられて医動物学を担当し，医動物学教室の創設者となった。

名誉教授(学内)島田吉三郎・越智真逸が学校教育法による名誉教授に推薦された。

日本学術会議の初めての会員選挙が行なわれ，教授(内科学)飯塚直彦・教授(生化学)藤田秋治が第1期会員(全国区)に当選した。

1949年(昭和24年)

1月 本学教員は京都府公立学校教員となった。

学長勝義孝は2月で任期満了となるが，再選された。

1月 教育公務員特例法が公布された。

公立大学教員は地方公務員となり，公立学校教員となった。

日本学術会議の第1回総会が開催された。

優生保護法施行令が公布された。

2月 整形外科が開設された。

2月 県立鹿児島医科大学が鹿児島県立大学医学部となった。

山口県立医学専門学校が山口県立医科大学に昇格した。

私立京都薬学専門学校・仏教専門学校・同志社女子専門学校・私立京都女子専門学校が大学に昇格した。(京都)

臨済学院専門学校が花園大学に，私立京都専門学校が種智院大学に昇格改称された。(京都)

3月 女子専門部の第1回卒業式(65名)が行なわれた。

4月 理学的診療科学が放射線科学と改称された。

附属甲種看護婦学院が設置され，院長が学院長を兼務した。高等学校卒業生が入学し，修学年限は3年であった。

院長の3年の任期が1年に改められた。

教授(内科学)飯塚直彦が院長を辞任し，教授(小児科学)斎藤二郎が院長に補せられた。

4月 横浜市立医学専門学校が横浜市立医科大学に昇格した。

京都府立高等農林学校と京都府女子専門

学校が合併昇格して府立西京大学が設立された。(京都)
日本交通医学会が日本交通災害医学会，日本婦人科学会が日本産科婦人科学会と改称された。
1ドル360円の単一為替レートが設定された。

5月 東京大学医学部附属医院が附属病院と改称された。
国立学校設置法が公布され，各都道府県に69校の新制国立大学が設置されることになった。
長崎医科大学が長崎大学医学部，新潟医科大学が新潟大学医学部になった。

6月 副手が廃止され，研修員が設けられた。
微生物学教室が竣工した。
休職中の助教授(歯科学)井尻万太郎が退職した。
看護婦総婦長片岡敏子が辞任し，看護長岡崎シゲ子が看護婦総婦長を命ぜられた。

6月 死体解剖保存法が公布され，引取者のない遺体については死後30日までの期間は遺体を保存しなければならないが，その後は医学の教育・研究のために解剖を行なってもよいことになった(12月10日施行)。

7月 日本体力医学会が設立された。

8月 予科教授(ドイツ語)臼井竹次郎が京都大学助教授に転出のため退職した。

9月 京都府立医科大学新聞が第193号で廃刊となった。

10月 京阪神急行電鉄(阪急)から京阪電鉄が独立した。(京都)
日本気管食道科学会が設立された。

11月 教授鈴木成美(微生物学)・田中秋三(病理学)・薬局長梅田良三(化学)が女子専門部教授を辞任した。
9日に本科学生8名と女専生徒12名が非公開の女子専門部教授会へ進入して傍聴を強行しようとしたため，教授会は流会となった。学生生徒の入場と同時に教授足立興一・竹沢徳敬から教授会公開動議が提案されたが否決されたため，学生生徒に退去が命ぜられたが，これに応じなかったために流会となった。
女子専門部教授会流会事件で本科学生8名のうち6名が放学となり，2名が勧告によって退学し，女専生徒12名が無期停学となった。
女子専門部教授会流会事件に関連して助教授野中弥一・女専教授足立興一・竹沢徳敬が官吏分限令の準用による休職になった。
学生自治会が解散を命ぜられた。

11月 湯川秀樹博士がノーベル物理学賞を受賞した。わが国で最初のノーベル賞受賞者であった。

12月 身体障害者福祉法が公布された。

1950年(昭和25年)

1月 生理学・生物物理化学・病理学・微生物学・胃腸科学・外科学・整形外科学・耳鼻咽喉科学・眼科学・皮膚泌尿器科学・放射線科学・歯科学の12教室の助教授陣の充実が行なわれた。
歯科学担当の講師竹田三郎が助教授に昇進した。
放学生6名が京都地方裁判所に放学処分取消請求の訴訟をおこした。

1月 満年齢が実施された。
千円札が発行された。

2月 北海道立女子医学専門学校が札幌医科大学に昇格改称された。

3月 女子専門部の第2回卒業式(48名)が行なわれた。
予科教授(生物学)北上四郎が熊本県立女子大学教授に転出のため退職した。
予科教授(数学)森誉四郎が大阪学芸大学教授に転出のため退職した。
予科教授(物理学)杉原雅が西京大学教授に転出し，予科教授を併任した。
予科教授(国語)浅田善二郎が西京大学助教授に転出し，予科教授を併任した。

3月 知事木村惇が辞任した。(京都)
東京女子医学専門学校が東京女子医科大学に昇格した。
第三高等学校が廃止された。(京都)
私立京都外国語大学が設立された。(京都)
日本東洋医学会が設立された。

4月 教授(小児科学)斎藤二郎が院長を辞任し，教授(内科学)細田孟が院長に補せられた。

4月 名古屋女子医科大学が名古屋市立大学医

学部となった。
東京大学医学部で第一厚生女学部が附属看護学校と改称された。
元中小企業庁長官蜷川虎三(社会党)が第2代公選知事として第34代の京都府知事に就任した。(京都)
京都市立絵画専門学校が市立美術大学に昇格した。(京都)
市立高等看護学院が設立された。(京都)
身体障害者福祉法施行規則が公布された。

5月　教授(内科学)飯塚直彦が定年退職した。

5月　新生活保護法が公布された。

6月　生理学教室・薬理学教室・衛生学教室・実習室の木造2階建2棟・平屋建1棟（建坪305坪，延坪468坪，総工費835万円)が旧看護婦寄宿舎跡に竣工した。
生理学・薬理学・衛生学の3教室のある区域は西構と呼ばれた。

6月　朝鮮戦争が勃発した。

7月　京都地方裁判所で放学生6名の放学処分は違法であるとの判決があり，大学側は大阪高等裁判所に控訴した。
予科教授(英語)習田達夫が九州大学助教授に転出のため退職した。
京都府立医科大学雑誌の欧文名が第47巻第4号から Journal of Kyoto Prefectural Medical University と改められた。

7月　朝鮮戦争で軍需ブームがおこった。

8月　名誉教授(学内)角田隆・藤原謙造が学校教育法による名誉教授に推薦された。

8月　狂犬病予防法が公布された。

9月　学友会通信が創刊された。

9月　府立精神病院が府立洛南病院と改称された。(京都)

10月　名誉教授(学内)小川瑳五郎・浅山忠愛が学校教育法による名誉教授に推薦された。
元教授中川清・飯塚直彦が学校教育法による名誉教授に推薦された。

10月　第7回国勢調査で10月1日現在の京都府の人口は1,832,934人，京都市の人口は1,101,845人であった。(京都)

11月　昭和20年12月以来公開の教授会が非公開に改められた。
第一審で勝訴した放学生の聴講強行（11月下旬）に協力した学生7名のうち，2名が放学，3名が無期停学となり，2名が戒告をうけた。
第一審で勝訴した放学生6名が大阪高等裁判所に放学処分執行停止命令申請書を提出した。

11月　「君が代」の国歌が復活された。
京都駅の本館が全焼した。(京都)

12月　教授(生物物理化学)勝義孝が日本学術会議第2期会員に当選した。
幹事藤井粂次郎(58歳)が死去した。

12月　地方公務員法が公布された。
医師の総数は76,446名(このうち大学卒業生は29,549名，医専卒業生は31,638名)であった。

1951年（昭和26年）

附属病院(←附属医院)
予科・附属女子専門部廃止

1月　吉田茂首相の異議申立てにより放学生6名の放学処分執行停止命令申請書が却下された。
基礎医学東学舎の改築工事が起工された。

2月　地方公務員法が施行された。
血液銀行が誕生した。

3月　予科教授(ドイツ語)兼予科主事榎本安三郎が退職した。
予科教授宮田一(英語)・箕浦忠愛(生物学)・東儀正(数学)・武田鉄五郎(ドイツ語)・荒木新太郎(化学)が退職した。予科教授併任の杉原雅(物理学)・浅田善二郎(国語)が退職した。
予科が廃止された。
女子専門部の最後の第3回卒業式(53名)が行なわれ，女子専門部は廃止された。
女子専門部教授兼大学助教授志多半三郎(産婦人科学)・木口直二(外科学)・小田完五(皮膚・泌尿器科学)が女専教授を辞任した。
休職中の女子専門部教授足立興一(解剖学)・竹沢徳敬(耳鼻咽喉科学)が退職した。
附属厚生女学部の看護婦科が廃止された。

3月　結核予防法が公布された。

4月　女子専門部教授西田貢(内科学)・三宅廉(小児科学)・上野弘(眼科学)が大学助教授に任ぜられた。
前予科教授宮田一が講師を嘱託され，教務

課勤務を命ぜられた。
附属医院が附属病院と改称された。
女子専門部附属医院(通称伏見分院)が附属伏見病院と改称された。
伏見の大倉治一氏(銘酒月桂冠醸造元)から亡父恒吉氏の遺志により100万円が伏見病院に寄付された。
附属乙種看護婦学院が伏見病院に設置された。中学校卒業生が入学し，修学年限は2年であった。

4月　弘前医科大学が弘前大学医学部，前橋医科大学が群馬大学医学部，千葉医科大学が千葉大学医学部，金沢医科大学が金沢大学医学部，松本医科大学が信州大学医学部，岡山医科大学が岡山大学医学部，米子医科大学が鳥取大学医学部，熊本医科大学が熊本大学医学部となった。
第13回日本医学会総会が東京で開催された。
保健婦・助産婦・看護婦令が改正され，看護婦の甲種乙種の別が廃止され，別に准看護婦が設けられた。なお，乙種看護婦養成所は昭和29年3月まで存続することになった。
近畿保健婦専門学校が設立された。(京都)

5月　教授(小児科学)斎藤二郎が定年退職し，名誉教授に推薦された(6月)。
名誉教授小川瑳五郎(75歳)が死去した。

5月　日本放射性同位元素協会が設立された。

6月　胃腸科学教室が内科学教室と改称された。
診療科としての胃腸科はそのままであった。
看護婦総婦長岡崎シゲ子が辞任し，看護長片岡敏子が看護婦総婦長を命ぜられた。

6月　医薬分業法が公布された(30年1月施行)。
診療エックス線技師法が公布された。

8月　助教授舘石叔(本学昭和2年卒業)が教授(内科学)に任ぜられ，内科第一部長を命ぜられた。

9月　放学生の聴講強行に協力して無期停学中の学生1名(本科3回生)が復学した。

9月　52カ国が参加してサンフランシスコ対日講和会議が開催され，対日平和条約・日米安全保障条約の調印が行なわれた。

10月　脳神経外科研究会が日本脳神経外科学会と改称された。

11月　教授(神経精神科学)久保昱二郎が定年退職し，名誉教授に推薦された(昭和27年2月)。
助教授中村恒男(本学昭和10年卒業)が教授(小児科学)に任ぜられた。
助教授(小児科学，伏見病院)三宅廉が教授に昇進して退職し，京都女子大学教授に転出した。

12月　学長勝義孝は翌年2月で任期満了となるが，三選された。
鴨川沿いに基礎医学東学舎(解剖学教室・病理学教室・法医学教室・医動物学教室・同位元素研究室・病理解剖室・法医解剖室・実習室3室・綜合標本室2室・死体貯蔵室，地下1階地上4階建，建坪274坪，延坪1,277坪，総工費6,850万円)が竣工した。

12月　ラジオ京都が放送を開始した。(京都)

この年　全国医学生協議会が結成され，インターン制度・医師国家試験の即時廃止の運動が展開された。

1952年(昭和27年)

新制京都府立医科大学(4年制)

1月　病院長の任期が2年に改められた。
解剖学・病理学・法医学・医動物学の各教室が基礎医学東学舎へ移転した。
同位元素研究室が基礎医学東学舎内に開設された。
助教授(内科学)角本永一が教授に昇進して退職し，国立舞鶴病院長に転出した。

1月　国立精神衛生研究所が設立された。

2月　助教授小谷庄四郎(本学昭和6年卒業)が教授(神経精神科学)に任ぜられた。
学校教育法による新制京都府立医科大学(4年制)の設置が認可された。
生物物理化学教室が解剖学教室の建物から元の病理学教室の建物へ移転した。

2月　兵庫県立医科大学が神戸医科大学，広島県立医科大学が広島医科大学と改称された。
東邦医科大学が東邦大学医学部，順天堂医科大学が順天堂大学医学部，横浜市立医科大学が横浜市立大学医学部，三重県立医科大学が三重県立大学医学部，久留米医科大学が久留米大学医学部となった。

3月　新制大学では歯科学が必須科目から除かれたために，歯科学教室は廃止された。診療科としての歯科は存続した。

4月　新制京都府立医科大学が発足し，第1回の入学生82名(他大学教養課程修了者)が入学した。
生物物理化学が生物理化学，神経精神科学が精神医学，放射線科学が放射線医学と改称された。神経精神科・放射線科の診療科名は変更されなかった。
附属甲種看護婦学院が附属看護婦学院と改称された。
附属准看護婦学院が設置された。中学卒業生が入学し，修学年限は2年であった。
伏見病院内の附属乙種看護婦学院が附属准看護婦学院に併合された。
女子専門部教授会流会事件で退学した学生1名が旧制の本科2学年に再入学した。
教授(薬理学)藤井猪十郎が定年退職し，名誉教授に推薦された(6月)。
学長(旧制)兼教授(生物理化学)勝義孝が新制大学の学長事務取扱を命ぜられた。

4月　恩賜京都博物館が国に移管され，京都国立博物館と改称された。(京都)
対日平和条約・日米安保条約が発効し，GHQ(連合軍総司令部)が廃止された。

5月　教授(生理学)吉村寿人が図書館主任を命ぜられた。
幹事長漆葉見龍が退職し，京都府総務部長伊吹貞治が幹事長に任ぜられた。
綜合講堂の新築工事が起工された。

5月　京都駅の改築工事が竣工した。(京都)

6月　教授(外科学)横田浩吉が休職になった。
電子顕微鏡研究室が微生物学教室内に開設された。
幹事長が事務局長と改称された。

6月　日本血液銀行運営協会が設立された。
日本脳波学会が設立された。

7月　東京大学医学部に麻酔学教室が新設された。
日本農村医学会が設立された。
日本医師会の政治活動機関として日本医師連盟が結成された。

8月　学生自治会が再建された。
伏見病院の手術室が大倉治一氏の寄付金(昭和26年4月)によって竣工した。

10月　女子専門部教授会流会事件で退学した学生1名が旧制の本科2学年に再入学した。
第4回西日本医科学生綜合体育大会(明石市)に初参加し，総合成績は17校中5位であった。
謄写版刷りの医大学生新聞(隔月刊)が創刊された。

10月　日本アレルギー学会が設立された。

11月　創立80周年記念祝賀式典が2日に挙行された。70周年までは数え年で行なわれてきたが，80周年からは満の年で行なわれることになった。

12月　綜合講堂(建坪316坪，延坪408坪，総工費4,076万円)が旧解剖学教室跡に竣工した。

1953年(昭和28年)

2月　日本ウイルス学会が設立された。
NHK東京テレビがテレビ放送を開始した。

3月　名誉教授浅山忠愛(73歳)が死去した。
附属厚生女学部の助産婦科が廃止され，厚生女学部は完全に廃止された。

3月　日本血液銀行運営研究会が日本輸血研究会と改称された。
学位令が改正された。

4月　図書館主任が図書館長と改称された。
学友会会則が改正され，学生は会員から除外された。
大学が大阪高等裁判所に控訴していた放学生6名のうち，5名については第一審の判決(放学処分取消)が取り消され，1名については第一審の判決(放学処分取消)が認められた。大学は敗訴となった1名について最高裁判所に上告した(5月)。

5月　放学生の聴講強行に協力して無期停学中の学生2名(本科3回生)が復学した。

5月　舞鶴赤十字病院が開設された。(京都)

6月　教授(産婦人科学)山田一夫が定年退職し，名誉教授に推薦された(9月)。
学長選考規程が新たに制定され，任期が3年(重任後は2年)に改められた。
看護婦総婦長片岡敏子が辞任し，看護長亀山笑子が看護婦総婦長を命ぜられた。
職員厚生会が設立された。
綜合講堂が記念会館と改称された。

7月　日本化学療法学会が設立された。

8月 広島医科大学が広島大学医学部となった。
府立与謝の海療養所が結核療養所として開設された。(京都)
民間テレビ放送が開始された。

9月 学長(旧制)兼教授(生物理化学)勝義孝が新制大学の学長事務取扱を辞任し，教授（皮膚・泌尿器科学）片岡八束が新制大学の学長に任命された。
休職中の教授(外科学)横田浩吉(60歳)が死去し，大学葬が行なわれた。
教授(放射線医学)後藤五郎が学友会理事長を辞退した。

10月 教授(微生物学)鈴木成美が学友会理事長になった。
第5回西日本医科学生綜合体育大会（岐阜市)で18校中12位であった。
附属伏見病院が附属病院伏見分院に変更された。

10月 町村合併促進法が施行された。

11月 学長(旧制)兼教授(生物理化学)勝義孝が旧制大学の学長を辞任し，学長片岡八束が旧制大学の学長を兼任した。

11月 日本胸部外科学会が設立された。
同志社大学で開催された全日本学園復興会議に参加した学生のデモ隊が荒神橋で警官隊と衝突し，11名の学生が鴨川に転落して重軽傷を負った(荒神橋流血事件)。(京都)

12月 教授(外科学)望月成人が日本学術会議第3期会員に当選した。

12月 熊本県水俣市の新日本窒素肥料水俣工場の排液中の水銀が原因となって水俣病が発生した。

1954年（昭和29年）

1月 教授会規程が新たに制定された。
講師(1級官同格)小林晴治郎(医動物学)・小南又一郎(法医学)が教授会構成員に加えられた。
附属病院長選考規程が新たに制定された。

2月 教授(外科学)望月成人が定年退職し，名誉教授に推薦された(3月)。

3月 教授選定規程が新たに制定された。
東京大学助教授沢崎千秋（東京帝大昭和6年卒業)が教授(産婦人科学)に任ぜられた。

3月 日本輸血研究会が日本輸血学会と改称された。
知事蜷川虎三が知事選挙立候補のために辞任した。(京都)

4月 教授(内科学)細田孟が院長を辞任し，教授(放射線医学)後藤五郎が院長に補せられた。

4月 市立高等看護学院が市立看護短期大学に昇格した。(京都)
蜷川虎三が第3代公選知事として再選され，第35代の京都府知事に就任した。(京都)

5月 学生部が新設された。
教授(解剖学)山田博が初代の学生部長に補せられた。
助教授河村謙二(本学昭和4年卒業)が教授(外科学)に任ぜられ，外科第二部長を命ぜられた。

5月 日本麻酔学会が設立された。

6月 助教授(講師)選定規程が制定された。
粟田口の青蓮院の入口に療病院址の記念碑が建てられた。

6月 全日本漢方医師連盟が結成された。

7月 中央図書館が附属図書館と改称された。
附属図書館長選定規程が制定された。
学内公報(月刊)が創刊された。
最高裁判所で放学生上田好治に対する大学側の上告は却下され，大学側の敗訴となった。
中京区木屋町御池上ル上樵木町の児童遊園地の東北隅に木屋町療病院址の記念碑が建てられた。

7月 寿命学会が設立された。

8月 本学と西京大学との併合をもくろむ京都府の京都府立大学構想に反対の声明を出した。

9月 助教授小沢俊次(本学昭和12年卒業)が教授(薬理学)に任ぜられた。
講師峯勝（本学昭和5年卒業）が教授(外科学）に任ぜられ，外科第一部長を命ぜられた。
最高裁判所で勝訴の判決をうけた上田好治が旧制の本科2学年に復学した。
医大学生新聞が京都府立医大学生新聞と改称された。

10月 助教授(産婦人科学)志多半三郎が教授に昇進して退職した。
事務局長伊吹貞治が，局長を辞任し（30年

4月退職)，京都府宇治地方事務所長三輪光之烝が事務局長に任ぜられた。
法医学担当の講師小南又一郎が休職になった。
第6回西日本医科学生綜合体育大会（徳島市)で21校中8位であった。

10月　東京大学で大学院博士課程が開設され，生物系研究科医学専門課程が設置された。

11月　法医学担当の休職中の講師小南又一郎(71歳)が死去した。
教授(皮膚・泌尿器科学)片岡八束が教授を定年退職し，学長専任になった。

11月　大阪女子医科大学が関西医科大学と改称された。
全日本医学生連合(医学連)が結成された。

12月　名誉教授飯塚直彦(67歳)が死去した。
助手の講師(非常勤)兼務制度が設けられた。

12月　医薬分業延期法が公布された。

1955年（昭和30年）

6年制京都府立医科大学（←4年制京都府立医科大学）
旧制京都府立医科大学本科廃止

1月　学生自治会が全日本医学生連合(医学連)に加盟した。

2月　大学院の生理学に2講座が必要となり，生物理化学教室が生理学教室に合併された。
教授(生物理化学)勝義孝は生理学教室に転じて生理学を担当した。
伏見分院長選考規程が制定された。

3月　旧制京都府立医科大学の最後の第30回卒業式(98名)が行なわれて，旧制大学の本科は廃止され，研究科のみが昭和36年3月まで存続することになった。
京都府立医科大学（新制）が6年制医科大学(進学課程2年・専門課程4年)として認可され，進学課程が設置された。入学定員は80名であった。
看護婦総婦長亀山笑子が退職した。

3月　国立らい研究所が開設された。

4月　京都大学助教授久保忠雄（京都帝大昭和14年卒業)が教授(数学)に任ぜられた。
京都大学助教授三谷一雄（京都帝大昭和14年卒業)が教授(化学)に任ぜられた。
京都学芸大学教授服部英二（京都帝大昭和10年卒業)が教授(英語)に任ぜられた。
看護長片岡敏子が看護婦総婦長代理を命ぜられた。
進学課程校舎(旧予科校舎)の呼称が分校となった。
進学課程の第1回の入学式(88名)が行なわれた。専門課程には他大学の教養課程修了者が入学した。
6年制医科大学における教授会の一本建が確認された。

4月　6年制医科大学が発足し，53大学に医学進学課程が設置された。
大阪市立医科大学が大阪市立大学医学部となった。
第14回日本医学会総会が京都で開催された。

5月　立教大学助教授仲尾善雄（東京帝大昭和14年卒業）が助教授に任ぜられて，生物学を担当した。
大学の職員組合が府職員組合に併合された。

6月　京都大学助教授藤喜好文（京都帝大昭和15年卒業)が教授(物理学)に任ぜられた。
医学連の地方ブロック別ゼミナールとして第1回関西医学生ゼミナールが本学で開催された。

7月　教授(生理学)吉村寿人が図書館長を辞任した。

7月　鹿児島県立大学医学部が(国立)鹿児島大学医学部となった。
東京大学医学部で歯科学教室が口腔外科学教室と改称された。

8月　教授(解剖学)野田秀俊が図書館長に補せられた。
京都府立医科大学八十年史（創立80周年記念事業)が刊行された。

8月　森永製菓徳島工場製造の粉ミルク中の砒素による慢性中毒事件がおこった。

9月　進学課程に物理学・化学・生物学・数学・英語・ドイツ語・人文科学・社会科学の8教室が設けられた。
京都学芸大学助教授原俊彦（京都帝大昭和8年卒業)が教授(ドイツ語)に任ぜられた。
助教授仲尾善雄が教授(生物学)に昇進した。

9月　京都市に北区・南区が設けられた。（京都）

10月　第7回西日本医科学生綜合体育大会（京都

市）が本学の当番で開催され，23校中7位であった。
第1回全国医学生ゼミナールが本学で開催された。
京都府立医大学生新聞と学友会通信とが合併し，京都府立医科大学新聞が6年ぶりで本学新聞会から第229号をもって復刊された。この号数は廃刊時の号数(第193号)にその後の学生新聞・学友会通信の合計発行号数が加えられたものである。

10月　第8回国勢調査で10月1日現在の京都府の人口は1,935,161人，京都市の人口は1,204,084人であった。(京都)

11月　名誉教授推薦取扱手続(昭和25年8月)が廃止され，名誉教授称号授与規程が制定された。
本学の比良山荘の修復工事が行なわれた。
学長片岡八束が大学院設置のための教授陣容強化策として全教授に辞表の提出を求めた。

11月　京都府組織規程が制定された。(京都)
府立平安病院が府立洛東病院と改称された。(京都)
京都府身体障害者福祉センターが開設された。(京都)

12月　学長片岡八束は全教授に対する辞表提出要求を撤回したが，大学院設置を見送ることにしたため，教授会から学長に辞任が要求された。
助教授(歯科学)竹田三郎(42歳)が死去し，教授に昇進した。
北海道大学教授岩下健三（東京帝大昭和5年卒業)が教授（皮膚・泌尿器科学）に任ぜられた。

1956年（昭和31年）

2月　複数教授の教室（解剖学・生理学・病理学・内科学・外科学）は○○学第一・第二・第三教室の呼称をもって分離独立した。一般には第一・第二・第三○○学教室と呼ばれた。
複数部長のいる内科・外科は第一・第二・第三の番号を冠することになった。
学長片岡八束が退職し，名誉教授に推薦された(4月)。
教授(衛生学)緒方洪平が学長事務代理を命ぜられた。
名誉教授望月成人が学長に任命された。

3月　新制京都府立医科大学の第1回の卒業式(80名)が行なわれた。
教授(衛生学)緒方洪平が定年退職し，名誉教授に推薦された(昭和32年6月)。

3月　京都府が地方財政再建団体に指定された。(京都)

4月　放学生の聴講強行に協力して放学となった(昭和25年11月)学生2名が旧制大学の本科3学年に再入学した。
女子専門部教授会流会事件で放学処分をうけた学生6名のうち，復学を希望する3名が旧制大学の本科3学年(2名)・2学年(1名)に再入学した（これはさきに復学した本科2回生上田好治の大学に対する法的責任追求・賠償要求の取下げとの交換条件によるものであった)。
他大学教養課程修了者の本学専門課程への入学は本年限りで打ち切られた。
教授(放射線医学)後藤五郎が院長を辞任し，教授(眼科学)引削経一が院長に補せられた。
教授(第二解剖学)山田博が学生部長を辞任し，教授(薬理学)小沢俊次が学生部長に補せられた。

4月　医薬分業が実施された。
東京大学医学部で助産婦復習科が附属助産婦学校と改称された。

5月　売春防止法が公布された(33年4月施行)。

6月　診療科に部長・副部長のほかに診療主任・診療副主任が設けられた。
創立80周年記念事業委員会が解散した。なお，醵金総額は800万円で大学からの補助金は50万円であった。このうち455万円が綜合講堂の整備に，95万円が学友会館の整備に，87万円が八十年史の刊行にあてられた。
看護婦総婦長代理片岡敏子が辞任した。

7月　看護婦総婦長が総看護婦長と改称された。
看護長桑野美智が総看護婦長を命ぜられた。

10月　第8回西日本医科学生綜合体育大会（岡山市)で24校中5位であった。
学位受領者が1,000人に達した。

11月　東海道本線の電化が完成した。

12月　教授(第二内科学)細田孟が日本学術会議第

4期会員に当選した。

12月　日本の国際連合加盟が国連総会で可決された。

1957年（昭和32年）

京都府立医科大学大学院

1月　荒神橋西詰の学友会館の土地・建物が京都府から学友会に譲渡された。

2月　東京大学助教授額田粲（東京帝大昭和12年卒業）が教授（衛生学）に任ぜられた。

鳥取大学教授小片重男（新潟医大昭和13年卒業）が教授（法医学）に任ぜられ，法医学の初代の教授となった。

3月　大学院（医学研究科，博士課程，4年制）の設置が認可された。医学研究科には生理系・病理系・社会医学系・内科系・外科系の5つの専攻課程が置かれた。

附属準看護婦学院が廃止された。

4月　大学院学則・大学院委員会規程が制定された。

専門課程の教授が大学院学生指導を命ぜられた。

心電図・脳波測定室が開設された。

6月　教授（放射線医学）後藤五郎が定年退職し，名誉教授に推薦された（8月）。

学長の学友会長兼務制が廃止され，古玉太郎（京都府立医専大正7年卒業，京都第二赤十字病院長）が初代の会長になった。

自治庁長官田中伊三次が附属病院診療棟改築工事第1期起債（3ヵ年計画，1.6億円）の実地検分を行なった。

7月　大学院設置のために2月から定年退職が延期されていた教授（第三内科学）川井銀之助が定年退職し，名誉教授に推薦された（8月）。

医動物学担当の講師小林晴治郎が休職になった。

本学附属病院が綜合病院に準ずる病院から綜合病院に変更された。

7月　国立放射線医学総合研究所が設立された。

8月　教授（第一解剖学）野田秀俊が図書館長を辞任し，教授（第二病理学）田中秋三が図書館長に補せられた。

教授（第一外科学）峯勝が他病院へ赴任した助手の退職手続をとらずに9ヵ月間助手の給料を教室の研究費に流用した事件で，6ヵ月間の減給（1割）と1年間の教室事務管理停止の処分をうけた。

9月　附属看護婦学院に臨時に別科課程（2年）が設置された。

京都府立医科大学協議会が全学協議会と改称された。構成団は教授団・助教授講師団・助手副手団（研修員・薬剤手・大学院学生・研究生を含む）・事務職員団・現業職員団・看護婦団・学生自治会（インターンを含む）・分校学生自治会・看護婦学院学生自治会の9団体であった。

9月　人工内臓研究会が設立された。

京都測候所が京都地方気象台と改称された。（京都）

10月　助教授（外科学）木口直二が伏見分院長に補せられた。

第9回西日本医科学生綜合体育大会（福岡市）で24校中15位であった。

京都府立医科大学新聞（昭和3年4月創刊）の創刊250号記念号が発行された。

11月　教授定年退職申合せが廃止され，教員停年規程が制定された。停年は60～63歳とし，学年末退職に改められた（63歳の学年末以前の退職の場合には，退職金の特別取扱は行なわれない）。なお，現在停年に達しているものは1年後に退職することになった。

教授（第二生理学）勝義孝が60歳で停年退職し，名誉教授に推薦された（12月）。

11月　長崎大学医学部創立百周年記念式典が挙行された。安政4年（1857年）11月に医学伝習所が開設されてから満100年になる。

12月　日本糖尿病学会が設立された。

府立植物園が進駐軍から返還された。（京都）

1958年（昭和33年）

1月　助教授増田正典（本学昭和15年卒業）が教授（第三内科学）に任ぜられた。

2月　副手が再び設けられた。

伏見分院に心臓外科が開設された。

看護婦学院規則が制定された。

3月　学生部長選定規程が制定され，任期は2年に定められた。

教授来須正男（整形外科学）・藤田秋治（生

化学）が停年退職し，名誉教授に推薦された（4月）。
教授（産婦人科学）沢崎千秋が日本大学教授に転出のため退職した。
教授（薬理学）小沢俊次が学生部長を辞任した。
3月　3月3日が「耳の日」，8月7日が「鼻の日」と定められた。
4月　信州大学教授金田弘（本学昭和7年卒業）が教授（放射線医学）に任ぜられた。
教授（微生物学）鈴木成美が学生部長に補せられた。
教授（眼科学）弓削経一が院長を辞任し，教授（耳鼻咽喉科学）中村文雄が院長に補せられた。
4月　売春防止法が施行された。
学校保健法が公布された。
知事蜷川虎三が第4代公選知事として三選され，第36代の京都府知事に就任した。（京都）
角膜移植法が公布された（7月16日施行）。
5月　教授（第一内科学）舘石叔（55歳）が死去し，大学葬が行なわれた。
生活協同組合が設立された。
5月　東京大学医学部創立百年記念式典が挙行された。安政5年（1858年）5月に種痘館が開設されてから満100年になる。
NHKのテレビ契約が100万台を超えた。
6月　医動物学担当の休職中の講師小林晴治郎が復職した。
7月　学友会通信（不定期）が復刊された。
8月　診療棟改築第1期工事が起工された（松村組）。
8月　日本対癌協会が設立された。
9月　北海道大学教授岩瀬善彦（北海道帝大昭和16年卒業）が教授（第二生理学）に任ぜられた。
10月　第10回西日本医科学生綜合体育大会（名古屋市）で24校中5位であった。
助教授能勢善嗣（本学昭和15年卒業）が教授（生化学）に任ぜられた。
医動物学担当の講師小林晴治郎が教員停年規程により停年退職した。
研究生制度が新設され，研究科（旧制）への入学は打ち切られた。
基礎講堂の地階に学生ホール・生協地下食堂が開設された。
11月　弘前大学教授諸富武文（日本医大昭和13年卒業）が教授（整形外科学）に任ぜられた。
12月　助教授徳田源市（本学昭和15年卒業）が教授（産婦人科学）に任ぜられた。
12月　1万円札が発行された。

1959年（昭和34年）

1月　名誉教授藤井猪十郎（69歳）が死去した。
1月　新国民健康保険法が施行された。
メートル法が完全に実施された。
私立京都外国語短期大学が私立京都外国語大学に昇格した。（京都）
2月　学長望月成人が退職し，教授（第二内科学）細田孟が学長職務代理を命ぜられた。
2月　新府庁舎が竣工した。（京都）
3月　教授（眼科学）弓削経一が学長に任命された。
名誉教授中川清（73歳）が死去した。
教授（第二内科学）細田孟が停年退職し，名誉教授に推薦された（4月）。
3月　府立西京大学が京都府立大学と改称された。（京都）
4月　第15回日本医学会総会が東京で開催された。
日本医学映画学会が設立された。
5月　学生課長水野重一による84人の学位記の無認可発行（文部省への認可申請手続をとらずに発行）と学位論文審査料横領の不祥事件がおこった。
解剖体数が1万体に達した。
6月　無認可発行の学位記をもつ84人に正式の学位記が交付された。
客員講師等委嘱取扱内規が制定された。
クラス担任教授制が設けられた。
7月　麻酔科が開設された。
学生課長水野重一が学位記無認可発行と学位論文審査料横領のため，懲戒免職になった。
教授（微生物学）鈴木成美が学生部長を引責辞任した。
教授（生物学）仲尾善雄が科学技術庁放射線医学研究所生物学部長に転出のため退職した。
7月　日本腎臓病学会が設立された。
8月　助教授丸本晋（本学昭和6年卒業）が教授

(第二内科学)に任ぜられた。
診療棟改築第1期工事（外科・整形外科・産婦人科・放射線科・中央手術部・麻酔科・臨床検査科・中央材料室，地下1階地上5階建，建坪212坪，延坪1,436坪，総工費15,300万円)が竣工した。
教育・保健・医療機関援助規程が制定された。
附属看護婦学院の別科課程が廃止された。

9月　鳥取大学教授長花操（京城帝大昭和6年卒業)が教授（医動物学）に任ぜられ，医動物学の初代の教授となった。
本学の英語呼称が Kyoto Prefectural University of Medicine と定められた。
附属病院の細菌検査所が廃止された。
附属病院に臨床検査科が設けられた。

9月　伊勢湾台風で 5,200人の死者・行方不明が出た。

10月　附属病院に中央手術部・中央材料室が設けられた。
第11回西日本医科学生綜合体育大会（大阪市)で24校中6位であった。
教授(衛生学)額田粲が学生部長に補せられた。

10月　日本老年学会（日本老年医学会・日本老年社会科学会)が設立された。

12月　教授(第一病理学)荒木正哉が日本学術会議第5期会員に当選した。
京都大学講師小野喜三郎（京都帝大昭和3年卒業)が教授(生物学)に任ぜられた。

1960年（昭和35年）

1月　大学の新年懇親会が毎年京都ホテルで行なわれることになった。
大学院の内科系・外科系の入学には1年以上の臨床経験が必要になった。

1月　東京大学医学部で形成外科学教室が新設された。

2月　診療棟改築第2期工事が起工された（松村組)。
学位受領者が1,500名に達した。

3月　助教授(整形外科学)保田岩夫が教授に昇進して退職した。

3月　麻酔科の標榜が許可された。
塵肺法・精神薄弱者福祉法が公布された。

4月　助教授吉田秀雄(本学昭和12年卒業)が教授(第一内科学)に任ぜられた。
教授(耳鼻咽喉科学)中村文雄が院長を辞任し，教授(皮膚・泌尿器科学)岩下健三が院長に補せられた。
研修員が学外派遣者の呼称に変更された。
学友会の事業団体として財団法人青蓮会が設立され，学友会長古玉太郎が青蓮会理事長を兼ねた。
学友会理事長は廃止され，教授（微生物学)鈴木成美は学友会理事長をやめた。

4月　京都会館が竣工した。(京都)

5月　京都府立医科大学組織細則が制定された。
○○学第一・第二・第三教室（通称第一・第二・第三○○学教室）の教室呼称が正式に第一・第二・第三○○学教室と改称された。
臨床検査科が臨床検査部，麻酔科が麻酔部と改称された。
附属病院に看護部が設けられ，これに各科外来看護係・各病舎看護係が置かれた。

5月　チリ大地震（8.0マグニチュード)による太平洋沿岸の大津波で，北海道南沿岸・三陸沿岸が大被害をうけた。

6月　京都府立医科大学処務細則が制定された。
看護長が看護係長と改称された。

6月　全学連700人が安保阻止行動で国会構内に乱入し，警官隊との乱闘で双方に510人の負傷者を出し，東大生樺美智子が死亡した。

7月　助教授(放射線医学)横井勝朗が教授に昇進して退職した。

8月　教授(第二病理学)田中秋三が図書館長を辞任し，教授(生化学)能勢善嗣が図書館長に補せられた。
研究生規程が制定された。

9月　カラーテレビ放送が開始された。

10月　第12回西日本医科学生綜合体育大会（広島市)で24校中8位であった。

10月　第9回国勢調査で10月1日現在の京都府の人口は1,993,403人，京都市の人口は1,284,818人であった。(京都)

11月　名誉教授越智真逸(76歳)が死去した。
教授(第一解剖学)野田秀俊(52歳)が死去し，大学葬が行なわれた。

この年　スモン病が初めて報告された。

1961年（昭和36年）

旧制京都府立医科大学研究科廃止

2月　医師会・歯科医師会が医療費値上げ問題で厚生省と対立して全国一斉休診を行なった。

3月　6年制医科大学の第1回卒業生(85名)が出た。
旧制京都府立医科大学の研究科が廃止され，旧制大学は全部廃止された。

3月　全日赤54組合6,000人が無期限ストに突入し，2ヵ月間のストを行なった。
ノートルダム女子大学が設立された。(京都)

4月　診療棟改築第2期工事（病院課，薬局，内科・小児科，病室，地下1階地上5階建，建坪270坪，延坪1,411坪，総工費13,500万円)が竣工した。
卒後教育に関する事項を取り扱うために，大学院教務委員(1名)が設けられた。
教授(小児科学)中村恒男が大学院教務委員を命ぜられた。
27日に最後の旧制学位授与式が行なわれ，161人に学位記(3月28日付)が授与された。なお旧制学位受領者の総数は 2,000人であった。

4月　国民皆保険・醵出制国民年金が発足した。
府立植物園が進駐軍から返還されて15年ぶりで再開された。(京都)

5月　教授(数学)久保忠雄が神戸大学教授に転出のため退職した。
新制度の学位規程が制定された。

6月　助教授佐野豊（本学昭和25年卒業）が教授(第一解剖学)に任ぜられた。
臨床講堂の第6・第7講堂が第4・第3講堂と改称された。

7月　光村英子（本学昭和31年卒業，大学院の第1回入学生，第一病理学専攻）が新制第1号の学位記を受領した。

7月　府立与謝の海療養所が府立与謝の海病院と改称された。(京都)
市電北野線が廃止された。(京都)

8月　京都大学助教授桑垣煥（京都帝大昭和17年卒業)が教授(数学)に任ぜられた。
教員学外研究取扱内規が制定され，学外研究期間が1年2ヵ月を超える場合は休職にされた。
学長・局長には18/100，院長・学生部長・図書館長・薬局長・課長には12/100の管理職手当が支給されることになった。

8月　日本先天異常学会が設立された。

9月　衛生学教室が衛生学・公衆衛生学教室，皮膚・泌尿器科学教室が皮膚科学・泌尿器科学教室と改称された。
麻酔部が診療科に加えられて，再び麻酔科と改称された。
学内公報が京都府立医科大学学報と改称された。

10月　第13回西日本医科学生綜合体育大会（京都市)で24校中4位であった。

11月　伏見分院の病舎が救急用の10床を残して閉鎖された。

1962年（昭和37年）

2月　診療棟改築第3期工事が起工された（松村組)。

2月　国立がんセンターが開設された。
東京都の人口が1,000万人を突破した。

3月　学長兼教授(眼科学)弓削経一が学長を辞任し，教授(耳鼻咽喉科学)中村文雄が学長に任命された。
教授(衛生学・公衆衛生学)額田粲が学生部長を辞任した。

3月　京都府の財政再建が完了した。(京都)

4月　教授(医動物学)長花操が学生部長に補せられた。
教授(皮膚科学・泌尿器科学)岩下健三が院長を辞任し，学長中村文雄が院長事務取扱を兼務した。

4月　知事蜷川虎三が第5代公選知事として四選され，第37代の京都府知事に就任した。(京都)

5月　大学院教務委員が研究科主任と改称された。

6月　教授(小児科学)兼大学院教務委員中村恒男が初代の研究科主任を命ぜられた。
講師(非常勤)が非常勤講師(学内)と改称された。

7月　教授(小児科学)中村恒男が院長に補せられ，研究科主任を辞任した。

9月　教授(放射線医学)金田弘が研究科主任を命

ぜられた。
病院長選考規程が新たに制定された。
10月 第14回西日本医科学生綜合体育大会（熊本市）で24校中8位であった。
11月 教授（第一病理学）荒木正哉が巡回診療班長としての功績により第6回京都新聞文化賞を受賞した。
11月 日本ME学会が設立された。
国立京都国際会館の新築工事が起工された。（京都）
12月 教授（第一病理学）荒木正哉が日本学術会議第6期会員に再選された。
名誉教授藤原謙造（77歳）が死去した。
看護婦宿舎改築工事が起工された（松村組）。

1963年（昭和38年）

4月 名誉教授島田吉三郎（86歳）が死去した。
4月 第16回日本医学会総会が大阪で開催された。
日本病院管理学会が設立された。
5月 客員講師委嘱取扱内規が新たに制定された。
5月 市立体育館が開設された。（京都）
6月 阪急京都線の四条大宮・河原町間の地下鉄が開通した。（京都）
7月 老人福祉法が公布された。
8月 教授（生化学）能勢善嗣が図書館長を辞任し，教授（微生物学）鈴木成美が図書館長に補せられた。
9月 診療棟改築第3期工事（病院玄関ホール，病院課，救急処置室，皮膚科・耳鼻咽喉科・眼科・神経精神科・病室，地下1階地上5階建，建坪314坪，延坪1,812坪，総工費25,830万円）が竣工した。
10月 第15回西日本医科学生綜合体育大会（金沢市）で24校中3位で，これまでの最高の成績をおさめた。
11月 府立総合資料館が開設された。（京都）
12月 助教授（第二生理学）舟木広が教授に昇進して退職した。

1964年（昭和39年）

3月 神経精神科が神経科と改称された。
事務局長三輪光之烝が退職した。
教授（医動物学）長花操が学生部長を辞任した。
3月 昭和医科大学が昭和大学医学部となった。
4月 附属看護婦学院が附属看護学院と改称された。
看護学院学則が新たに制定された。
京都府土木建築部監理課長三島直介が事務局長に任ぜられた。
教授（第二生理学）岩瀬善彦が学生部長に補せられた。
4月 岐阜県立医科大学が岐阜大学医学部，神戸医科大学が神戸大学医学部，山口県立医科大学が山口大学医学部となった。
5月 泌尿器科学教室が皮膚科学・泌尿器科学教室から独立した。
助教授小田完五（本学昭和12年卒業）が教授（泌尿器科学）に任ぜられて泌尿器科学の初代の教授となり，泌尿器科学教室の創設者となった。
6月 新潟地震（7.7マグニチュード）がおこった。
7月 教授（小児科学）中村恒男が院長を辞任し，教授（第二内科学）丸本晋が院長に補せられた。
7月 母子福祉法が公布された。
日本リハビリテーション医学会が設立された。
8月 附属病院にアイバンクが開設された。
第16回西日本医科学生綜合体育大会（大阪市）で24校中9位であった。
10月 東海道新幹線が完成し，超特急の運転が開始された。
第18回オリンピック東京大会が開催され，94ヵ国の5,541人が参加した。
ラジオ京都が近畿放送と改称された。（京都）
11月 教授（放射線医学）金田弘が研究科主任を辞任し，教授（衛生学・公衆衛生学）額田粲が研究科主任を命ぜられた。
12月 日本人間工学会が設立された。

1965年（昭和40年）

1月 京都産業大学が設立された。（京都）
3月 学長兼教授（耳鼻咽喉科学）中村文雄が学長に再選された。
教授（第一病理学）荒木正哉が停年退職し，名誉教授に推薦された（4月）。

助教授(外科学)木口直二が教授に昇進して退職した。
助教授(第二解剖学)藤田尚男が広島大学教授に転出のため退職した。
4月 入学定員が100名に改められた。
助教授(小児科学)建田恭一が教授に昇進して退職した。
4月 近畿保健婦専門学校が府立保健婦専門学校と改称された。(京都)
6月 臨床検査部講師三宅清雄(本学昭和10年卒業)が教授(第一病理学)に任ぜられた。
7月 麻酔学教室が新設された。
助教授(麻酔科)青地脩(本学昭和28年卒業)が麻酔学を担当し，麻酔学教室の創設者となった。
7月 日本医学協会が設立された。
8月 病院の北側に看護婦宿舎(地下1階地上4階建，建坪295坪，延坪1,386坪，収容人員305人，総工費15,423万円)が竣工した。この工事は3期に分けて行なわれ，第1期工事は昭和38年7月に，第2期工事は昭和39年8月に終っている。
8月 母子保健法が公布された。
10月 第17回西日本医科学生綜合体育大会(山口市)で24校中16位であった。
10月 第10回国勢調査で10月1日現在の京都府の人口は2,102,808人。京都市の人口は1,365,007人であった。(京都)
11月 中央市民病院の改築工事が竣工し，京都市立病院と改称された。(京都)
朝永振一郎博士がノーベル物理学賞を受賞した。日本人で2人目のノーベル賞受賞者であった。

1966年(昭和41年)

1月 東京大学医学部で学生が無給医局員制度に反対して授業・卒業試験を放棄した。
2月 府立勤労会館が開設された。(京都)
3月 基礎医学東学舎屋上に中央実験動物舎(工費1,800万円)が新設された。
基礎医学南学舎改築工事が起工された(松村組)。
教授(第二生理学)岩瀬善彦が学生部長に再選された。
教授鈴木成美(微生物学)・河村謙二(第二外科学)・小谷庄四郎(精神医学)が停年退職し，名誉教授に推薦された(4月)。
3月 青年医師連合(青医連)が結成され，36大学から2,400名が参加し，インターン制度反対・医師国家試験拒否・医局制度打破を決議した。
4月 教授(第一病理学)三宅清雄が図書館長に補せられた。
4月 知事蜷川虎三が第6代公選知事として五選され，第38代の京都府知事に就任した。(京都)
5月 国立京都国際会館が竣工した。(京都)
7月 教授(第二内科学)丸本晋が院長を辞任し，教授(放射線医学)金田弘が院長に補せられた。
新制度での論文提出による学位受領者が100人に達した。
8月 助教授(麻酔学)青地脩が名古屋市立大学教授に転出のため退職した。
9月 大阪大学助教授宮崎正夫(阪大昭和29年卒業)が教授(麻酔学)に任ぜられ，麻酔学の初代の教授となった。
10月 助教授菅沼惇(本学昭和14年卒業)が教授(微生物学)に任ぜられた。
第18回西日本医科学生綜合体育大会(京都市)で24校中14位であった。
11月 北海道大学助教授飯塚礼二(北大昭和26年卒業)が教授(精神医学)に任ぜられた。
名誉教授川井銀之助(72歳)が死去した。
教授(衛生学・公衆衛生学)額田粲が研究科主任を辞任し，教授(法医学)小片重男が研究科主任を命ぜられた。
京都府立医科大学学報の発行が今月限りで中止された。
12月 精神科病棟新築工事が起工された(松村組)。
看護学院宿舎改築工事が起工された(横田建設)。

1967年(昭和42年)

1月 看護婦不足のため，21病棟中7病棟が閉鎖され，病床数(分院を除く)は718床から543床に縮小された。
京都府立医科大学学術研究会が京都府立医科大学医学会と改称された。
京都府立医科大学雑誌の欧文名が第76巻第

1号から Journal of Kyoto Prefectural University of Medicine と改められた。

3月　学生自治会が病棟閉鎖に抗議して9日間の授業放棄・試験拒否を行なった。

学長兼教授(耳鼻咽喉科学)中村文雄が学長を辞任し，教授(第一生理学)吉村寿人が学長に任命された。

教授峯勝(第一外科学)・田中秋三(第二病理学)が停年退職し，名誉教授に推薦された(4月)。

教授(衛生学・公衆衛生学)額田粲が東邦大学教授に転出のため退職した。

精神科病棟(2階建，建坪319坪，延坪690坪，総工費8,523万円，118床)が竣工した。

3月　青年医師連合(36大学，2,400人参加)がインターン制度に反対して医師国家試験をボイコットした。

4月　第17回日本医学会総会が名古屋で開催された。

6月　講師藤田哲也(本学昭和30年卒業)が教授(第二病理学)に任ぜられた。

看護係長が看護婦長と改称された。

6月　京都大学で創立七十周年記念式典が挙行された。

7月　学生自治会が登録医制度に反対して5日間のストライキを行なった。

基礎医学南学舎(第一生理学教室・第二生理学教室・生化学教室・微生物学教室・薬理学教室・衛生学・公衆衛生学教室・中央研究室・講義室2室・実習室2室・学生課・体育室・学生部室・磨工室・その他，地下1階地上4階建，建坪315坪，延坪1,616坪，総工費24,470万円)が竣工した。

基礎医学東学舎は一号館(通称基礎一号館)，基礎医学南学舎は二号館(通称基礎二号館)と呼ばれた。

2回生谷内連が北アルプス笠ケ岳穴毛谷四ノ沢で山岳部の訓練中転落死した。

8月　助手橋本勇(本学昭和25年卒業)が教授(第二外科学)に任ぜられた。

9月　花園分院が閉鎖された。

第19回西日本医科学生綜合体育大会(鹿児島市)で24校中14位であった。

一号館の2階・3階・4階の実習室はそれぞれ第1・第2・第3実習室，二号館の1階・2階の実習室はそれぞれ第4・第5実習室と名付けられた。

創立百周年記念事業委員会が発足した。

9月　府立与謝の海病院に府立与謝の海血液センターが附設された。(京都)

12月　非常勤講師(学内)が講師(学内)と改称された。

1968年(昭和43年)

1月　助教授永田久紀(本学昭和22年卒業)が教授(衛生学・公衆衛生学)に任ぜられた。

教授(眼科学)弓削経一が京都市立病院長に転出のため61歳で停年退職し，名誉教授に推薦された(2月)。

1月　東京大学医学部の学生自治会が青年医師連合の承認を要求して無期限ストライキに突入し，これが東大紛争の発端になった。

2月　専門課程の学生(4回生を除く)が登録医制度新設のための医師法改正に対する教授会の態度と卒後研修要望書に対する教授会の回答を不満として8日から無期限ストライキに入った。4回生も1カ月後にストライキに参加した。

3月　卒業試験を受験した7人だけの卒業式が行なわれ，卒業試験を拒否した6回生の大部分は留年した。

看護婦宿舎と同じ場所に看護学院宿舎(地下1階地上5階建，建坪134坪，延坪702坪，収容人員180人，総工費7,792万円)が竣工した。

教授(皮膚科学)岩下健三が停年退職し，名誉教授に推薦された(4月)。

教授(第二生理学)岩瀬善彦が学生部長を辞任した。

3月　受験有資格者の60%が医師国家試験を拒否した。

4月　教授(第一解剖学)佐野豊が学生部長に補せられた。

東北大学助教授間島進(東北帝大昭和21年卒業)が教授(第一外科学)に任ぜられた。

4月　京都府警が京都大学医学部学生の登録医制度反対運動に関連して医学部を捜索した。(京都)

5月　専門課程の学生が4日にストライキを中止した。

5月　医師法が改正されて，医師実地修練制度

が廃止され，卒業と同時に医師国家試験が行なわれることになった。新たに臨床研修制度（2カ年）が発足した。
富山県神通川流域で第2次世界大戦前から発生して多数の死者を出したイタイイタイ病が三井金属工業神岡鑛業所の排液中のカドミウムによる中毒として公害病に認定された。

6月　助教授谷道之（本学昭和20年卒業）が教授（眼科学）に任ぜられた。

6月　小笠原が日本に復帰した。
京都府開庁百年記念式典が京都会館で挙行された。（京都）
東京大学で全共闘系学生が安田講堂を占拠し，警察機動隊によって排除されたが，これに抗議して各学部が無期限ストライキに突入した。7月に安田講堂は全共闘によって再封鎖された。

7月　助教授外松茂太郎（本学昭和21年卒業）が教授（皮膚科学）に任ぜられた。
教授（放射線医学）金田弘が院長を辞任し，教授（第三内科学）増田正典が院長に補せられた。
新制度での論文提出による学位受領者が200人に達した。

7月　郵便番号制度が発足した。

8月　卒業式が行なわれ，67名が卒業した。
第20回西日本医科学生綜合体育大会（名古屋市）で24校中15位であった。

8月　札幌医科大学の和田寿郎教授によって8日に宮崎信夫君（18歳）に水難事故死後約4時間の山口義政君（20歳）の心臓が移植されたが，10月29日に死亡した。これは世界で30例目，わが国で最初の心臓移植手術であった。

9月　熊本県水俣湾周辺で昭和28年から35年にかけて発生した第1水俣病（中枢神経を侵し，言語・精神・歩行等の障害をおこすもの）が新日本窒素肥料水俣工場の排液中の水銀による中毒として公害病に認定された。また新潟県阿賀野川下流域で昭和39年から40年にかけて発生した第2水俣病が昭和電工鹿瀬工場の排液中の水銀による中毒として公害病に認定された。

10月　本学の元西構で府立文化芸術会館新築工事が起工された。（京都）

11月　教授（法医学）小片重男が研究科主任を辞任し，教授（生化学）能勢善嗣が研究科主任を命ぜられた。

12月　教授（耳鼻咽喉科学）中村文雄が日本学術会議第8期会員に当選した。

12月　川端康成氏がノーベル文学賞を受賞した。わが国で3人目のノーベル賞受賞者であった。

1969年（昭和44年）

2月　臨床医学学舎建築計画の撤回と教授会との大衆団交を要求して，分校学生自治会が3日から，専門課程学生自治会が10日から無期限ストライキに入った。10日には教授会の会議室へ百数十名の学生が乱入し，徹夜の大衆団交を強行した。11日朝休憩に入ったとき教授会側は団交会場を記念会館に変更したが，学生側はこれに応ぜず，16日夜まで全教授を記念会館内に監禁した。全共闘（全学共闘会議）によって19日には本館の2・3階が占拠され，26日には本館・記念会館が封鎖された。このため，その後の教授会は学外で行なわれた。
大学院修了の学位受領者が100人に達した。

2月　亀岡市に私立京都学園大学が設立された。（京都）

3月　入学試験は試験場である立命館大学（河原町広小路）が紛争中で使用できず，試験場を近畿予備校に変更して実施された。
全共闘によって10日には2号館内の学生課が封鎖され，21日には全学封鎖が企図されたが，警察機動隊によって阻止された。22日には警察機動隊によって学内捜査が行なわれた。28日には大学正門が全共闘によってバリケード封鎖され，全共闘は病院玄関で学長に大衆団交を要求して坐り込んだが，警察機動隊によって排除された。
22日から大学は臨時休業に入って教育業務は停止されたが，研究業務は続けられた。なお，附属病院の診療業務は従来通り行なわれた。
教授（第一病理学）三宅清雄が図書館長に留任した。
大学院医学研究科の募集は中止された。
新入学生には自宅待機が通告された。
教授（生物学）小野喜三郎が停年退職した。

4月　全共闘によって21日に臨床研究棟が封鎖された。

5月　19・20号病舎へ移転していた事務局の封鎖が9日に全共闘によって企図されたが，事務職員によって排除された。

6月　全共闘によって18日に図書館が一時封鎖されたが，すぐに大学職員によって解除された。

教授(第三内科学)増田正典が院長を辞任し，教授(産婦人科学)徳田源市が院長代行に補せられた。

7月　学長兼教授(第一生理学)吉村寿人が学長を辞任し，教授(第二内科学)丸本晋が学長代行に任命された。

教授(産婦人科学)徳田源市が院長を辞任したが，院長代行に再選された。

教授(第一解剖学)佐野豊が学生部長を辞任し，教授(第二病理学)藤田哲也が学生部長代行に補せられた。

教授(第一病理学)三宅清雄が図書館長を辞任し，教授(微生物学)菅沼惇が図書館長代行に補せられた。

教授(生化学)能勢善嗣が研究科主任を辞任し，教授(眼科学)谷道之が研究科主任代行を命ぜられた。

警察機動隊によって30日に臨床研究棟の封鎖が解除された。

8月　5日に事務局が本館に，学生課が2号館に戻り，13日に臨床医学教室が臨床研究棟に戻った。

6日に病院玄関で全共闘と事務職員団との間に衝突がおこり，事務職員側に十数名の負傷者が出たが，全共闘は警察機動隊によって排除された。

今回の大学紛争の発端となった臨床医学学舎建築計画の最終案が暫定建築委員会においてまとめられた。

第21回西日本医科学生綜合体育大会（和歌山市）には大学紛争のため参加しなかった。

9月　1日から授業が再開され，また1日には留年生の卒業試験が行なわれて37名が受験した。全共闘は受験生の追求集会を企図したが，警察機動隊によって排除された。

留年生のうち37名が卒業した。

9月　スモン病調査研究協議会が発足した。

10月　2月以来学外で行なわれていた教授会が学内で行なわれるようになった。

講師高本薫（京大昭和24年卒業）が教授(生物学)に任ぜられた。

元講師小林晴治郎(85歳)が死去した。

11月　医師法改正に基づいて研修医制度が設けられ，研修医規程が制定された。研修期間は2年であった。

長野県北安曇郡小谷村千国（白馬山麓栂池高原)に本学の「山の家」(木造2階建，延坪25坪，総工費370万円)が建設された。

12月　臨床医学教室では副手が廃止されて修練医に切り換えられた。

3月以来中断されていた学術集談会が再開された。

梨木神社境内東南部の土地256.6坪が本学の百周年記念会館建設用地として京都府によって5,950万円で買収された。

冬期休業期間が28日から1月4日までに臨時短縮された。

1970年（昭和45年）

1月　名誉教授角田隆(94歳)が死去した。

1月　元西構に府立文化芸術会館が竣工した。(京都)

2月　研修員規程が新たに制定された。

修練医規程が制定された。

助教授吉田忠勝(京都帝大昭和20年卒業)が教授(人文科学)に任ぜられた。

助教授鯖田豊之(京大昭和27年卒業)が教授(社会科学)に任ぜられた。

3月　大学院医学研究科の基礎系の募集が再開された。

臨床医学学舎改築工事が起工された（三井建設)。

京都府立医科大学学報が3年4ヵ月ぶりで復刊された。

春季休業期間中にも授業・卒業試験が行なわれた。

正規の卒業生とともに留年生56名も卒業した。

教授中村文雄(耳鼻咽喉科学)・吉村寿人(第一生理学)・原俊彦(ドイツ語)・金田弘(放射線医学)・長花操(医動物学)が停年退職し，名誉教授に推薦された(4月)。

教授(精神医学)飯塚礼二が退職した。

助教授(第二内科学)塩津徳晃が教授に昇進

して退職した。
助教授(第一解剖学)大塚長康が岡山大学教授に転出のため退職した。
3月 万国博覧会が大阪(吹田市)で開幕され，9月まで開催された。
元花園分院跡に府立体育館の新築工事が起工された。(京都)
相模原市の北里大学に医学部が設置された。
東京都三鷹市に杏林大学医学部，倉敷市に川崎医科大学が設置された。
4月 講師(生化学)川崎尚が広島大学教授に転出のため退職した。
3学期末試験が25日に終了した。
4月 秋田大学に医学部が設置された。
知事蜷川虎三が第7代公選知事として六選され，第39代の京都府知事に就任した。(京都)
5月 新学期の授業が4日から開始された。
助教授吉田幸雄(本学昭和26年卒業)が教授(医動物学)に任ぜられた。
6月 大阪大学助教授亘弘(阪大昭和28年卒業)が教授(第一生理学)に任ぜられた。
助教授水越治 (本学昭和23年卒業) が教授(耳鼻咽喉科学)に任ぜられた。
学友会通信が青蓮会報(不定期)と改称された。
8月 事務局長三島直介が京都府出納局長に転出し，京都府立大学事務局長鞍岡香一が事務局長に任ぜられた。
第22回西日本医科学生綜合体育大会 (岡山市)で24校中22位であった。
9月 教授(産婦人科学)兼院長代行徳田源市(56歳)が死去し，大学葬が行なわれた。
教授(眼科学)兼研究科主任代行谷道之が院長代行に補せられ，研究科主任代行を辞任した。
助教授(第一生理学)井上太郎が教授に昇進して退職した。
留年生の残り7名が卒業した。
10月 教授(第一内科学)吉田秀雄が研究科主任代行を命ぜられた。
京都府立医科大学同窓医学会が設立された。
10月 大阪大学医学部で大阪大学医学伝習百年記念式典が挙行された。これは大学紛争で1年延期されていたものである。
第11回国勢調査で10月1日現在の京都府の人口は2,250,087人，京都市の人口は1,419,165人であった。(京都)
12月 新制度での論文提出による学位受領者が300人に達した。
花園分院が廃止された。

1971年 (昭和46年)

1月 創立百周年記念事業寄付金募集が開始された。募金目標額は1億円であった。
1月 川崎市に東洋医科大学が設立された。
3月 講師岡田弘二 (本学昭和30年卒業) が教授(産婦人科学)に任ぜられた。
教授(薬理学)小沢俊次が停年退職し，名誉教授に推薦された(4月)。
助教授(第三内科学)葛谷覚元が教授に昇進して退職した。
大学院学生奨学金支給規則が制定された。
3月 東京都の帝京大学に医学部が設置された。
4月 九州大学助教授村上晃一 (九大昭和27年卒業)が教授(放射線医学)に任ぜられた。
神戸大学助教授山本尤(名大昭和30年卒業)が教授(ドイツ語)に任ぜられた。
教授(第二外科学)橋本勇が与謝の海病院長を併任した。
4月 第18回日本医学会総会が東京で開催された。
5月 東京都立松沢病院精神科医長加藤伸勝 (本学昭和25年卒業)が教授 (精神医学) に任ぜられた。
名誉教授河村謙二(68歳)が死去した。
6月 大学に医療センターが付設され，医療センター所長は院長が兼務した。医療センターの助教授・講師・助手は府立の病院の院長・副院長・医長・技師を併任することになった。
大学の広報紙として医大ニュースが創刊された。
7月 分校改築工事が起工された(フジタ工業)。
学長代行兼教授(第二内科学)丸本晋が学長代行を辞任し，教授(小児科学)中村恒男が学長に任命された。
教授(眼科学)谷道之が院長代行を辞任したが，再選され院長に補せられた。
教授(第二病理学)藤田哲也が学生部長代行を辞任し，教授(医動物学)吉田幸雄が学生

部長に補せられた。
教授(微生物学)菅沼惇が図書館長代行を辞任し，教授(第一外科学)間島進が図書館長に補せられた。
教授(第一内科学)吉田秀雄が研究科主任代行を辞任し，教授(皮膚科学)外松茂太郎が研究科主任を命ぜられた。
名誉教授望月成人(80歳)が死去した。

7月　環境庁が設置された。
日本医師会が政府の医療行政に抗議して1日に保険医総辞退（全会員の85%に相当する72,000名)を行なった(8月1日に解除)。

8月　ニューヨーク州立大学教授栗山欣弥（本学昭和32年卒業)が教授(薬理学)に任ぜられた。
第23回西日本医科学生綜合体育大会（京都ブロック)で25校中21位であった。

9月　助教授(薬理学)長谷川栄一が教授に昇進して退職した。

10月　臨床医学学舎（臨床15教室・泌尿器科・歯科・事務局・売店・食堂・喫茶室・クリーニング店・郵便局・その他，地下1階地上6階建，建坪432坪，延坪2,780坪，他に電気室・渡廊下を含め総工費71,300万円）が竣工した。

10月　元花園分院跡に府立体育館が竣工した。(京都)

11月　私立兵庫医科大学(西宮市)・私立名古屋保健衛生大学医学部(愛知県豊明町)が設立された。

12月　教授(第三内科学)増田正典が日本学術会議第9期会員に当選した。

12月　私立愛知医科大学(愛知県久手町)が設立された。

1972年（昭和47年）

1月　私立福岡大学に医学部が設置された。

2月　私立自治医科大学・私立埼玉医科大学が設立された。

3月　教授(第二内科学)丸本晋が停年退職し，名誉教授に推薦された(4月)。

4月　三重県立大学医学部が三重大学医学部となった。

5月　沖縄が日本に復帰し，沖縄県となった。

6月　進学部長が設けられ，教授(物理学)藤喜好文が初代の進学部長に補せられた。
研究科主任が研究部長と改称された。
臨床検査部が正式の部として独立し，部長は教授または助教授とされた。助教授（臨床検査部）仁木偉瑳夫が新臨床検査部の初代の部長に補せられた。
分校が花園学舎と改称された。
大学院修了の学位受領者が200人に達した。

8月　花園学舎(進学課程，地下1階地上5階建，建坪213坪，延坪1,239坪，総工費29,100万円)が竣工した。
第24回西日本医科学生綜合体育大会（長崎市)で25校中16位であった。

9月　梨木神社境内の府買収地256.6坪が百周年記念会館建設用地として京都府から青蓮会に貸与された。

11月　創立100周年記念式典が3日に盛大に挙行された。

12月　創立100周年記念事業の醵金額は13,000万円に達したが，最大の記念事業である百周年記念会館の建設は，梨木神社の買収土地使用問題が難航して，その着工はかなり遅れる見通しとなった。

文　献

1) 京都府医学校校友会雑誌　第1～第26号(明治30年1月～34年10月)
2) 京都府立医学校校友会雑誌　第27～第31号(明治35年2月～36年7月)
3) 京都府立医学専門学校校友会雑誌　第32～第90号(明治36年10月～大正10年5月)
4) 京都府立医科大学校友会雑誌　第91号(大正11年4月)
5) 京都府立医科大学学友会雑誌　第92～第93号(大正11年10月～12年4月)
6) 京都府立医科大学雑誌（学友会発行）　第94～第103号(大正12年9月～15年12月)
7) 京都府立医学専門学校沿革略史(明治41年11月)
8) 京都府立医学専門学校一覧(明治36年8月～大正10年9月，不定期)
9) 京都府立医科大学一覧(大正14年3月～昭和14年5月，不定期)
10) 京都府立医科大学八十年史(昭和30年8月)
11) 京都府立医科大学要覧(昭和36年7月)
12) 京都府統計史料集―百年の統計―(昭和44年3月，45年3月，46年3月)

13) 京都府百年の年表(昭和45年3月,46年3月)
14) 日本科学技術史大系 24医学-1, 25医学-2 (第一法規出版, 昭和45年11月, 12月)
15) 長崎医学百年史(昭和36年3月)
16) 東京大学医学部百年史(思文閣, 昭和42年12月)
17) 大阪大学医学伝習百年史年表 (昭和45年10月)
18) 全国大学一覧(昭和47年7月)
19) 中野操, 日本医事大年表(思文閣, 昭和47年12月)
20) 明治百年年表(朝日年鑑1967年版別刷, 百科便覧, 昭和42年2月)
21) 日本の100年(読売年鑑別刷, 昭和43年4月)

(責任者 山田博)